

くなつたので、有縁の地と鎮守堂に安置し下向した。やがて戦もすみ上洛の際再び金時は當寺に來り、七尺の佛を作り、勅許を得て坂田山東林寺と號した。その後入江を通ふ船も帆を立てたままこの御堂の前を通ると帆が倒れ、道行く人も乗馬のまま通ると落馬するので、尊像を北向とした。それで今も寺の北の小字名を寺前といふ。頼光の死後金時はこの地で餘生を送り、ここで死んだので、寺の附近に埋めて今も金時塚といふ。今「坂田金時靈神舊跡」の碑が建つてゐる。

73 耳塚 (寶飯郡)

小坂井町大字篠東字郷中に耳塚と呼ばれる一坪程の小塚があり、その上に墓石様のものが建つてゐる。この土中には三個の瓶が埋められ、その上に大岩が蓋になつてゐるといふが、この中には佛教破壊者たる信長に抗し根來寺に組した醫王寺、威實院等の僧兵を撃ちとつた耳が埋められてあるといふ。

74 比丘尼塚 (寶飯郡)

前芝村大字日色野字角田に比丘尼塚と呼ばれる塚がある。これはある年熊野から初穂米を集め

に來た比丘尼を下佐脇、下長山、日色野等の人が殺して埋めたところといふ。

75 法印塚 (寶飯郡)

赤坂町御料林東山のうち、俗にいふ法印山の山嶺に法印塚とて四坪ほどの塚がある。昔このあたりに住む法印が野荒をして里人に生理にせられた所といひ、この塚に上るものは死ぬと恐れられてゐた。

76 乙葉塚 (寶飯郡)

長澤村中組谷下の織部屋敷の裏に、乙葉塚又名を犬塚といふ塚がある。これは昔の東海道は宮路山を越えてゐたが、或時山伏(又飛脚ともいふ)が關川あたりで見た白犬が下道を行き、長澤關屋に出で待つことを二三度見かけたので、試みに白犬について行くと今の街道を知つた。この犬の名を乙葉といふので、死後埋めた塚をかく名づけたといふ。

77 四塚 (寶飯郡)

八幡村大字平尾字駒場に四塚といふところがある。これは昔、村人が火が降ることを恐れて地に穴を掘り、内を石で囲んだものを四ツつくつた。それで後世四塚といふ地名まで出来た。

78 音 羽 塚 (寶飯郡)

長澤村字音羽に音羽塚又段塚ともいひ、五段になつてゐた塚があるが、天明三年領主の命により下四段を開發して耕地としたが、之に従事したものすべて狂人となり又疫病にかつた。それで今でもこの塚には人が恐れて近よらない。

79 風 鈴 塚 (寶飯郡)

御油町大通寺の池の傍の田中に風鈴塚と呼ばれる塚がある。村人が通行の邪魔になるので取りかたつけようとしたら、「風鈴」といつた。驚いてかたつけるのをやめ風鈴塚と名づけたといふ。

80 塚 穴 (寶飯郡)

西浦村字東山一本木下にある塚穴は、綱吉公悪政の結果、祐天和尙が「天より火雨降る」と豫

言し、その難を避けるために造つたものといふが、家宣公に到り善政を布いたので、このことがなかつたといふ。塚穴はこの村に向一ヶ所あつたが、それは開墾のため破壊されてしまつた。

81 膳 塚 (寶飯郡)

形原町妙嚴寺の裏に膳塚と呼ばれる塚がある。この塚は昔三太夫といふ百姓が友人の庄九郎といふ百姓に金を貸し、その代りに庄九郎の家資時繪の膳を持つて行つたので、庄九郎は氣狂になり死んでしまつた。その庄九郎を埋めた塚ださうで、それから、法事や慶事に膳が入用の時には「膳を何人分貸して下さい」と願ふと、明朝そろへてあつたといふが、或時村人の一人が借りた膳を損じたまゝ繕もせず返しておいたので、それからはいくらたのんでも膳を貸してもらへなくなつたといふ。

82 椀 貸 塚 (寶飯郡)

蒲郡町大字蒲郡字麻島に椀貸塚といふ塚があつた。今は古石が二三存してゐるのみであるが、昔は慶事や祭禮の時には里人この塚に到つて明日膳椀何人前貸して下さいと願つて、翌朝行つて

みると塚の前に並んでゐる。用済み次第返してゐたが、ある時里人の一人一品を損じたまゝ返したので、それからは貸してくれなくなつたといふ。

83 火 穴 (温美郡)

二川町大字大岩の火打坂、松明峠、谷川雨應山等の山麓にある穴は、昔火が降つた時里人ここに隠れたもので火穴といふ。

84 八 人 塚 (温美郡)

田原町大字大久保の西山に昔から八人塚と稱する塚があつて、其の傍に松の老樹があつた。慶應年間長興寺を建立するとき之れを倒して其の用木とした。處が敷地組の大工の棟梁中神某を始として大工・木挽等のこれに關係したるもの悉く疫病に罹り、皆等しく讒語を述べて曰く、「吾等八人は古、戦に敗れて討死したもので、其の後靈魂はこの古松に宿りしが、今は伐倒されて行くに處がない」と。茲に村人驚き恐れ、新に碑を建て、供養した。患者は間もなく全快したといふ。現存する碑の正面には

八 人 塚

此處從往古號八人塚々
而已有之其故無知人也
傍有古松一株伐成本山
用木係之人々皆被惱疫
鬼依而今辰設供養立石
誌慰亡魂者也

とあり向つて左側に「當村敷地瀬古中」とあり、右側に「維時慶應二丙寅年正月」とある。

85 お 犬 塚 (温美郡)

田原町大字田原字藤七原にあるお犬塚は、秀忠公田原に巻狩を遊ばされた時、愛犬を失ひ、それを埋めた塚だといふ。今は字名になつて居る。

86 火 塚 (八名郡)

八名村大字中宇利字會根から瀧山に登る道の傍に、火塚と呼ぶ塚がある。大昔火が降つた時、土を盛り上げ、この中に人が住んで居たところだといふ。

八、地名の由来

1 鶯谷 (名古屋市)

中區上日置町白山神社の邊を、昔鶯谷と呼んだ。こゝは鶯が名物でその聲が至つてよかつた。或ひは白い鶯が出るともいつた。

2 西行法師 (名古屋市)

南區熱田の宮に西行が参詣して、

かくばかり木かげ涼しき宮なるを誰かあつたと名づけそめけん

とつぶやきつゝ此所彼所と見巡りあるいてゐると、何處から來たのか白衣の人が出迎へて、

やよ法師あづまの方に行きながらなど西行と名のりそめけん

と返したので、西行は驚いてこれは定めて大明神の御答であらうと、後をもかへりみず逃去つた

とよ。

世に熱田西行といふ木遣歌がある。

3 千本松原 (名古屋市)

中區末廣町の邊から熱田の旗屋町あたりまで、凡そ二十丁程の並木の松原を千本松原といつた。永祿三年に、織田信長が桶峽合戦の時、日置の八幡に祈願し、戦勝の後千本の松を植ゑ添へたと言ひ傳へてゐる。

4 吹上の里 (名古屋市)

東區千種町の吹上は往昔應神天皇の神靈が、小舟にてこの小丘に漂着あそばされたので、地名は神吹上の意だといふ。後之を高牟神社に配祀した。御神體は小舟に御座あそばしてゐる。

5 鐵砲池 (名古屋市)

東區千種町字振甫にある鐵砲池は、舊藩時代の射撃場のあつた鐵砲坂に隣接してゐたので、こ

の名があるといふ。

6 振甫池 (名古屋市)

東區千種町字振甫池のある所は、昔尾張藩に仕へた茶人張振甫の茶室があつた所だといふ。今は振甫プールとして世に知られてゐる。

7 まんのひあひ (名古屋市)

南區熱田市場町布瀑女にマンノヒアヒと言ふ小徑があつた。其處は妖怪が出るので、夜陰に人の往來するものもなかつた。それで魔の桶合と云つたといふ。一説には弘法大師が此の道を參宮道と定められ、曼陀羅の桶合とも云ひ、後世誤つてマンノヒアヒと傳へられてゐる。

8 沓掛 (愛知郡)

豊明村大字沓掛もと兩村といひ、昔から街道の驛のあつた所で、店の軒端に藁沓を吊して賣つてゐた。在五中將東下りの折、之を見られ名を沓掛と改められたといふ。

9 日本武尊に関する地名傳説 (東春日井郡)

坂下町には所々に日本武尊に関する地名がある。尊は東夷御平定の歸路、美濃から尾張へ入られた。ところが篠木の地で、副將建稻種命の薨去を聞召されていたくお嘆きになつて、「現哉現哉」と仰せられた所が、今の「内津」の里であるといふ。尊は建稻種命の靈を内々神社にお祀りになり、「西尾」でも一度「内津」の方をふり返られた、その時岩の上に馬蹄の跡が鮮やかに刻まれた。これを「駒の爪」といつてゐる。尊は更に馬を進められて「神屋」の地で夜營をなされ、翌朝「御手洗」の水にて御用を遊ばされ、曉の方を御拜になつたといふ。それが「明知」の地名の起源だと傳へてゐる。

10 庄 中 (東春日井郡)

旭村大字印場に庄中といふ所がある。こゝは山田庄の真中といふ意であるといふ。この印場に天武天皇の悠基齋田跡といふのがある。

11 空騒ぎの地 (西春日井郡)

水野村大字下水野に唐澤といふ地がある。これは徳川八代將軍が、紀伊から入つて將軍職を繼ぐにあつて、尾州では、御三家の隨一でありながら、他家に將軍職を奪はれるのを遺憾に思つて、藩士等がこゝに集つて示威運動をしたが、何等の功を奏せなかつた。全く空騒ぎに終つたので、その地を唐澤と稱するやうになつたと傳へてゐる。

12 御鶴街道 (西春日井郡)

山田村の御鶴街道は、舊役場の裏にある細徑で清洲に通ずる街道である。信長が鷹狩の獲物鶴を運んでから、此の名が起つたと云ひ傳へてゐる。

13 辨慶傳説 (西春日井郡)

豊山村岡山にこんな傳説がある。昔、辨慶が土を掘つて大モッコで荷ひ上げた事があつた。其の土を取つた跡が入鹿の池となり、土をあげた所に尾張富士が出来上つた。又其のモッコに附着

してゐた土を振つたら、小牧山が出来た。其の歸途この地を通り、草鞋に着いてゐた土を振つたらこの岡山が出来たと傳へてゐる。

14 幸野 (丹羽郡)

扶桑村大字山那に幸野といふ所がある。古老の話によると、大昔、後醍醐天皇が吉野から御しのびで行幸になつた處だから幸野といふと。

15 馬取池 (葉栗郡)

木曾川町大字黒田の白山社の西北に昔古池があつた。白山社の御手洗池であるといふ。或る農夫が昔の鎌倉街道を馬を曳いて来て、この池の附近で休んでゐると、知らぬ間にこの池の主の大蛇が馬を池中に引込んでしまつた。それからこの池を馬取池といふやうになつたさうである。

16 物見塚 (中島郡)

祖父江町にある。この塚は昔物部朝臣が戦争の際、物見をして遂に討死された地といふ。近く

に矢留と稱する地がある。物部塚ともいふ。

17 源氏島 (海部郡)

蟹江町大村西三森に源氏ヶ島といふ所がある。平治の亂後源義朝公が東國へ遁れんとして、美濃國青墓から柴舟に乗り、知多郡野間村へ渡る道中、此所で暫く休息された所だといふ。

18 供米田と米出道 (海部郡)

富田村大字供米田は、昔熱田神宮の供米を獻する田があつたので此の名がある。尙當字内に米出し道と呼ぶ道路もあつて、此の道を通つて熱田へ供饌に行つたのだといふ。

19 槍場高根とお成道 (知多郡)

承德年間尾張の殿様が、三和村を御巡遊になつて大字久米の槍場高根迄お出になつた時、眺めが特によろしかつたので暫く供人に槍を置かせて御休息になつた。此所をそれより槍場高根といふやうになつたといふ。久米より此所へ通する道をお成道といふ。

20 檜原 (知多郡)

西浦町大字檜原は、鎌倉時代に檜の良材を産し北條氏の莊園となつたといふ。園城寺、伊勢神宮、熱田神宮の御用材となつたことも傳へられてゐる。檜林の茂つた山中に柚の小屋があり、それが村里を成し今の檜原區になつたのだといふ。

21 隠戸 (知多郡)

師崎町大字師崎に隠戸といふ所がある。昔外敵を受けた時、老幼女人等を避難させた所だといふ。

22 佛山

師崎町大字大井の佛山に昔、行基菩薩の創建にかゝはる醫王寺があつた。一山十二坊七堂伽藍が山中に聳え立つてゐたといふ。後兵火に焼かれて灰燼となつたが行基菩薩御作の本尊薬師如来だけは難をのがれ、大井の醫王寺に移轉再興し安置されたものといふ。

23 一本木 (知多郡)

旭村の羽根の東方高地に松の老大木があつた。遙か遠方より眺望されて陸上よりも海上よりも「羽根の一本木」として目印にされてゐたといふ。(大正四年七月無風の快晴の日に不思議にも倒れて仕舞つた。)其の附近一帯を俗に一本木といふ。

24 業平と御所 (知多郡)

上野村富田に俗に御所といふ所がある。昔在原業平朝臣が住んで居た所といひ、又同地に業平と呼ぶ所があるが此所には業平の葬られた所と傳へられる石碑がある。

(昔話の部 在原業平参照)

25 半月 (知多郡)

大府町半月は、昔悪七兵衛景清が半月の間、此所の竹藪の中に隠れて居た所といふ。景清は岡田町より此所へ来て半月の後、東國へ出立したと傳へらる。

地名の由来

(城址屋敷址等の話の部 景清の隠れ藪参照)

26 おしよき場 (知多郡)

半田町岩滑に俗におしよき場といふ所がある。昔罪人を刑した刑場の跡と傳へられ、無縁佛菩提のため庚申堂や地藏堂がある。

27 浦島・負龜 (知多郡)

富貴村の浦島といふ所は、昔浦島太郎が居た所だといひ、同村の負龜といふ所は、浦島太郎が此所から龜に乗つて龍宮へ行つたのだといふ。(浦島には龍宮を祀つてゐる)

28 鐘 鑄 (知多郡)

富貴村の鐘鑄は昔隣村布土村の心月齋の大鐘を鑄造した所だといふ。

29 堂前と堂前池 (知多郡)

小鈴谷村上野間に俗に堂前又は御堂前といふ所がある。昔大日如來を祠つた一字の御堂があつ

た所で(現在は東山に移さる)上野間郷の發祥地だと傳ふ。附近にある大池を堂前池(一名鶴の池)と云ふ。

30 岩 崎 (豊橋市)

岩崎町の名は昔米山の東頂に鎮座してゐた岩崎天神が、後世山麓の岩鼻といふところへ遷座し明治維新にまで及んでゐたので、この社名によつたといふ。岩崎神社は現に鞍掛神社に合祀せられてゐる。

31 葦 毛 (豊橋市)

岩崎町字葦毛の地は頼朝上洛の時この地にて乗馬俄に病死した。其馬葦毛にてこの地の南の山へ埋めたので稱して葦毛といつた。

32 馬 見 塚 (豊橋市)

船町、港町、關屋町の河岸、船町の大橋から朝倉川の河口にいたる豊川縁り一帯を昔は馬見塚

地名の由来

といつた。それは當時姫島に伊勢の大神宮の神馬が放たれてゐて、よく晴れた日にはそこから神馬が見えたのでその名がある。

今の馬見塚町は、元の馬見塚に居た豪族渡邊平内治が、築城のため立退きを命ぜられて移つた場所で、馬見塚の地名をそのまま用ひたといふ。

33 手洗 (豊橋市)

岩崎町字手洗の地は、普門寺へ行く道の傍にある小さな池で昔頼朝が手を洗はれたのでこの名があるといふ。

34 お弓橋 (豊橋市)

東田町にある東田神社の裏手の朝倉川にお弓橋といふ橋が架けられてあつた。今は新道が開け立派な橋になつて西脇橋とつけかへられてあるが、土地の人はまだお弓橋と呼んでゐる。幕末の頃牛川村(現牛川町)に、吉田城主から苗字帯刀を許された兵太左の娘お弓が淨瑠璃を習ふといふので、當時河原町(現瓦町)に住んでゐた某が師匠に選ばれた。師匠が出入するうちに二人は懇

になつた。男がお弓の所に通ふ道はひどく遠かつたので、お弓は下男に命じ朝倉川へ橋を架けさせた。人呼んでお弓橋といふ。

35 二連木 (豊橋市)

東田町の北部をもと二連木といつたが、これは昔このあたりに楡の大木があつたので楡木、それが二連木とかはつたといふ。今も尙二連木と呼ばれてゐる。

36 七つ井の里 (碧海郡)

昔安城町を七つ井の里と呼んだ。當時今の碧海郡地方は大部分海で、飲用のために井戸を發掘しても多くは潮水が滲入して用をなさなかつた。依つて本村西北の丘陵地に、良質の地下水を覓め、七つの井戸を掘つて本村及び隣郷村民の飯用に供したと傳へられる。筒井・淺黄井・中井・櫻井・柳井・梅井・風呂井の七井が之で何れも其の形状を存し、今以て飲料に供するものもある。

37 鐘池 (碧海郡)

矢作町大字上佐々木の東南に鐘池の地名がある。昔矢作川合戦の折足利の軍勢が上宮寺に亂入して之を焼き鐘を奪つた。

その時鐘が自然に鳴つたので心持悪くなり、該地の池に投げ込んで、逃走したものであるといふ。今此の地は田となつてゐる。

38 釜ヶ淵 (碧海郡)

安城町大字福釜の西に釜ヶ淵と呼ぶ所がある。昔此の地が數日間鳴動した。或る好い爺さんが其處を調べたら黄金の釜らしいものが吹き出してゐた。爺さんが驚いて家に歸つてその事を婆さんに告げた。意地の悪い婆さんが早速行つて見ると、釜は忽ち地の中へ這入つてしまつた。それから爺さんが行くと釜は再び吹き出した。爺さんが其の釜を拾ひ上げて家に歸つて婆さんに見せると、婆さんは大變怒つてその釜を擲りつけた。すると釜は「知立明神へ行きたい」と言つて泣き叫ぶので、村人は直ちに知立明神へ獻納したとのことである。一説にはその釜に「知立明神」の銘があつたから、知立明神へ奉獻したとも傳へてゐる。それ以來此の地を「釜ヶ淵」と呼び村の名を「吹釜」と稱したが、この「吹釜」がいつしか「福釜」と書かれるやうになつたのであるといふ。

39 矢作の由來 (碧海郡)

矢作町は往古蓬の里と稱したが、景行天皇の御宇日本武尊御東征の途此の地に到り給ひし時、夷賊駿河より進みて皇軍を高石山に邀へ戦はん由を聞き召され、軍を整へ且村人に命じて數多の矢を作らせ給ひ、遂に進みて大捷を得給うた。是より里の名を矢作と呼び八脛、矢矧、矢矯、箭作等と書かれたのである。又其の矢に用ひた竹を採つた所を矢竹藪と稱し、今尙ほ矢作神社境内長瀬八幡宮の社内、大字宇頭宇小藪、西牧内宇河原等各所に其の遺跡を存してゐる。

40 三鹿の渡 (額田郡)

岩津町大字大門の八劍神社は矢作川に臨んだ森に在つて、此の地を古くから三鹿の渡と呼ぶ。永祿三年桶狭間の陣の際、徳川家康は大高城に在つて義元の敗死を聞き、遁れて大樹寺に向はれた。矢作川西岸まで來られた時、恰も水漲つて渡ることを得ず大いに困惑して居ると、對岸八劍神社の老松、鹿三頭に變じて公を乗せ大門の郷に着かれた。之より走つて大樹寺に入り、身を助くることを得た。家康大いに感じて之を三鹿の渡と名づけられたと。

41 衣文の里 (額田郡)

本宿村衣文の地に昔老婆があつた。杖とも柱とも頼む一人娘が臨月に及んで頓死したので、老婆が非常に悲しみ、娘の後世の安樂を願ふため日夜花籠の觀世音に參拜祈願した。或る日參詣の際一人の老僧が何處からともなく現はれ、衣の袖から一通の文を落して立ち去つた。老婆が之を拾つて開けて見たら、地下の娘が安産をした由が書いてあつたので早速掘り返してみたら、玉のやうな女の子が現はれたといふ。

42 天ヶ峯 (東加茂郡)

松平村大字仁王は戸數十數戸の小部落である。此の仁王の北側に奇石怪岩重疊する一峯があつて俗に天ヶ峯と呼んでゐる。昔徳川氏の祖親氏が未だ松平郷に居つた頃、此の峯に登つて天下平定を祈願したと傳へられ、山麓に天下山安全寺を創建して山門に仁王像を奉獻した。大字仁王の稱もこの時から起つたと。

43 シヤグヂの村神 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯字尺地にある小祠は、昔檢地の時使用した尺を納め祠つたのでその名がつき、今は字名にもなつてゐる。

44 トヤネ (北設楽郡)

段嶺村大字田峯字中根にあるトヤネと云ふ所は、昔城のあつた頃、鷹の鳥屋のあつた所といふ。

45 ノノバネと矢落 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯字前下にあるノノバネは昔、城の將士弓の稽古の時、逸矢を受けるため布を張つた場で、矢落とは矢の落ちた所だといふ。

46 鹽津 (北設楽郡)

田口町大字清崎字鹽津から昔は鹽が出て、村中の用にあてゝゐたが、或時慈深の村人がよその

地名の由来

村へ賣つたので、それから鹽が出なくなつたといふ。鹽津とは鹽が出たのでその名があるといふ。

47 王子畑 (北設楽郡)

上津具村の大地畑はもと王子畑といふ。尹良親王がこの地に御休みになつたのでその地に王子の神として祀るといふ。又一説に弘文天皇の御一族、紀早雄といふ方がこの地に御避難あらせられ、御薨去の後御祀りしたところともいふ。

48 蕨 (北設楽郡)

豊根村大字坂宇場字川宇蓮御所平の一部を「蕨」といつてゐるが、これは、尹良親王が賊軍に追はれる途中飢えられ、この地にある石の上にて野原を御覧になると蕨があるので、生のまゝそれをお召しになつたといふ。今でも田の中にあるその石の上に乗つて、そこから見える所に生えてゐる蕨は生の儘で喰べられると。

49 矢矧川 (北設楽郡)

武節村大字川手の川手城主川手某は弓の名人であり、川向ひの美濃國惠那郡申原村字岩倉の岩倉城主岩倉某は鐵砲の名人であつた。或時川をはさんで兩方から弓と鐵砲を射ち合ふと川の上で弾と矢と當つて矢が二つにさけて川に落ちた。それでこの川を矢矧川といふ。

50 川手 (北設楽郡)

武節村大字川手は、昔川合村といつてゐたが、日本武尊御東征の際、川合村の長、武器輸送を承り、水上の運輸は川合村一手で引受けたので、尊其功を賞し、川手村と改稱せられたといふ。

51 六部峠 (北設楽郡)

武節村大字小田木の六部峠を越して少し下ると池畔に供養塔がある。文久年間に一人の六部がこの村に来て一夜の宿を乞ふたが、その夜から發病し、長く病んで死んだので、村人はこゝに埋めて供養塔を建てた。そしてその峠を六部峠といふやうになつた。

52 妙巖 (北設楽郡)

地名の由来

武節村大字小田木字妙嚴の地には昔妙嚴寺といふ寺があつて、稻荷様を祀り、裏山には狐が多く居たさうである。その稻荷は寶飯郡豊川稻荷へ移してしまつた。

53 餅 洗 場 (北設楽郡)

武節村大字小田木の餅洗場といふのは、昔飢饉があつた時土地の人々が蕨餅を造るため、そこを流れてゐる川で蕨を洗つた所だったのでその名がついたといふ。

54 風呂洞と御所屋 (北設楽郡)

武節村大字黒田の正壽寺の境内の風呂洞と呼ぶ所は尹良親王が御入浴遊ばされた場所といふ。尙、この寺の裏山の御所屋といふ所は親王が御所貝津から毎日小鳥を探りに來られた場所といふ。

55 鍵 掛 (北設楽郡)

振草村大字平山の岩小屋城東涯に鍵掛といふ所があるが、此處は岩小屋城が岩上にあつて糧食

の運搬が不自由であるので鍵によつて、引掛け上げた所であるといふ。

56 鐵 砲 燒 (北設楽郡)

振草村大字上栗代に鐵砲燒といふ所がある。昔栗代では大字小林と共同で一の宮と二の宮の二柱の神を祀つてゐた。或時二字の人が口論して、遂に小林方の人々は一の宮の御神體を盗みに出かけた。栗代方の人々は之を知り鐵砲を持ち出して山の中腹に陣取り見張をしてゐたが、小林方が來ないので焚火をしてあたりながら待つうち、皆眠くなつて鐵砲を焚火の傍に置いて寢込んでしまつた。目を覺した時には小林方は抜道から來て御神體を盗み去つた後で、傍の鐵砲は火が燃え移つて燒けてしまつてゐた。それからこの地を鐵砲燒といふやうになつた。

57 お 姫 道 (北設楽郡)

振草村大字上栗代地内の山腹にお姫道とて、昔草すり姫といふ方が情人のもとに通はれたといふ細道がある。そのためかこの道には草が生えぬといふ。

58 岩屋と馬屋入とかくれ簀 (北設楽郡)

振草村大字小林に大小二つの岩屋がある。これは天正年間落武者亂入し、百姓避難せし岩穴といふ。又この山林の馬屋入といふ所はこの時村の馬を集めかくして置いた所、同字の中央「かくれ簀」はこの時村の若者がかくれた簀だといふ。

59 白山と岩屋窪と日の行場と斷食窪 (北設楽郡)

振草村の川合の白山といふ所は、昔京から一人の聖者が来て修業をしたところで、今の白山神社はその人の創立になるといふ。附近の岩屋窪は行者が住んでゐた所、日の行場は日の出を迎へて行をした所、斷食窪は斷食行をした所で、そこには逆さ竹が生えてゐるといふ。

60 月 (北設楽郡)

御殿村大字月の地名は槻神社の槻から出たものといふ。今の郷社の槻神社はもと引田の林家の西の川端にあつたもので、そこには槻の大木があり、其の枝は附近數ヶ村まで伸びてゐたといふ。

又一説には地勢の上から、北に高いので南より常に月光をうけ、其形三ヶ月に似るところから起つたともいふ。

61 御殿山 (北設楽郡)

御殿村大字月の御殿山は文武天皇が未だ御位に即かせ給はぬ頃、この地に幸し、山麓に御館を營まれたのでその名があるといふ。

又一説には持統天皇が三河國に行幸の際、この山麓に御殿を營まれたとも、何れの御代にか皇子がこの麓に居ましたのでその名があるともいふ。

62 竹園 (北設楽郡)

御殿村大字月の竹園といふのは手塚太郎の孫千代姫が御殿山への途中行倒れ、手にしてゐた竹の杖ををいた所だと。その杖に根が生えて倒竹が生じたといふ。

63 加賀野 (北設楽郡)

地名の由来

御殿村大字中設樂字加賀野は昔加賀から来た老婆によつて開かれた地だといふ。こゝの氏神を樂一王神といつて、もとはもつと西の山麓にあり、こゝに杉の大木があつたさうで、木の根祭といつてその根元にお祀りしてあつたといふ。この神木は加賀から来た老婆の植ゑたもので圍りが五丈八尺もあつたさうだが嘉永年間に枯れてしまつたといふ。

64 平家澤と源氏アラシ (北設樂郡)

三輪村大字川合の平家澤は、昔木曾義仲が平家の軍を追ひこんで散々戦つたところといふ。又源氏アラシは義仲の軍が陣立をした所だといふ。

65 浅井 (北設樂郡)

本郷町大字本郷字浅井の鈴木某の家の横によい水の出る古井戸がある。この井戸は朝日に面したよい地勢で加井戸といつて、昔この附近の人々にとつて大切な飲料水だつたさうな。この井戸の名からこの附近を今浅井といつてゐる。

66 エギチ (北設樂郡)

本郷町大字本郷、東山の麓にエギチといふ所がある。こゝに昔大きな寺があつてエング寺といつたが、山崩のため寺は失はれたが、地名だけが残つてゐるのだといふ。

76 佛のもと (北設樂郡)

本郷町大字本郷、三ツ瀬オロン澤の奥は、急峻な岩山つづきの峯が走つてとり圍んでゐる。河内と深谷と三ツ瀬の三部落の取合せた秀峰に「佛のもと」といつて、石の苔蒸した小祠がある。こゝから峯傳ひに風來寺へ行くことが出来る。昔高野聖(又長袖とも云ふ)が風來寺から峰稚兒様を盗み出して山傳ひに逃げのびて来た。ところが深谷の夕立岩へ行き當つてどうにもならず、又引返して来て、佛のもとへ出たが此處も岩山で下りることが出来ぬ。仕方なく腰紐でお稚兒を結んで岩の上から吊り降さうとしたが、紐が切れ稚兒は死んでしまつた。聖も飢と疲れと悲しさでその場に死んでしまつた。今の石祠はその後村人が供養のため建てたのだといふ。

68 矢 高 (南設楽郡)

作手村大字大和田に矢高と呼ばれるところがある。この地は昔一人の六部が観音像を背負ひこ
こまで来ると足が進まなくなつたので、傍の家に憩ひ又観音像を背負はんとしたが、如何しても
動かなくなつた。六部は家人に「自分は田峯の矢高から来たが観音像が動かないのは此の地も矢
高であらう。どうかこゝで観音像を祀つてもらひたい」と観音像を置いて立ち去つた。それで今
でもこの地のことを矢高と呼び、又其の観音像も村人の手によつて宇内の慶雲寺境内の一字に祀
られてゐる。

69 徳 衛 (南設楽郡)

作手村大字大和田の徳衛といふものは、昔旅人が作手村鴨ヶ谷方面から来て道に迷ひ「おいお
し」と十聲呼ばつたので、そのあたりを徳衛(十聲)といふ。

70 釜 蓋 (南設楽郡)

作手村赤羽根に釜蓋の地名がある。ある時豊橋の人が同村清岳字市場へ金を請取りに来ての歸
途、同村赤羽根山中を通つた時、同村の白鳥字相月の矢七、藤七といふ盗賊待ち伏せこの人を殺
し金を奪つて歸宅したところ、釜が鳴つてゐたので驚いてゐると、其の内に釜の蓋が廻り出し、
同時に槌も廻つてさきの男を殺した所へ行つて止つた。それで釜蓋の地名が出来た。

71 行 者 越 (南設楽郡)

鳳來寺村東照宮裏手に行者越と呼ばれる所がある。昔岡崎某氏の妻盜賊と家出したので、某甲
州に到り一儲けせんと、先づ鳳來寺東照宮に參詣し、東の坂道を越えんとしたが、日が暮れて困
つた。その時燈を見つけたので一夜の宿を乞ふと先の妻が出て来た。妻は驚き詫び男を山中の藥
師寺に宿らしめた。山賊は歸宅して之を聞き前罪を悔ひ、この奥坂にて行者となつた。故にこの
名がある。

妻は岡崎に歸つて後自殺したが、某は甲州に出て成功したといふ。

72 袖 切 橋 (寶飯郡)

地名の由来

一宮村大字上長山に袖切橋といふ小橋がある。戦國時代に當村足山田城山合戦の時、城にゐた某の姫が逃れてこの橋下にひそんでゐたが、遂に見つけられて斬られた。折よく村人が通りかゝり姫を介抱したが、姫は「我が死後は今日を命日として必ず弔はれんことを」と言ひ遺して息が絶えた。それからこの橋を袖切橋と名づけて、毎年其冥福を祈つた。

○ 73 牛 窪 (寶飯郡)

牛久保町の名は明應の昔、牧野氏この地に來た時、天王の御手洗金色清水の窪溜に牛が伏し、往來の人々は除けて通つて居たが、牧野氏には牛起き上り道を開いたので、めでたいと、それまで一色の名を牛窪と改めた。

74 宮 井 戸 (寶飯郡)

牛久保町大字行明の行明神社の境内のあたりを宮井戸といふ。これは大寶二年持統天皇星野の里へ御幸あらせられた時清水を汲んで獻じたところで、現在もこゝに宮井戸と呼ぶ池がある。

75 こだが橋と走川 (寶飯郡)

小坂井町大字小坂井字走川と八幡田との境橋をこ다가橋といふ。昔からこの地の菟足神社に犠牲を奉るのが習であつたが、それは春の大祭當日この橋を最初に通る年若の女を捕へて奉るのであつた。ある年の大祭に贅狩に奉仕する人は早朝橋の袂にひそんでゐると、最初に通りかゝつたのは、他家へ縁づいてゐる自分の娘であつたが、「こ다가」止むを得ず捕へて神に奉つた。それでこの名がある。又捕へんとした時娘が走り逃げようとしたのでこの川を走川といふ。

76 篠 塚 (寶飯郡)

小坂井町大字篠塚は日本武尊東征の際、このあたり志香須賀渡まで來られた時、増水にて二三日こゝに宿されたが、附近に篠竹が繁つてゐたので、これにて矢を作らしめ給ふた。それでこの地を篠塚といふ。

77 伊 奈 (寶飯郡)

地名の由來

小坂井町伊奈の地は昔稻葉野といつたが、次第に人家が出来、稲田もふえ、秋のとり入時には稲村が立ちならぶので、稲村となり、伊奈村となつたといふ。

又昔本多某が信濃の伊奈から来て城を構へたのでその名があるともいふ。

78 馬洗 (寶飯郡)

赤坂町宮路山の麓に馬洗といふ所があるが、昔このあたりに騎士が住んでゐて、こゝで馬を洗つたのでその名があるといふ。この武士が馬洗に住んでゐた鬼を退治して、里人の難を救つたので、山麓の宮道天神社の祭禮には、鳥居のあたりに、鬼と大刀を抜いた武士を飾るのがそれであるといふ。

79 鐘割坂 (寶飯郡)

御津町大字金野に鐘割坂といふ坂があり、このあたりを鐘割村といつた。これは昔辨慶が、八幡村國分寺の鐘を陣鐘にせんと持出し、この地まで来たところ、鐘が「國分寺戀し國分寺戀し」と唸り出したので、驚いて路傍の大石に打ちつけると、今度は「國分寺」と唸り出して鐘が破れた。

それからこの坂を鐘割坂、このあたりを鐘割村といふやうになつたといふ。

80 萩村 (寶飯郡)

萩村は昔萩の名所と傳へられてゐる。

81 座頭歸らず (寶飯郡)

八幡村大字平尾字稻束に「座頭歸らず」といふ澤がある。これは昔、この澤に座頭が入りこんで遂にかへれなかつたのでその名がついたといふ。

82 丹野 (寶飯郡)

大塚村大字相樂の地は昔丹野といつた。それは御堂山へ仙人が来て百草を採り、丹を煉り、諸人に施薬したのでその名があるといふ。

83 追坂 (寶飯郡)

長澤村に蛇穴といふ處があり、今の字高樋に追坂といふところがある。山崩のため、今は名のみ残つてゐるが、昔こゝに大蛇棲み、ために聖徳太子の御馬が進まなかつたのでその名がある。

84 御 油 (寶飯郡)

御油町の名は昔持統天皇が宮路山に行幸になつた時、こゝから油を獻じたのでその名がついたと云ふ。

85 蠅 田 (寶飯郡)

西浦村字橋田の地は昔蠅田といつてゐた。それは家康公が田原に鷹狩に行かれた歸途、船にて西浦村明柄の地に上陸されたので、松並木に假の御殿を作り休まれた。時は六月で蠅が多く「蠅の澤山居る所だ」と困られたので、それからこゝを蠅田、假御殿を作られた所を薄御殿といふやうになつた。

86 鐵 砲 (寶飯郡)

鹽津村大字柏原字鐵砲の地は、鴉殿城築えた頃鐵砲鍛冶職の町があつたところといふ。

87 雀 ケ 森 (寶飯郡)

鹽津村大字竹谷字油井の雀ヶ森は一に涼の森ともいひ、昔藤原俊成卿納涼地といふ。尙このあたり鹽津、三谷、蒲郡等は俊成卿の開發の地であるといふ。

88 五 井 (寶飯郡)

蒲郡町大字五井の地名は行基菩薩山中に岩屋を結び千手觀音を刻み、その佛に水を捧げるために井戸を掘り、後更に四つを掘り五井といふ。

89 寶 川 (寶飯郡)

一宮村大字上長山の松源院は昔本宮山の中腹にあつて、今その地を寺跡とよんでゐる。或年大雨が降り、この松源院の寶物が流れ出し、一は今の松源院のあたりにつき、他は今の砥鹿神社の御手洗池附近に漂着したといふ。豊川の上流、本宮山麓のあたりを寶川といふのは寶物の流れた

地名の由来

川によつて名づけられたものといふ。

90 徒ヶ谷・燧ヶ谷・神座ヶ谷 (渥美郡)

二川町大字大岩の燧山(松炬峠)を中心とする地方は、日本武尊東夷御征伐の途中、矢矧川の邊にて、この燧山に夷ども多く籠るをきゝ軍を進め御征討遊ばされた地といふ。今に燧山に西面する山の北谷を徒ヶ谷、中の谷を燧ヶ谷、南の谷を神座ヶ谷といひ、神座ヶ谷の南山背を阿矢撰峠といふ。徒ヶ谷は夷の籠つた谷、燧ヶ谷は燧山よりおこり、神座ヶ谷は尊此の山背にて夷を討たれたところといふ。

91 船戸・物見塚 (渥美郡)

神戸村字漆田の久丸神社の祭神久丸王は船にて相川村豊島字前田に至り、陸にのぼられ、丘に立つて四方を眺め、神の釜にて暫く止まり後神戸に來られたといふ。上陸された所を船戸、四方を眺められた丘を物見塚といふ。神の釜は杉山村字六連地内にある。

92 神 別 坂 (渥美郡)

老津村字池上にある神別坂といふのは昔海を渡つて老津村に來られた諸神が村の七兵衛の案内にて此所まで來られ、一部の神々は渥美郡神戸村へ、他の神々は八名郡石卷山へ別れられたのでこの名があるといふ。

93 行 基 山 (渥美郡)

二川町大字小松原にある行基山の名は、天平曆應五年正月熊野郡智山大權現この地に來現して行基菩薩と對談されたに依つて名づけたものといふ。山上に行基菩薩の碑がある。

94 夜光石・光岬 (渥美郡)

田原町大字波瀬の沖磯の海底に夜毎光るものがあり、沖合を通る船は帆を下げないと進むことが出来ないで、村民は不思議に思つて網で揚げると三箇の夜光石を得たので、この海岸の字名を夜光石、岬を光岬といふ。この地の郷土河合氏夜光石を祀り鳴雷遠音神といふ。今は全村の氏

神として崇む。

又一説にこの夜一夜自ら陸にのぼつたので懼れ之を御神體として祀つたが、其社殿が海に向いてゐたので沖を通る船は帆を上げて過ることが出来なかつた。それで海を背にした現在の地に移したといふ。

95 六 助 (八名郡)

八名村大字中宇利宇福津に行く山の中腹に六助といふところがある。この地に昔六助といふ人が住んで居たが、下に堤窪といふ大池があり、こゝに大蛇が居て、六助の娘二人をねらつてゐたが、髪がちゞれてゐるので、大蛇はあきらめて他に移つた。この時堤が切れて大水になり八幡神社の田は河原になつてしまつた。六助の住んだ所だったのでその地名がついた。

96 寄 合 窪 (八名郡)

八名村大字中宇利宇利城趾西約二丁程の所に寄合窪といふ所がある。この地は昔宇利城を攻めんと敵軍この窪に集り作戦したのでその名があるといふ。

九、植物の話

1 權 現 松 (一宮市)

市内印田の郷裏の白旗八幡の北に權現松といふのがある。家康が關ヶ原出陣のため一宮まで来た。その頃、石田方の配陣關係で、そのまゝ家康が出發する時は、まゝと石田方の戦略にかゝつて、敗戦の憂目を見なければならなかつた。神はこの危険に瀕せる家康を加護されて、家康の軍旗を捲き奪つて、あの一本松の枝に一時お預けになつた。そこで家康は今日は幸先がよくないからとて清洲へお歸りになつた。其の夜家康の寢所へ白髪の老翁が出現して、旗を返して忽然と消え去つた。この老翁は關ヶ原の地主の神であつた。それを知つた家來の者共は、愈々神君であると驚歎して士氣大いになり、遂に關ヶ原の合戦では大勝を獲るに至つたといふ。その一本松をそれから權現松といふ。

2 鶴の巢 (一宮市)

市内眞清田神社境内の西神宮寺に昔二抱もある松の木があつて、其の枝に鶴が巢を掛けてゐた。或る年小役人の鳥見助左衛門といふのが、この鶴の巢を見附けて神主の止めるのもかまはず松の木を攀ちて巢を取らうとすると、その一刹那に親鶴がギャツと叫んで助左衛門の禿頭を啄き破つた。助左衛門は眞逆様に地上に墜ちて、其儘死んでしまつたといふ。松は程なく枯れたといふ。

3 縁結びの木 (東春日井郡)

坂下町大字内津奥の宮の巖の上に、松の古木がある。その枝に母指と子指の二指で紙縊を結びつけるると良縁を得ると云つて、今猶占ふものがある。

4 大 横 (東春日井郡)

品野町大字下品野から瀬戸市に至る舊道の傍に大横といふ所がある。昔此所に横の大木があつ

た。何でも行基菩薩がこの地に滯錫されてゐたことがあつたが、後他に赴かうとせられた時、大變名残りを惜まれて、持つてゐた楨の杖を突きさして行かれたが、不思議にも其の杖は逆様のまま根づいて、遂に大木となつたと言ひ傳へてゐる。又さかさに立てたるより「さか楨」とも云ふ。

5 駒 繫 ぎ 松 (東春日井郡)

小牧町大字小牧原新田字東浦に駒繫ぎ松といふのがある。言ひ傳へによれば、天正小牧合戦の折、本田平八が此の樹に駒を繫いだといふ。

6 疣 取 り (東春日井郡)

坂下町大字内津字鞍骨の天神社の境内に、馬酔木がある。里人は疣が出来た時には、この天神に参詣して、その木に、疣をこすりつける。さうすれば疣が自然に取れるといふ。

7 宮重大根の由来 (西春日井郡)

春日村宮重大根の由来は、昔尾張公が今の八劍社のあたりで鷹狩を催された時のこと、宮重の

庄屋近藤庄右衛門の家で御休息になつた。さて田舎の事故御馳走とて何もなく、やむなく字境道産の大根を煮て晝食に差上げたところ、殿様は大變お喜になつて、「これはなか／＼おいしい、何といふ大根か。」「名といつて別に。」「ふむ、さうか、この邊は何といふか。」「宮重と申します。」「では宮重大根とせよ。」「そこでそれ以來宮重大根として毎年殿様に献上することになつたとすよ。

8 白山社の大杉 (西春日井郡)

庄内町名塚の氏神白山社の大杉の幹は、扁平になつて引掻いたやうな跡がついてゐる。昔この名塚地内に瀬々として落雷があつた。或る年この白山社の大杉に落雷した。この時はいたく祭神の怒に觸れたものと見え、祭神は鐵の箕で雷公を堅くふせて仕舞はれた。流石の雷公も色を失つて、この名塚の地へは再び落雷しないことを誓つて、漸く許され大杉を攀登つて昇天したといふ。それからこのあたりの人家へは決して落雷しなくなつたといふ。

9 天狗の棲む杉の木 (丹羽郡)

犬山町の上野と扶桑村高雄の境に太い中空の杉がある。この木の中は天狗の棲家で、昔は通行人を嚇したり其の中へ引入れたりなどしたといふ。

10 北折の常紋南天 (丹羽郡)

扶桑村北折の木曾川の堤防は豊臣秀吉が築かれたものださうな。秀吉公が工事を見廻つて小淵までお出でになつた時、丁度晝食時であつたので、里人は三寶の上に南天の葉を載せ其の上に赤飯を盛つて差出した。すると秀吉は大變お喜びになつて、特別に常紋をやると云つて、六角の中へ南天が入りこんでゐるのを授けられた。以後、北折ではこれを常紋とするやうになつたといふ。

11 金 鶏 (丹羽郡)

池野村入鹿池畔の或る坂で、正月一日の朝に金の鶏が鳴くさうである。その聲を聞いたものはその年一年は大變幸福であるといふ。

12 かやの木弘法 (丹羽郡)

城東村塔野地北裏にかやの木弘法といふがある。堂の裏に一本のかやの古木がある。昔弘法大師が巡錫の砌こゝにお立寄りになつた折手の珠數が切れた。それを大師が拾ひ集められたがただ一粒残つてゐた。それから芽が出てかやの木が生えたと云ひ傳へられてゐる。不思議なことは其の實の眞中には皆穴があいてゐるといふ。

13 子助櫻 (丹羽郡)

犬山町に子助櫻といふがある。昔一人の子供が買物の歸りに、丸の内の角にさしかゝると、あたりの叢の中から二三丈もある大蛇が出て來た。子供は大聲で救を求めながら逃げた。大蛇はその後を追つて來た。子供は全く逃げ場を失つて傍の櫻の木の上に向け登ると、大蛇は櫻の木には登り得ず何處かに姿を隠した。それからその櫻を子助櫻と呼ぶやうになつた。

14 大榎 (丹羽郡)

犬山町橋瓜の百姓家に一本の大榎がある。昔あたりの野武士が、下僕に辨當を持參するやうに命じて家を出た。午になつてもその下僕が來ないので、山路を迎へに來ると、そこに風呂敷包

が落ちてゐた。中を開くと家紋入の辨當箱が出て來た。更に少し行くと、岩角から長さ一丈もある大蛇がぬつと出て來た。武士は悪闘數刻の後これを射止めた。そして腹を割くと下僕がその中に入つてゐた。野武士はその骸を地に埋めて、その目標に榎の枝をさした。それが此の大榎になつたが、先年の暴風のために折れた。その時黄い烟が濛々と立ち昇つたといふ。

15 公孫樹 (中島郡)

朝日村明地の頼江神社の境内にある公孫樹は幹の側には氣根があつて乳の少い婦人が用ひると大變よく出るといふ奇蹟がある。

16 笠懸松 (中島郡)

大和村大字宮地、花池地内に老松數十本があつて俗に下り松といつてゐる。中に日本武尊笠懸松と云ひ傳へてゐるものがある。

17 おつげの木 (中島郡)

大和村大字毛受に昔おつげといふ者があつて平素齒痛に苦しみ遂に餓死した。死ぬ前に「私が死んだら世の齒痛に苦しむ人を助けよう。齒痛が治つたら米糠を持つて禮參せられたい」と云つた。死後村人は其の名に因んで黄楊の木を植ゑて墓標とし參詣する者が絶えない。

18 大榎化して竹となる (海部郡)

富田村大字長須賀の濟宮社に昔大榎があつた。或夜神官小出氏の枕元に一人の老人顯れ「吾は長須賀濟宮社の大榎に住む者也、今年老いて死なんとす。然れ共附近の竹の願により一本の竹となり三十年間命を保たんとす。汝其意を悟り保護すべし」と立去つた。此事あつて數日の後大榎は枯死したが、その根の中から一本の竹が生じ、其後年々數を増した。神官は社前に參る前其の竹に御神酒を供へて祈禱したといふ。

19 源義朝と捨木の柳 (海部郡)

源義朝公關東へ落延びようとして美濃路より養老川を下り木曾川に入り(昔は兩川相續いてゐた)今の海部郡立田村に着かれた。空腹を訴へられたので上立田村の藤左衛門と下立田村の三右

衛門の兩人が御粥を差上げた。義朝公はお禮として藤左衛門には御粥姓を三右衛門には小粥姓を賜うた(現に小粥姓を名乗る者がある)又飯を獻じた者は飯谷姓を賜つたといふ。

義朝公は食事終つて御用ひの箸を捨てて地上に挿し「吾れ若し再び望み叶はば此の箸芽をふかんと仰せられたが、不思議や芽を出して捨木の柳となつたといふ。

20 虚無僧松 (海部郡)

蟹江町本町の河合大橋の近くに虚無僧松と呼ぶ一大老松がある。風の吹く毎に尺八に似た音を出すので此の名があるといふ。又一説に昔一人の虚無僧此の地に來り村民と争を生じ格闘の結果此所で落命してしまつたので、その死體を埋めて松を植ゑたものだともいふ。

21 義經の弓懸松 (海部郡)

七寶村大字下田に義經の弓懸松といふ古松がある。昔源義經此の地に來り、通矢を試みた。其の矢は百町に達したといひ現に其の地を稱して百町といふ。又其の矢の落ちた所に一祠を建て、矢落社と名付けた。其の際此の松に弓を懸けたのだといふ。

22 狂 氣 松 (知多郡)

河和町大字河和字六段田地内の丘に三抱半もある老松がある。白蛇が松の洞窟内に棲んでゐるとか、此の丘に行くと病氣になるとか云つて怖れられてゐる。昔罪人を殺した仕置場であるともいひ、又昔六部が来て死んだので埋めた所だともいふ。

23 八百比丘お手植の樟 (知多郡)

旭村大字南粕谷の大智院に千餘年も経たかど推定される中の朽ちた大樟がある。昔八百比丘が當地に滞在中記念に植えたものだといふ。

昔は此所まで入江になつてゐて此の樟の木に舟をつないだともいはれてゐる。

此の樟樹の枝葉を採つて薬用とすると、如何なる難治の病氣も平癒し又不老長壽の薬になるといふ。

24 衣懸の松とあかすの門 (知多郡)

昔三和村の青海山には城があつて城主を佐治與九郎といつた。或時織田信長と戦つて敗れたので、城主のお姫様は同村の小倉へ逃れ蓮台寺に隠れようと、門前にある松に衣(うちかけ)を懸けておいて、門内に入り其の門を開かないやうにして奥の方へ逃隠れられた。それから此の松(現在の松は二代目だといふ)を衣懸松といひ、此の門をあかすの門といふやうになつた。

25 天然痘除の楠 (知多郡)

成岩町成石神社の西南隅に四抱もある中空の大楠がある。大昔落雷があつて其の時牛頭天王が出現され、これへ参詣すれば天然痘にかゝらぬと仰せられたといふ。現今でも酒と赤飯とを供へて参詣する人が多い。

26 檜 椿 (知多郡)

小鈴谷村大字廣目の廣目寺の境内にヒノキバドリ木がある。これは昔弘法大師が、此の寺に御自作の毘沙門天の尊像を奉安されその開眼供養の日に、椿の一枝に檜の枝を添へて供養された

が、不思議にもこの二枝が相合して一枝となつたものと傳へられてゐる。

27 駒止の櫻 (豊橋市)

岩崎町鞍掛神社の東方にある駒止の槻は、昔頼朝がこの地を過ぎた時馬を繋いだものといふ。今は大木は殆んど枯れその根元から若木が伸びてゐる。

又一説に昔近郷のものこの地に動物の死屍残骨を捨てたので駒埋めの櫻といひ、後駒止の櫻と訛つたともいふ。

28 蓮華寺の大楠 (碧海郡)

矢作町大字西本郷蓮華寺の境内は古杉老松鬱蒼として、千歳の遺跡を今尙存してゐる。寺域の西南に當る處に大楠の枯木があるが、之は太古未だ此の地が渺々たる青海の頃船筏を繋留したものであると傳へられてゐる。

29 謎かけ松 (幡豆郡)

西尾町八面山麓の謎かけ松は又虚無僧松とも呼ばれ「三三三夜の三日月宵に、旅の虚無僧が松下松で、死んでゐたぞへにつこと笑うて」と土地の子供の手毬唄にまで唄はれる名高い松である。昔岡崎に生門左門と云ふやもめ暮しの武士と、植村主膳と呼ぶ毛虫武士とが住んでゐた。左門の娘お夏は龍城小町と噂される程の美人であり、主膳の息子主税も父に肖す心の優しい美男であつた。二人は何時しか深い仲であつたが親が互に犬猿の間柄であるのを悲しみ、相抱いて菅生川に身を投げた。數刻の後二人は引き上げられた。醫師の手當で主税は蘇生したがお夏は終に歸らぬ人となつた。其の後主税は虚無僧に身を窆し、我が家を抜け出して諸國巡禮の旅に上つた。魂の抜けた主税が八面山麓にさしかゝつた頃、三日月が山の端にのぼり、麓を流れる矢作古川に銀蛇のうねりを作つてゐた。主税は其の流の中に懐しいお夏のつこり笑つた顔を見出した。早速尺八を取り出して一曲吹き終り、再び袋に入れて淵の上に蟠まる松の枝に掛けた「お夏どの……」と叫ぶなり主税の身は淵に躍つたと。

此の松に關しては又異説がある。昔奥州の虚無僧が山下の大松の下を通る時、村人が丁度松の枝打をしてゐた。今一本の大枝が落ちさうになつてゐたので「通つてはならん」と注意したが、強ひて通つたので、運悪く落ちて來た枝に押潰されて死んだから虚無僧松と云ふとの説である。

然し何れにしても解けない謎の松である所から、近年野口雨情氏によつて謎かけ松と命名されたのである。

30 婆 櫻 (額田郡)

岩津町での話である。その昔丹坂から奥殿へ行く時に二抱もあらうと思はれる古い櫻の木があつたと。或る日一人の木樵が此の櫻の木を伐り倒さうと朝から一生懸命に鋸を使つてゐた。その中に日も段々西に傾き四邊に夕色が漂ふ頃、麓から一人の美人が物悲し氣に登つて來た。木樵が餘りの美しさに呆然と見とれてゐると、美人は靜かに顔をあげ悲しうな聲で「その櫻を伐るのは止めて下さい」と歎願して聽て何處ともなく行つてしまつた。木樵は狐狸の仕業に違ひないと思ひ込み、又鋸を取り直して之を伐り倒して家に歸つたがそのまゝ床に就き間もなく死んでしまつたと傳へられ、今でも其の切株が残つてゐる。里人はこれを婆櫻と呼んで其處を通るのを非常に氣味悪く思つてゐる。

31 法 眼 松 (西加茂郡)

高橋村大字野見に通稱法眼松と呼ばれる老松がある。高さ七丈餘目通り二尺七寸南北百尺東西七十尺に亘つて枝を張る樹容優れた大木である。昔狩野法眼が此の地に來た時、此の松を描かんとしたが見る度毎に樹容改まり、流石の法眼も遂に筆を捨てたと傳へられる。

32 穴 瀧 の 大 樺 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯の北笹の頭山に穴瀧とて小さな瀧があるが、昔この瀧の傍に十數抱もある大樺があつた。村人の一人が金にかへんと切り出した。すると何處からともなく美女が現はれ、大樺を見つめ名残惜しさうに行んでゐた。切つてゐた男はふとこの女が大蛇の化身ではないかと考へついて恐れて家へ逃げかへつた。歸へるとそのまゝ病氣になつたが間もなく死んだといふ。それから誰行くものもなく今も大木の形骸を存してゐるといふ。

33 葉 の 木 (北設楽郡)

豊根村大字坂宇場宇川宇連尹良神社境内にある花の木は尹良親王が賊軍に追はれる途中、食事を召され、御箸を挿されたのが成長してなつたものといふ。村人がこの花が美しいので枝を折つ

て持歸つたら、間もなく病にかゝり死んだので、それから誰も手をつけるものがないといふ。

34 鶯の鳴いた大黒柱 (北設楽郡)

武節村大字御所貝津字笹手に尹良親王が御潜居されたといふその舊臣青木某宅の大黒柱は大へん曲つてゐる。これはこの家を建てる時大工が大黒柱に選んだ木が曲つてゐるので取やめやうとすると、その木で鶯が啼き出したので、何かの瑞祥かと苦心して大黒柱にしたものださうだ。

35 子持カツラ (北設楽郡)

稻橋村大字大野瀬字柏洞の子持カツラは一株が十數本幹を出して茂つてゐる。この木に願をかけると子供を授かるといふ。

36 門松を建てぬ所 (北設楽郡)

稻橋村大字押山字峯山では門松のかかりにコウ(樹名)の枝を建てる。峯山の祖先太田某が、武田信玄に追はれ、日頃崇拜する摩利支天を負ひ逃げたが、その尊像を「キチゴウ畑」にかくし、

身をもつて信州に逃れた。それから十三年、摩利支天を慕つて、十二月二十八日尋ねかへり、元の屋敷の篠を刈り小屋を建て、祀つたが、年末とて多忙なため門松を切るいとまなく、盛砂にコウの枝を立て、之に代へた。それから今でも峯山では門松を立てない。

37 弘法栗 (北設楽郡)

名倉村の吹上峠一帯に弘法栗とて、三尺程の若木へも實をつける栗が生えてゐる。昔この時に栗の大木があつて少年達は争つて樹に登つてその實を採つたが、幼ない子たちは木にも登れず泣いて居た。通りかゝりの旅の僧がこれを見て、「よしよし來年からはお前達にも採れるやうにしてあげよう」といつて去つた。次の年が來ると栗のどんな若木へも實が生つたので童たちは喜んで採つた。村人は旅の僧が弘法大師であつたことを知つて、弘法栗と名づけたといふ。

38 夫婦柵 (北設楽郡)

振草村大字神田字中河内に太さ二尺餘りの柵あり。幹途中より二本に分れ、一は男柵、一は女柵とて夫婦柵と名づく。昔この地に心悪しき者、姿をくらし二十餘年後村に立歸るところ、追

手に捕へられた。その時刀一本を落して行つたが、家人この刀を柵の根元に埋め「この刀正なれば柵一本となりて伸びよ、邪ならば二本となれ」といつた。果して柵は二本に分れて伸びたとす。

39 綿屋の門松 (寶飯郡)

一宮村大木の下の本田某の門に年経た大松が一本ある。それを人呼んで綿屋の門松といふ。これは先祖の本田民右衛門がもとの地が鳳來寺街道でもあり、信州街道でもあつて賑かだつたころ綿屋の屋敷で宿屋をしてゐたが、或年の正月門松を取り除いた後へ、松の梢を挿したのが新芽が出た。人々は何かの瑞兆と噂し合つたが、果してそれから綿屋は非常に榮えた。その松が二百餘年を経た今日大松となつたものである。その幹には大きな洞穴があり、人呼んで天狗の巢といふ。もとの洞穴に天狗が住んでゐて本宮山と往來したさうで、本田家の人は幼い頃時々天狗を見たさうだ。

40 羽衣松 (寶飯郡)

牛久保町大字行明のあたりを昔星野里と呼んでゐたが、その豊川岸に千本柳といふ原があつた。或時星野某が千本柳に釣に行く途中、老松に羽衣を見つけ持ちかへり石の唐戸の中へしまつておいたが、夕刻女が尋ねて来て、そのまゝ夫婦となり、男子を設けた。やがて三歳になりその祝に妻は唐戸の中の秘藏の品を見たと望むので、床の間にかけて物語をすると、そのまゝ羽衣を手にして天上してしまつた。その時の遺言に片葉の茶を授けるからこれを子供に煎じ飲ませよといふ。遺言通りにすると子供は至つて丈夫に育つた。

41 ならすの梅 (寶飯郡)

小坂井町大字平井のあたりは昔入海であつた。菟足神社の神、菟上足尼命は小舟にて平井の里柏木の濱へ着かれたが、この里の伴某の先祖が田園を獻じ、今の善福寺境内に宮を建て、眞心をつくして仕へたのでこの地に留られた。或時命、蹴鞠の遊を催され、命の蹴上げた鞠が實のすゝなりの梅にあたり、皆落ちてしまつた。それからこの梅には花が咲いても、實は結ばないと人呼んでならすの梅といふ。命はこの地に薨去され齋き祀られてゐたが、白鳳十五年今の大字小坂井字宮脇の地に遷されたといふ。

42 聖徳太子御手植の梅 (寶飯郡)

赤坂町正法寺にある八房梅は聖徳太子御手植の梅と稱し、太子御遊化の砌御手植になりしものといふ。産婦この梅を食すれば安産をなし、病人この梅を食すれば平癒すと。

43 椋の木様 (寶飯郡)

赤坂町大字大藪に、承久の亂に北條義時の爲に亡された勤王の士筑井高重等十九騎を埋めたといふ墓がある。今はこのあたり畑となり、墓は桑園の中にある。もとの墓の傍に大きな椋の木がありむくのきさまとて、軍人等祈願し驗あり、繪馬など納めてあつたが、近頃その木朽ち倒れた。故老はもとの木にいばを祈ると忽ち落ちたといふ。

44 二村山の靈木 (寶飯郡)

長澤村字金山立信寺の観音像は行基菩薩諸國順拜の砌、二村山の峯の大木の靈木なるをきき、そこにて讀經されてゐると、童子が顯れ「この靈木こそは日本武尊東征の御時、此峯にて天照大

神を遙拜し戦勝を祈られしが、奇瑞があつたので、尊の喜ばれた祝言により一夜に生ひ繁れるものである。依つて観音像を刻み一字を建立せよ」といふ。菩薩はお告げの如く二體の観音像を刻み、一體を本尊として立信寺を建て、他の一體は二村山法藏寺に安置すといふ。

45 春乙櫻 (渥美郡)

二川町大字二川妙泉寺にある春乙櫻は同寺の開基日台上人幼名春乙磨が、身延山より携へて來た櫻といふ。

46 東観音寺の笹 (渥美郡)

二川町大字小松原の東観音寺西方山林中の竹葉は病馬に與へると癒ゆといふ。

47 龍宮の燈のつく松 (渥美郡)

二川町大字小松原の東観音寺の左傍にある松は夜間枝の頭に燈がともる。これは龍宮から獻じた燈といふ。

48 車止の櫻 (漣美郡)

田原町大字加治淨光寺境内の櫻が美事だったので、家康公が車を止めて、これを賞し、御朱印を賜はつたといふ。その櫻を車止の櫻といふ。

49 千貫松 (漣美郡)

田原城出廊外腹にある千貫松は永祿頃本多康高當城を攻め碧山より大筒火矢を打つたが、この松御城を覆ひ矢玉を除けたので、寄手の人々が假令千貫出してもあの松を取りのけたいと言つたのでこの名がある。後この松に火が付き三日の間燃えてゐたといふ。今この地の小學校にある千貫松は其の名を記念したものである。

50 辨天松 (漣美郡)

田原町大字田原城寶寺にある辨天松は、昔家康公難を逃れて田原に來たときこの松に船をつないだもので、寶永年間までは寺下田は皆海だつたといふ。

十、動物、變怪民譚、附獵の話

1 狐の話 (東春日井郡)

小牧町小牧附近には狐に關する迷信が多い。小牧山の吉五郎、山中箴の藤九郎、御林山のおうめ、下津山のおはつ、などといふのは就中有名である。此等にからまる狐憑や狐隠の話が色々傳へられてゐる。古木津川堤防は、狐の嫁入りがあつたといはれてゐる。

2 多羅々伽池の龍神 (東春日井郡)

忘段味村大字吉根の龍泉寺に、多羅々伽池といふのがある。昔下津尾の或る老媪が、この池から馬頭觀世音を救ひ上げて、山上の祠に祀つた。それが今の觀世音である。それから新しく御堂も建立されて行つたが、その時不思議なことに何時とはなしに瓦を葺いて置くものがあつた。下津尾の神官が或朝この山に登ると、美しい乙女が瓦を葺いてゐたが、人の姿を見ると驚いて忽ち

龍の姿と化して入鹿の池の方へ天駟り去つた。これは多羅々伽池の龍神が乙女に化身したのだと傳へてゐる。

3 なまど神様 (東春日井郡)

高藏寺町大字外之原の縣道に沿うた所に、一老木があつて、白蛇が棲息してゐるといふ。その祠を白龍社と言つて、俗になまど神様とも言ふ。遠近から賽するものが多い。

4 龍徳寺の狸 (西春日井郡)

北里村の龍徳寺に棲む狸が人に化けて白を廻し、里人を怖れしめた。又龍徳寺には開かずの門と言つて昔より一度も閉めた事のない門がある。其故は門を閉めると天狗が門を叩きに來ると云ふ。

5 大蛇 (西春日井郡)

萩野村大字福徳に八龍社といふ社がある。昔その東の池に大蛇が棲んでゐて子供の來るのを喜

ぶといふ。雨天続きの時は晴天を祈ると叶ふと云つて里人は崇拜してゐる。而し如何なる日照りにも雨乞はしない。毎年舊四月朔日には氏子戸毎に米を集めて赤飯のムスビを作つてくばるといふ。

6 鳩岡 (西春日井郡)

萩野村字鳩岡の地は昔安井將監淺井又左衛門長勝の居城趾の一部であるが其處には「金の鳩」が埋没してあつて古來この地點のみは雪が降つても直に溶けて積ることがないといふ。

7 七十五釣の狐の嫁入 (西春日井郡)

春日村大字下之郷縣社の北ほとりに住む加藤彦八といふ貧家の妹を、七十五釣にて名古屋市九軒町の桶屋某方へ周旋せようと、申入れた媒灼者があつた。桶屋は日を定めて媒灼人と共に見合に行つた。此時清洲町大字一場素麵屋の娘某を隣村阿原の星の宮まで誘ひ出して見せた。愈々縁談が確定して輿入の日を定めた。新婦の家は實に聞きしに勝る大家で座敷の廣さ美しさ得も言はれず。箆筒、長持、釣台など七十五釣が皆定紋付の油單をかけて次ぎの間にあつた。新夫等は

悦んで大いに酩酊し、遂に其場に倒れた。こちらの桶屋では變應を終り、多数の人々を枇杷島橋まで迎ひに出したが待てどもく來ないので空しく歸つた。所が新郎達は醒めて始めて清洲町大字朝日の愛宕社の拜殿であつたのに驚き、茫然として逃げ去つた。桶屋はこれがために運傾いて破産の止むなきに及んだと言ふ。當時地方の風説に據れば、愛宕山の修験者の娘某が、清洲町の日下部某へ嫁してゐたが、其女と一場の素麵屋との間に一種の關係があつて、稻荷の神體を如何にかしたので、愛宕山の狐が怒つて、素麵屋の娘を誘ひ出し、更に慾深き桶屋を魅したのだと言ひ合つた。

8 恩知り狐 (西春日井郡)

西春日大字沖の松林寺の裏山に二匹の狐が棲んでゐた。前代専法の時、二匹の子を生んだが、或る日穴から一匹の子狐が這ひ出て遊んでゐる中に、下の池の中に落ち込んだ、親子の狐はあはて泣き叫んでゐた。専法はこれを見て、可愛想に思つて、篩ですくひあげてやつた。翌朝戸口に雞が一羽殺して置いてあつた。時々かうした事があつたので、初めて前日の恩返しに狐のやつた仕業であることが分つた。世人は皆、恩知り狐と言つて人口に膾炙された。今は何處へ立去つ

たのか、穴だけが淋しく残つてゐる。

9 狐 火 (西春日井郡)

清洲町清洲古城跡と朝日愛宕社の間を時々狐が火を點して往復する。狐火は普通の火のやうに光りがないと言はれてゐる。

10 俺はねすみ (丹羽郡)

犬山町七間町に櫻林百助と云ふ人がゐた。或秋の夜何物かがバラバラと石を投げこんだが子供がいたすら位に思つてゐた。二日程たつた夜今度は庭先へ五六十貫もあると思はれる石が二つばかり落ちる音がした。百助は何者が悪戯するのかはね起きるその途端、行燈の火が消えた。あはて火をともしたら、今まで白かつた行燈の紙に薄墨で次のやうなことが書いてあつた。

「おれはねすみ。十月二十二日のこと、がうきの人でもきかぬ。もちそなへよ。石打やむにその心もてよ。上下なし。もちそなへぬときかぬ」と書かれてあつたといふ。

○ 11 夜半の瓢箪 (丹羽郡)

犬山町鍛冶屋町に明和の頃、包重といふものがゐた。用があつて外へ出た時、知人の宮助が病氣であることを聞いた。包重は、その足で友人宮助の病氣を見舞つた。夜が次第に更ける。包重は自分の體に何かヒヤリと異様な物が觸つたので、驚いて振りかへると瓢箪が一つすうつと走つた。そして戸口の所に童が一人ニヤリと笑つてゐた。包重はすは妖怪と、刀のつかに手をかけるや否や童も瓢箪も消失せた。包重はそのまゝ家へ歸り翌朝になつて様子を覗ふと、友人宮助の病氣は快癒してゐた。そして妖怪は、その翌晩から影を見せなかつたといふ。

○ 12 瑞泉寺鐘樓の猿 (丹羽郡)

犬山町内田の瑞泉寺の鐘樓の四本柱の上に猿が三匹刻んである。それは左甚五郎の作だと云はれてゐる。一匹が逃げたので今、残りの三匹とも皆目がつぶしてある。

○ 13 おしやもじ様 (丹羽郡)

扶桑村北新田の東北隅におしやもじ様といふ祠がある。昔この邊に一匹の白蛇がゐて、宮田家

の本家によく現れた。或る人は尾を見たといひ、或る人は子を見たといふ。銀色をしてゐた。しかしその後本家では啞の子や馬鹿者や妙な子が多く生れた。その後或る人から「白蛇は一家を倒す。」といふことを聞いて、祀つたのがこの祠であるといふ。

○ 14 オケハン狐の正體 (丹羽郡)

樂田村青塚の茶白山附近にオケハンといふ古狐が棲んでゐた。或る年この附近の馬子が此の附近を通ると一人の美女が後について来るので、馬子が振かへると、その女は、「私は小松寺の者ですが、道に迷つて困つてゐるのです。どうかあなたの馬の背に乗せて下さい。」と云ふので、馬子はそれを諾して、女を馬の背に乗せて、紐でしつかりと縛りつけてしまつた。家に歸へると、妻女が不思議に思つて事の仔細を訊ねると、馬子は笑ひながら、「女房、今日は此の珍客を座敷にお通し申して、青松葉で燻し申さう。」と言つて、馬子はその女から證文をとつたが、間もなく正體の一聲を残してどこかへ立消えてしまつたといふ。其の後王圭畔稻荷大明神として祀られてからは、オケハンの禍はなくなつたといふ。

15 大蛇 (丹羽郡)

扶桑村南山那の臥龍庵に、昔大きな耳の生えた蛇が棲んでゐた。或る年お施餓鬼の折それが道へ出てゐたので、人々が嫌つて口々に言ひ草を云つて通り過ぎた。翌日和尙が道へ出て見ると、いつも屋敷で見る蛇が死んでゐたので、和尙は可哀想に思つて心經を誦んで葬つてやつた。すると或る夜その蛇が枕元へ現れて先日の御禮を述べた。が和尙は夢心地でゐたのではつきりとわからなかつた。それから受戒があつた時、見苦しい女の子が和尙に辨當を持つて來た。其の時和尙は思はず、「あゝ、あれだ。」と大聲を出したので皆がびつくりして何だ〜と尋ねた。和尙は今までのことを詳しく話したといふ。

16 青い龍 (丹羽郡)

犬山町の瑞泉寺客殿の後に宿瀧池といふ池がある。應永の頃、日峯と呼ぶ高僧が繼鹿尾の奥に住してゐた。内田の里の郷士内田左衛門次郎がいたく其の徳を慕つて、この日峯を招じて一字を建立せよとした。日峯は内田の里に來てその岩角をこつこつと杖の先で叩いた。すると全山

鳴動して、岩が裂け水が迸り一氣の白雲が靜々と立昇るよと見る中に、青い龍が九天目かけて昇天して行つた。日峯は破顔一笑泰然として見送つたといふ。此の泉は今も尙残つてゐる。青龍山瑞泉寺の由來はこゝから起つたといふ。

17 一本杉 (丹羽郡)

犬山町の魚屋町に昔次郎七といふ人がゐた。所用あつて東美濃へ行つたが、歸が遅くなつた。犬山へ近くなつた頃はもう夜も更けてゐた。馬堤附近まで來ると、俄に提灯の火が消えた。不思議に思つて一本杉の方を見ると、騎馬武者が百人餘り手に手に松明を持つて勢揃をしてゐた。よく見ると、悉く妖怪變化の相貌であつた。次郎七は腰を抜かさんばかりにして餘坂先きまで辿りついて、知人利兵衛さんを叩き起した。振りかへつて見ると、一本杉の方にどつと火柱が高く立つたが、すぐ消えたといふ。

18 専念寺の大松 (丹羽郡)

犬山町の専念寺に大松がある。數百年前のことである。或る冬の朝早く住職が讀經してゐると

門前の大松の上で大聲を發した者があつた。僧が何者かと尋ねると、「吾は鞍馬山の天狗だ。二荒山まで使に行くのであるが一寸休まして貰はう。」と言ふので、僧は「それは珍らしい。何か休んだしるしに一筆のこして置いてくれまいか。」といふと、天狗は「よし書いて置く。」といつた。夜が明けてから大松を見ると松の枝に富士山を書いた繪がのこつてゐたといふ。

19 森林平氏と商標「鶴の丸」 (葉栗郡)

淺井町の森林平と言へば昔から骨つぎの名人であり淺井膏藥は餘りに有名である。今から二百年前、或る日初代の林平が大池へ魚釣に行くと、池邊の柳の下に一羽の鶴が悲しさうに鳴いてゐた。見ると片足を折つてゐるので林平は氣の毒に思つて柳の枝を折つて副木として鶴の足をしつかりとしばつてやつた。すると鶴は如何にも嬉しさうに何度も鳴きながら大空に舞ひ上つて行つた。暫く経て或る夜半のこと。部屋の中に何とも言へぬよい香が充ちてゐるので林平は不思議に思つて邊りを見まはすと一美人が端然と枕頭に坐つてゐた。するとその美人が「先日は池の端で私が苦しんでゐるのをお助け下さつて誠に有難うございました。これは世にも得難い品でございます。どうぞ是れを基にして仁術を普く世人に施して下さい」と言つて錦囊の書を渡したかと思

ふと忽ち丹頂白衣の姿と化して消へ去つた。其の書には漢家の秘法、整骨の術が書いてあつたので、林平氏はそれによつて研究をつまされた。随つて仙鶴から得た秘法を永久に記念し又祖先の徳を偲ぶ爲に商標に鶴の丸を用ひるやうになつたといふ。

20 溫故井の金鶏 (葉栗郡)

淺井町大字東淺井の溫故井は葉栗三井の一、淺井のことであるといふ。溫故井とは森林平氏がつけたといふ。然し古老の中には古の淺井は淺井神社の祠の下にあるとも言つてゐる。それによると、祠の下に厚さ四五寸、周圍丈餘の大岩があつてそれが井戸の蓋をなしてゐる。この井戸の中へは廻りながら降りて行けるやうになつてゐる。この井戸の底には淺井氏の先祖の寶物が埋めてあつて、その中の金の矮鶏が元日の夜明けには必ず三聲づゝ鳴くと言ひ傳へられてゐる。今一般に信じられてゐる淺井即ち溫故井の水はもと氏神に供へたもので、この水を塗ると眼病が癒えるといふこの井水を汲んで雨乞をする。と忽ち雨が降ると言ひ傳へられてゐる。

○ 21 黒田の狐狸 (葉栗郡)

木曾川町大字黒田の劔光寺附近には古狸がゐて大坊主に化けて行人をなやましたといふ。又福塚に近い口道の三つ橋、内割田前のどんど木附近では往々狐に化されるといふ。福塚、八幡、黒田の間の野にはよく狐火が飛び交ふのを見ると言はれる。

○ 22 大杉様 (葉栗郡)

浅井町大字河端の河俣神社の境内に一本の老杉がある。根元に一つの洞穴があつて多数の蛇が群生してゐるといふ。昔からこの木には天狗様が棲んでゐると言ひ傳へられた。或る時隣村の人がこの地を通り過ぎると杉の木の上が俄に明るくなり、びし／＼と何か燃える音が聞え、はてはその近邊一面が火の海と化した。又或る時一人の主婦が夕方隣村へ買物に行かうとしてこの杉の下を通りぬけると「何處へ行く／＼」と不意に聲をかけたので轉げる様にして隣村へ辿り着いたといふ。夜泣の子供のある家庭ではこの大杉様にその葉を貰つて子供の布團の下へ入れて寝れば必ず夜泣が止るといふ。又お産の神様だともいひ時々参詣する人がある。

○ 23 鼠の村 (葉栗郡)

草井村大字鹿子島に大變賢い鼠がゐた。或る年お宮様の大切な書付か何か紛失して、村中が大騒ぎして八方探したが見つからない。皆が困つてゐたが、或る日郷倉の戸を開けると、一匹の鼠が此方を見てゐたが、驚いた顔をして片隅へ逃げかくれた。其時不思議にも村中の人を探してゐた書付がそこに置いてあつたので、皆が大喜びをした。それから、この村では鼠のために猫を飼はない風習となつて今日に及んでゐる。

24 音楽寺の金鳩 (葉栗郡)

草井村の音楽寺の薬師如來は、日本三薬師の一として名高い。それが足利時代に三河蓬來寺の薬師と間違へられて兵火の厄にかゝつた折、住職は寶物を境内の一角に埋めた。その中に金の鳩や金の茶釜に金の鎖等があつたといふ。其後、「朝日さし夕日輝く地」として、降り積む雪も此處ばかりは白く覆はないと言ひ傳へてゐる。

25 天 狗 火 (中島郡)

大和村大字北高井に松林がある。世俗日本武尊が笠をお懸けになつた松だといつてゐる。この林から北高井の熊野社の古杉に向つて怪火が往來する。これは雙方の樹梢に天狗が棲んでゐて往來するのだと云ひ傳へてゐる。

26 彌 左 狐 (中島郡)

大和村大字福森の禮讚寺の境内近くの丘の藪に横穴があつて寶曆の頃から老白狐を始め多数の狐が棲んでゐた。そこで此の藪を彌左藪、狐を彌左狐といつて供物を捧げて諸願成就を乞ふ者が多くなつた。後この横穴の上へ伏見稻荷社を勧請した。

27 觀音寺の五色蛇 (中島郡)

大和村の刈安賀城主浅井田宮丸に五人の娘があつたが、五人共容色がすぐれ、刈安賀城の五人小町姫といへば、尾張の國中で知らぬものはなかつた。田宮丸は武運拙く伊勢の長島に戦死を遂

げた。一族四散の悲運に五人の娘も住みなれた城を出て、近くの觀音寺に身を寄せてゐたが、豊臣方の僉議が厳しく或る夜遂に自刃した。その後誰言ふとなく、浅井の五人小町は、それぞれ五色の蛇身と化して、豊臣方を呪ひつゝ居城を守つてゐるといふ。この五色の蛇は、古老の話によると、尺餘の小さなもので、姿はめつたに見せないが、今でも五匹揃つて出て歩くことがあると云ふ。

28 天 狗 の 話 (海部郡)

富田村大字包里の神明社の境内に松の大木があつた。昔から天狗が棲み、機嫌のよい時はその笑ひ聲が村中に響き渡り村も平穩であつたが機嫌を害すると村中を荒し廻るので人々が大變振ひ上つたといふ。此の大木は大正十年の大暴風に倒れてしまつた。

29 長田蟹、長田貝 (知多郡)

野間村の海岸に長田蟹といつて、甲の模様が人面に似た蟹が棲んでゐる。源頼朝に討たれた長田氏(源義朝を殺した人)の亡靈が蟹となつて現れたのだといふ。

同村長田山から出る貝殻化石を長田貝といふ。此の山に長田の死骸を埋めたのでその靈が貝となつて出るのだといふ。

30 老狐高藏坊 (知多郡)

大高町長壽寺はもと長祐寺といつてゐた。或時住持の高藏坊が本堂を修理しようと思つてゐると、此の境内に住んでゐた老狐がそれを知つて僧の姿に化けて關東に赴き、方々を勸進し巡り「余は尾張國鷲巢山長祐寺の高藏坊といふ者、當山に鎮座まします觀音はまことに靈驗あらたかにして只今開帳中なるに汝等は何故參詣を忘れたるか」と唱へて歩いた。それを聞いた人々は我先きにと參詣に來たので寺の修理も忽ちに出來上つたといふ。人々はその老狐を高藏坊といひ可愛がつてゐた。

或時此の老狐は眼病を患つた。人間が綿目薬とて貝殻の中に薬を濕らした薬綿で目を覆つて治療してゐるのを見、人の姿に化けて薬屋に行き、買求めはしたが中の薬綿を捨て、空の貝殻で目を覆て仰臥してゐたといふ。

31 にしの崖 (知多郡)

半田町岩滑に俗稱にしの崖といふ所がある。昔與五郎橋の山から、螺シの大きなのが出て七日七夜鳴き續いて半田池の北方にその姿をかくしたといふ。

32 螺側 (知多郡)

阿久比村大字宮津に俗稱螺側といふ所がある。昔此所の地の中から大きな唸る聲がするので村の若者が見張つてゐた處其の聲益々大きくなり、其の中に地中から法螺貝の大きなのがこぼれ出て附近に大嵐を卷起した。其中二匹を捕へたが三匹は天上高く飛び去つたといふ。捕へた二匹の中一匹は現在宮津にあつて洪水の時人寄をする際吹鳴らすものとなり、他の一匹は龜崎町大字有脇に與へたと傳へらる。

33 蟹ヶ島、猿塚 (知多郡)

龜崎町大字龜崎に蟹ヶ島といふ所と猿塚といふ所がある。蟹ヶ島に棲む蟹軍と雉ヶ森に棲む猿

軍とが合戦して蟹軍が大勝し猿軍の大將を討取り、その首を猿塚に埋めたのだといふ。

34 蝮除けのお守 (知多郡)

東浦村藤江神社の八ツ頭神事に舞つた獅子の、後方に垂れてゐる麻毛を切取つてお守にすると蝮に刺されること無しといふ。(雨乞の話の部八ツ頭神事参照)

35 金 鶏 山 (知多郡)

東浦村大字森岡の小學校々地は昔金鶏山と云つた所で毎年正月元日の朝金の鶏が鳴くといふ。

36 白蛇の祟り (知多郡)

旭村大字日長の鍛冶屋村に九郎右衛門といふ人があつた。屋敷を掃除する時白蛇が出たので殺してしまつた。日長第一の身代の大家であつたが次第に衰へ病人も絶えないので御嶽様に占つたら毘沙門様のお使の白蛇を殺した祟りであると云はれ、早速屋敷内に毘沙門様をお祀りした。それから次第に家運は再興されたが、幾代かの後又没落の運命に陥り親類が其の財産を横領してし

まつた。毘沙門様の祠も壊し其の像だけ自宅へ保存した親類は間もなく出火して全焼の災難を被つた。焼跡で毘沙門様を探したが見當らなかつた。其の後伊勢の富田の漁夫が、伊勢海で網に毘沙門様の尊像を引上げ、自分の神棚に安置して信仰してゐた。この漁夫の家運は次第に開け大金持になつた。

九郎右衛門の子孫は御嶽様に占つて、かの毘沙門像が、伊勢の富田にあるを知り、受取りに行つたがどうしても渡して呉れなかつたといふ。

37 鹽でふせられた雷様 (知多郡)

常滑町北條の光明寺に豪氣な和尚があつた。或時寺の境内に落雷した。和尚は直ちに鹽を持つて来て雷をふせ境内の百度石の下に埋めてしまつた。爾來此の光明寺附近には雷は落ちないといふ(明治初年頃迄光明寺には雷を押へてゐる繪馬が上つてゐたといふ)

38 櫻下稻荷の狐 (豊橋市)

旭町通稱五番町にある櫻下稻荷の狐は、昔、供物が少いと腹を立てて綺麗な娘に化け、附近で

耕作してゐる百姓を誑らかし、新町へんの茶屋へ連れ込み天ぶらなどを喰べて逃げたといふ。

○ 39 喜見寺の狐 (豊橋市)

新銭町の喜見寺境内に享保年中のこと一匹の老狐が棲んでゐたが、その狐が或日藪で目を突いた。その夜附近の相模といふ醫師を訪れ目薬を乞ふ美僧があつた。見知らぬ僧だが喜見寺だといふので翌朝寺へ見舞に行くと、寺では知らぬといふ。醫師が歸つたあとで住職が寺を見廻ると、老狐が穴の邊で眼にいつばい目薬をつけて睡つてゐたので昨夜の出来事が判り、早速ぼろ倉を手入れしてそこへ祀り稻荷大明神と崇めた。

○ 40 宇都宮泰藤の忠犬 (碧海郡)

六ツ美村の郷社犬頭神社並に犬尾神社の由緒傳説によれば、昔上和田城主宇都宮泰藤が当社附近で鷹狩をした時、とある大杉の下で休息したが遂に我知らず轉寢を初めた。時に樹上にとぐろを巻いて居た巨蛇が俄かに首を垂れ、將に泰藤を呑まんとした。泰藤の愛する白犬が頻りに吠へて主の危急を報じたので、泰藤も何事かと思ひ一度目覺めたが別に變つた様子も無かつたので、

再びうつら／＼と眠り初めた。犬は之を見て又もや烈しく吠へた。眠を覺まされた泰藤は大いに怒り刀を抜いて犬の首を打落した。打落された頭は忽ち樹上の巨蛇の首に飛びつき、遂に之を噛み殺してしまつた。初めて事の次第を知つた泰藤は大いに犬の義心に感じ、犬頭靈神として当社へ祀つたのであると云はれる。

○ 41 大藏猫 (碧海郡)

六美村大字正名に昔大藏といふ者があつて、一匹の猫を我が子のやうに可愛がつて養つてゐた。猫は幾年か飼養されてゐる中に段々ころへて、終には人眞似さへ覺えた。或る日のこと大藏が耕作に出た後老婆が唯一人で留守をしてゐた。猫は時到れりとばかりにその老婆を食つて老婆の姿となり、着物を着て前垂を掛け手拭をかぶり大きな袖なしを着て、大煙管で煙草をすばすばと吸つて婆さんを装つてゐた。聽て大藏が歸つたがそんなことは夢にも知らず、眞の婆さんと信じ切つてゐた。それのみか大事な猫が見當らぬので八方捜し求めたが遂に見出し得なかつた。それから幾日か過ぎた或る夜半、大藏が異様な物音に眼を覺ましそつと透かして見ると婆さんの猫は耳までも裂けた大口を開いて、物凄しい形相で呼吸も荒々しく行燈の中の魚油を嘗めてゐた。大

蔵が吃驚して大聲を擧げると猫は姿を消して何處へか逃げ去つたといふ。

○ 42 林松寺水呑龍 (幡豆郡)

室場村大字室村林松寺境内に薬師堂がある。此處の正面入口の欄間に水呑龍と呼ばれる龍の彫刻がある。往古時々抜け出して寺前の蓮池で水を呑み、或ひは里人を驚かしたので住寺が一眼に釘をうち、腹鱗三枚を抜き取つたら其の後は出なかつたと傳へられてゐる。

○ 43 山犬の卵 (額田郡)

河合村大字須淵に屋根岩といふ岩があつて、その下に山犬の卵があつた。大久保某と云ふ者が山犬の留守に此の卵を提げてみたが、一寸した拍子に落ちて二つに割つてしまつた。山犬は非常に怒つて大久保某の飼馬を追出し、それを殺してしまつた。そして毎晩山犬はその馬肉を食ひに來た。そこで里人はいけ鐵砲を仕掛けて置いて射ち殺してしまつたと。

○ 44 古城の狐 (額田郡)

宮崎村大字石原の古城に古狐が棲んでゐて時々通行人を迷はした。或夜狩人が此の古狐を射殺さんと思ひ近寄つて見たら、太い木の上で婦人が灯を燈し黙々として綿を紡いでゐた。狩人が此の婦人をねらひ射ちにしたら忽ち眞暗闇になつたが、前の婦人は尙手に桶を提げ散亂した人骨を拾ひ集めてゐた。今度こそはと狩人がその婦人の手にした桶をねらひ射つた所、遂に古狐を獲り得たといふ。

○ 45 ぬけ出しの虎と龍 (額田郡)

福岡町の舊代官早川家桐傳の虎の一軸、並に高須越崇寺の天井裏に描かれた龍は共に目つぶしされたと傳へられる。虎が毎夜抜け出して附近の田畑を荒すので、隣人が早川家へこの由を願ひ出た。早川家では早速虎に目つぶしをしたが、それ以來虎は抜け出さなかつた。丁度その折、越崇寺邊でも何者か田畑を荒すので、或ひは寺の天井裏の龍の仕業では無いかとて、同様目つぶしをしたが果して以來田畑の荒れることは無かつたと。越崇寺は後烏有に歸し今はその跡も留めてゐない。

46 ほら貝穴 (額田郡)

昔伊勢の海から地下をくぐつて来たほら貝が、岩津町眞福寺境内で七日七夜鳴動して後天に昇つたと傳へられ、その抜穴と云はれるものが現存して居て土地の人はほら貝穴と呼んでゐる。此のほら貝は三斗七升入であつたといふ。

47 眞福長者と青蛇 (額田郡)

昔岩津町に眞福といふ人があつた。或る時宇彌野の原を通りかゝると幼童が路の傍に集り、小さな青蛇を捕へて悪戯してゐた。蛇は今にも死にさうなので眞福は見るに忍びず、子供等に錢を與へて蛇を貰ひ受け早速草叢に放した。蛇が喜色を現はして逃げ去るや否や、天俄かに黒雲起り雷鳴電光物凄く、盆をくつがへす様な大雨で水は路に溢れ、人々は全身濡れて家に走つた。然るに眞福は少しも濡れずゆうゆうと廬に歸り、晩課の勤行を畢つて寢に就いた。曉近き頃容顏美麗な女童が枕邊に来て眞福に「私は昨日宇彌野の原で命を助けて戴いた者です。私は海龍王の寵女であるが小身に變化して廣野で遊んで居たところ、陽氣の暖和で睡眠を催し遂童子等に捕へられ

たもので、既に殺されさうになつても小身變化の爲身心共に通力を失つて、如何ともすることが出来なかつたのである。私の危急を救つて下さつた大恩は誠に御禮の致しやうがない。私は今奇犬を携へて来たから御禮に差上げます。此の犬は海中の寶であるが私の命を救つて呉れた恩人への爲、兩親も吝惜の色なく之を贈つたのである。毎日米三升を飯にたいて犬に與へられたい」と言ひ畢つて、彼の女童の姿は消え失せた。眞福が夢から覺めると床に近く奇犬が踞つて居た。さて眞福が夢の告の如く精米三升を飯にたいて與へると、則ち砂金三升を吐き出した。(犬を飼ひし所を犬飼の里といひ、今も犬飼畑の地名小字として残る)かくして日に月に金は積り積つて遂に大富貴の家となり、里人は眞福長者と呼んだ。

48 妙勝寺の龍の由來 (西加茂郡)

高橋村大字上野山に法珍山妙勝寺と呼ぶ眞宗の寺がある。此の寺の本堂の欄間に二匹の大きな龍が刻まれてゐる。龍は油ぎつて黒光りに光つてゐる。じつと見てゐると其の鱗は動くやうで、目は爛々として物凄く姿である。或る時餘り煤けたからと之を欄間から取はづして洗ひ始めた。すると俄かに空が黒雲に覆はれて忽ち大雨となつた。二日三日と降り續く大雨に田畑は荒れ、堤

防は崩れて大騒ぎになつたと傳へられ、その後は誰も手を觸れるものがないといふ。

49 地獄に通ふ窟 (東加茂郡)

盛岡村大字岩谷に自然の岩石で出来た窟がある。此の窟は地獄まで通つてゐると云はれてゐる。昔子供が誕生日になつても歩かないので其の母が「お前は誕生日になつても歩かないが何故だ」と尋ねた。すると其の子が「誕生祝の餅を搗いて呉れぬからだ」と答へた。其處で誕生祝の餅を搗いて背負はせてやると、其の子供は歩き出した。すん／＼行くので何處まで行くのかと見てゐると、此の窟の中に這入つてしまつた。母親が呼び出さうとすると其の窟から毛の生へた大きな腕がにゆつと出たので、母は吃驚して逃げ返つたさうである。

○ 50 カ シ ヤ (北設楽郡)

段嶺村大字田峯竹島の森下某、嘉永年中のこと、家に死人があり葬式の最中、空が俄にかき曇り大風が起つたかと思ふ間に、向ひの大字三都橋にある龍頭山よりカシヤが現はれ、死骸をとらんとした。人々は家に逃げ入つたが、日光寺の圓丈和尚は直に棺桶の上のり讀經を續けたの

で、その法力に依つてカシヤは退散したといふ。カシヤとは年經た猫が山に入り變化したものだといふ。

○ 51 御堂山の天狗 (北設楽郡)

田口町の御堂山から風越にかけて昔は天狗が三十六人住んで居り、添澤には十八人、鹿島には何人とか居た。現に御堂山には「三十六人衆」が祀つてあり、添澤にも「十八人衆の小祠」がある。或年霜月十八日の花祭の夜、村人の一人が手にする松明を「風越三十六人衆」と叫んで空に投上ると、松明は風もない空を盛に燃えながら風越の方へ舞つて行つたといふ。

○ 52 牛ころびの佛 (北設楽郡)

下津具村から豊根村大澤へ通する大峠の東端に牛ころびの峠といふ所がある。昔牛がここでころんで起き上らなかつたのでその名がついたといふ。或時乞食がここで寐てゐたが、それなり死んでしまつた。そしていつかこの峠に佛が祀られるやうになつたが、村人が腰から下が痛み苦しんでゐると、夢枕に不思議な人が現はれ「我は牛ころびの佛だが、お茶を供へてくれればお前の

病氣を癒してあげる」といふ。次の日その通り牛ころびの佛に茶を供へると病氣はすぐ癒つた。それから今でも年に一回牛ころびの佛に供養が行はれる。

○ 53 天狗の火 (北設楽郡)

上津具村折元峠とその西天狗棚との間に不思議な火が現はれ、たくさんに分れたり、一つにかたまつたり、消えたりする。人々はこれを天狗といつてゐたが、明治の初頃からこのことが止んだといふ。

○ 54 天狗 (北設楽郡)

武節村大字小田木の獵師が段戸山へ獵に行き、晝寐をしてゐると、下の方で「ビュー、メリメリ、ドシャン」と大木を伐り倒すやうな音がするので、天狗のいたづらだと思つて家路についた。すると前の林に猿が鈴なりになつてゐるのが見えるので、其處へ行くとそんな様子が見えない。氣持が悪くなつて家に歸つた。後で大きな音のした所へ行つて見ても、何もかはつたことはなかつたといふ。

55 石龜峠の龜 (北設楽郡)

稻橋村大字大野瀬と美濃國惠那郡上村境の石龜峠に昔夫婦龜が棲んでゐた。或時雄龜はこの附近の池の平の池に棲む雌龜とねんごろになつて、しばらく石龜峠からこの池へ通つてゐたが、そのうちに行ききりになつて二ヶ月も歸らなくなつた。そこで石龜峠の雌龜は心配して土産神に祈願したところ、二十一日の満願の日丑満頃雌龜の枕元に荒武者が現はれ「我は産土神なり、雌龜は池の平の雌龜とねんごろなれば、二匹の龜の命を預る」といつたので驚き「夫の龜の命は助けよ」と願つたが聞き入れず姿が消えた。産土神は池の土手を切り崩したので、二匹の龜が驚いて這ひ出すところを、雌龜は妻の雌龜の願もあるからとむごくせず、そのまま命を斷つた。峠に龜石となつて残つてゐる。雌龜は産土神に棒で頭を打たれ脳味噌を出し、頭がくだけて死んだ。今峠にミソクダ石となつて残つてゐるのがこれだといふ。

○ 56 花祭と天狗 (北設楽郡)

振草村その他で行はれる花祭の時天狗が多く集つて舞ひ廻り荒れ狂ふことがあつたので、祭の

始に祭主の花太夫が辻堅といふ法力により天狗の入るを阻止して事なく祭を終る。辻堅に不浄がある時は、天狗は法力を破つて入り來り亂暴をする。この法力の現はれがあると遠くの高山に數知れぬ天狗の火が出渡するといふ。

57 狸

(北設樂郡)

振草村大字小林で或晩狸が「東光寺の坊主トントセウ(死ね)」と盛に呼るので、東光寺の和尚も負けず終夜「さういふ奴はトントセウ」と呼ばりつづけた。夜明けて見ると大狸が腹を打ち破つて死んでゐたといふ。

58 山

犬 (北設樂郡)

三輪村大字川合に小石久右衛門、俗に鬼久右衛門と言ふ名の三人力又五人力といはれる力持があつた。當時山犬が里に出て村人が困つたことがある。久右衛門は九月の節句の餅を重箱に入れ八名郡名越村へ行き、歸りに山犬に遇つて臂を食ひつかれたが、ひるまず、川合村の「廻りコシ」の西村某の家へ追ひこんだ。西村某はテンピン棒で足拂をしたが、山犬のため戸箱の中に追ひこ

められた。そこへ鬼久右衛門が追ひかけて來て退治してしまつた。その山犬はずゐ分大きく、長い間さらし物にしてあつたといふ。

59 龜淵の河小僧

(北設樂郡)

三輪村の長岡と川合の境に龜淵といふ淵がある。大力の鬼久右衛門といふ人が夜長岡の池場から川合へ來る途中、自分の前をカブロッコ(髮型禿兒?)の女の子が行き、龜淵まで來ると、その女の子は振りむいて「火をかせ」といつた。久右衛門はこの龜淵には河小僧が出るときいたので、この河小僧めと、煙管の雁首で女の子の頭を打つと同時に氣を失つてしまつた。夜が明けてから生がついて川合村へかへつて來たさうだ。その子はこの龜淵の主ださうで、その頃この淵の深さを測らうと鉈を繩に縛りつけ沈めた人かあつたが、その人は間もなく谷へ墜ちて死んださうだ。

60 大蛇の穴

(北設樂郡)

三輪村大字奈根字中奈根の奈根橋を少し上つた水際に高さ六尺程の横穴があり、下は水に浸つ

てゐる。竹竿を何本ついで入れてもどこまでも入つて行く氣味の悪い穴で、この穴には昔八名郡七郷村能登瀬のちやちやあ淵にゐた大蛇が移つて棲んでゐるといふ。

又小田のサモト(屋敷名)に通じてゐるともいふ。その證據にはサモトで流したメンバがその穴から流れ出たといふ事である。

61 川 小 僧 (北設楽郡)

本郷町大字本郷におほかげとて力の強い馬が大百姓の家に飼はれてゐた。ある日田にしろかきにつれて行つて、夕方柳瀬へ洗ひに行き馬を泳がせた。そこには深い淵があつて昔はカアランバ(川小僧・河童)が居るといつてゐた。その馬を家につれかへると、カアランバが尻尾につるさがつてゐる。川小僧は捕へられて厩の入口の柱に縛りつけられたが、如何にも小僧らしい顔をして居た。女衆が出て来て「にくらしい奴だ」と頭から水をかけたら、川小僧は恐ろしい力を出して繩を切り川へ逃れて行つた。川小僧は馬を引込まうとして川から引上げられ、頭の鉢の水をこぼしたから力が無くなつたが、再び水を得て強くなつたといふ。おほかげは川小僧を引上げた強い馬だとほめられたものださうな。

62 大 蛇 (北設楽郡)

下川村大字下田の南を流れる振草川を渡つた所を南郷といふ。ここには昔から大蛇がゐるといふ。或朝早く草刈に行つた中屋のおりうさは、そば畑九さくり(一さくり三尺位)に涉つて丸太があると思つて見てゐると大蛇だつたとのこと。その後毎年のやうにそば畑に丸太を曳いて通つたやうなあとが出来たといふ。

63 龍 の 駒 (北設楽郡)

園村大字御園高遠の北の山へ天から龍の駒が毎年五月節句の朝早く降りて來たので、その山を龍男岳、龍女岳といつた。その駒には翅があり、蹄は二つに分れてゐた。この山は御園村の共有林なので、村人は山の草をとつて馬の飼料にしてゐたが、五月の節句の日、朝早くこの山の露草を馬に與へると龍の駒の胤を宿すといひ、その朝を待ちかね村人は争つて草を刈つた。その草の露は龍の駒の尿だともいふ。やがて「高遠」の上屋(屋敷名)に立派な駒が生れた。その駒は元氣よく、翅が生えて蹄は牛のやうに分れ、今にも飛び立たんとする勢に、家人は却つて恐れて撲ち殺

してしまつた。それから村人に告げ、附近の大松の根に埋めた。この松は龍の松といひ大きな藤が巻きついてゐたさうな。今は暴風雨に倒れ、二代目の松と藤が生えてゐる。尙附近の岩に龍の駒の跡がのこつてゐたといふが、苔蒸して見難い。又龍男岳、龍女岳が焼けると村の景氣がよくなるといひ、焼いたこともあるさうな。

64 杉に住む鬼 (北設楽郡)

一宮村江島のある杉林に大きな杉があつた。この樹には鬼が住んでゐて下を通る人をつるべでさらつたといふ。

65 おくり火 (寶飯郡)

一宮村の八名井と江島の境をする堀割の傍へおくり火が出るがあつて、人がそのあたりを通ると提灯のやうな火が後になり先になりして離れず、金澤村の或家の前まで来ると、其處にある榎木へ消え去るのが常であつたが、その榎木を切つてから出なくなつたといふ。

66 人に化けた狐 (寶飯郡)

一宮の西原から成信の橋を渡つて梵地ヶ池の邊を通り、城戸に行く途中の小丘に成信といふ百姓が住んでゐた。或夜美女が妻にしてくれと尋ねて來たので、之をきき入れて妻とした。やがて男子を生み森目と名づけ可愛がつてゐたが、或年病の床に臥したので夫婦は夜晝看病にいそしんでゐた。時は五月、成信の控田だけは荒地のやうになつてゐるのでひそかに心配してゐたが、或朝ふと見ると田植が終つて稲が倒に植ゑてある。驚いて妻に告げようと我家に入ると寢てゐる妻の夜具の中から狐の尾が見えた。目を開いた妻は狐である自分の本性を見破られたと知り、加へて夫から稲が倒に植ゑてあるときいて、我子を抱き田に出て

「世の中よかれ我子に食はしよ検見を逃がしよ苞穂でみのれ」

と三回いふと倒の苗は忽ち正しく立ち、見るうちに莖葉は伸び繁つた。夫に子供のことをたのんで、空をさしまねくと黒雲が出て一陣の風と共に世は暗黒となり、傍に茂る葛の若葉を巻き立てて狐は消えて行つた。それから葛の葉はいつも裏を見せてゐる。

やがてその年の秋成信の田だけは穂が出ず、検見の役人も見すごして、年貢御免となつたが、

穂は苞の中で熟して豊作だったといふ。

67 大池の大蛇 (資飯郡)

一宮村大字松原の欠が下に昔大池があつた。附近の某女月のものが止つたので下女を連れてこの池で身を潔めてゐると、急に顔色がかはり頭髪が逆立たんばかりになつたので、下女の言をきいて急いで帰宅したが、池から大蛇が出てそのあとについて来た。蛇は女の家を動かないので、その主人は「あの女は私の女房ですから引きとつてもらひたい、そのかはり毎年二回我家のあらんかぎりあなたを祀るから、どうか我家の子孫が永久に榮え、又水に溺れないやうに守護してほしい」と願つたところ、大蛇はうなづいて池に引き上げた。

其後何年か過ぎた頃一宮町の半兵衛坂の上に半兵衛といふものが住んでゐたが、或年の六月頃同家の祖父が行方不明になつたので村中總出でさがすとこの大池に死體となつて浮いてゐた。村人はこれは大蛇のためだというて大蛇を退治することになり、隣村八ヶ村のものが集り水替を始めた。すると大雷雨が起り水替の仕事は更に進まないで、刀を拔身にして池に示したがそれも効がなかつた。そこで方法を替へて遂に六月の二十七日までに埋めてしまつた。後之がため六月

二十七日を農休としてゐたが、時期が遅いのでいつかもと早く改められた。

大蛇の行方はその後知られなかつたが、又幾年か後、村人の夢枕に立つて「何月何日には野火があつて我は焼死なんとする。救はれたい」といふ。其日果して小南口から野火が襲ひ宮裏一帯の野に村人が出て人家を専ら守つた。大蛇の居所は知るものがなかつたが、一宮の宮裏から豊津に出る楠坂の傍の楠の大木の洞穴で冬籠をしてゐて、そこで焼死んでしまつた。この坂の北に蛇塚といふ所がある。そこはこの大蛇を埋めた所といふ。

又一説にはこの附近に大池の松といふのがあつたが、この松は大蛇を埋めて其上に植ゑたものともいふ。

昔豊津の子供達は大蛇の骨を拾つて来てこれを臼として飯ごと遊などをしたといはれる。

68 疖の虫 (資飯郡)

一宮村大木の下寅藏は獨身で弟夫婦の世話になつて農事を助けてゐたが、生來多病、殊に疖の病がひどかつたので観音を信じてゐた。或年大木の進雄神社境内の神宮寺の鐘が紛失した時、寅藏は讀經した後「今鐘は本野ヶ原で二つに割れようとしてゐる」と言うたので、人々は一笑にふ

したが、再三言ふので尋ねて見ると果して、その一部は埋もれ、一部は盗人に持ち去られた後であつた。

或日寅藏が畑仕事で疳が起きて苦しんでゐるのを知人の林喜代松が見つけて、家に送りどける途中、寅藏は「私は一生疳で苦しんだ。今度こそは壽命がないから助からない。死んだら疳の蟲に化して人々を救ひたいから、どうか私の墓の傍へ二本の松を植えてもらひたい」と願つた。然し喜代松は聞き流して居た。それから間もなく文久三年三月二十九日に死んで「獨遊吟歩善男」となつた。喜代松はその後數ヶ月何事もなかつたが、或晩氣分が悪いまゝ床についた。その夜半におこりをふるつた。家人は何かの祟りかと占者にきくと「今は亡き人に頼まれ事を果さないため。」といふので、喜代松にきくと、喜代松は寅藏の頼みを思ひ出して、その事を話したので、松を二本寅藏の墓の傍に植えた。すると、喜代松の病はすぐ癒えた。そして日ならずして松の根元から小蟲が數多匍ひ出した。

或人が疳の子供に試に吞まして見るとすぐ治つたので、この噂を傳へきいた人々は、誰いふとなく疳の蟲とてこれを靈藥とした。その松は今一本枯れて、一本だけ残つて大木となつてゐる。

69 天狗小僧 (寶飯郡)

小坂井町大字篠束字郷中の醫王寺に慶應の頃、利口で頓智よく何でも知つてゐて、いろいろな豫言がよくあたるので天狗小僧と呼ばれる小僧がゐた。その頃よくお札が空から降つたが、天狗小僧が今日はお札が降ると言ふと必ず降り、今日は降らぬといふと決して降らなかつたといふ。

70 三足龜 (寶飯郡)

赤坂町の宮路山に七不思議とて、登り藤、片目の石菖、蛭石、八字まむし、三足龜、三葉楓、木々の紅葉が名高いが、このうち三足龜は持統天皇宮路山に行幸、今の車曳のあたりを御通轡の際、龜が御車の前に現はれ、足を一本挽き切られた。それから宮路山に住む龜は足が三本になつたといふ。

71 神石の白蛇 (寶飯郡)

八幡村大字平尾字駒場に神石がある。一老婆が毎朝のやうに神石の前で祈つて頭を上げると、

その石の下から白蛇が首を出して、「下の流に身を潔めよ」というたので、すぐに「ド、ド、ド」といふ流れに身を潔めた。それから「ド、ド、ド」には神が鎮座されると。今でも洗物をする人がない。

72 左甚五郎の虎猫 (寶飯郡)

大塚村大字赤根の法住寺の山門に左甚五郎作といふ唐猫が刻まれてあるが、昔この猫夜になると民家の作物や家畜を掠めたので、足を一本切り取つた。それから難をのがれたといふ。

73 茶屋螢 (寶飯郡)

長澤村字古城の御殿跡に音羽螢又の名を一螢ともいうて、尻に一の字の光を發する螢がゐる。家光公上洛の際、茶屋の主人近藤某、この螢を御覽に入れて、感賞あり、茶屋螢の名を賜はる。

74 大鰻 (寶飯郡)

長澤村字關屋邊より額田郡境まで、昔は大沼があり、その中に數十丈の大鰻がゐて人を害した。延暦年間田村麿がこのあたりを夜行中、大鰻が入道坊主に化けて出たのを、強弓一矢にて退治し

たので里人は喜んだが、その後沼の水を汲むものが悪病に罹るので鰻の祟だと怖れて、沼の畔に一祠を設け諏訪明神を勧請してからこのことが止んだ。それからこの地を置宮といひ、又この沼に沿ふ並木を鰻並木といふ。その後領主の命により、數千束の松葉を沼に埋め耕地としたので、字を千束といひ、この地より流れ出る川を今でも田村身洗川といふ。

75 大螺 (寶飯郡)

星越峠から三谷町へ五六町下つた所に昔大きな池があつた。そこに稻叢程もある大螺が棲んでゐたが、或人が捕へて今の須田のあたりで見世物にしたが、やがて死んだので、蒲郡の五日市に出さうと村の西の川で螺を洗ひ料理して市に出した。このことがあつてから、池をニシタ池、見世物にしたあたりを錢取場、川をニシタ川(今西田川)、五日市のあつた所をニシを小賣した所といふのでニシノコウリ、今西の郷となつたといふ。

76 章魚と蛇の戦 (寶飯郡)

三谷町沖の大島は昔は竹が茂り、大木も多かつた。又白蛇も居り、蛇はかなりたくさん居た。

或時章魚と蛇が争つて蛇は大松に上り、下に章魚が陣取つて争をつづけてゐたが、そのうちに松が曲つて蛇は海中に入り、章魚とはげしく戦つたが力盡き兩方とも死んでしまつたといふ。

77 一本松のごひん様 (渥美郡)

田原町大字谷熊宮坂を登ると松の大木がある。夏時ごひん様がこの梢に現はれ、火の粉を散らしたり、大きな火の玉になつたり、小さくなつたりするが、このごひん様の現はれた時は附近に漁をしても少しの獲物もないといふ。時にごひん様が現はれ急に獲物が多くあつたので、着物にまで入れて家にかへると泥にかはつてゐた。

又今岡附近で、船で網を打ちに行きごひん様が船にとまると急に船が動かなくなり、船を捨てて逃げかへつたこともよくあつたが今はなくなつた。

ごひん様は鳥であるともいふ。

78 はいはい鳥 (渥美郡)

田原町大字田原字藤七原に貧しい一家があつた。母と十歳位の實子と他に數人の先妻の子があ

つた。母親が或時薪をとりに行き他人の薪をもつて歸つたので、村人にはせめられ、役人に捕へられることを恐れ、實子を道づれにして瀧頭池に投じて死んだ。間もなく池の附近に人聲に似て「ほういほうい」と呼ぶ鳥が現はれ、一羽に答へて他の一羽「ほういほうい」と互に呼び合つた。聞くもの母子の鳥に化して呼び合ふと噂し合つたが、誰いふとなくこの鳥をはいはい鳥といふやうになつた。このころでも時々この鳥の啼くのをきくといふ。

79 豊島池の白馬 (渥美郡)

中山村(今福江町)の八兵衛が或日馬を連れ石塔山に草刈に行つて草を刈つて居ると、何時の間にか馬の姿が見えなくなつた。家にも歸つたのかと尋ねながら豊島池の三本松まで來るとその馬が草を喰べてゐた。喜んで乗らうとすると、忽ち白馬に變じ池中に入らんとし「我は池の主の化身である、汝を我住家に伴ひ行かん」といふので、八兵衛は驚き一どんな供養でもするから命をたすけられよ」といふと白馬は消え失せた。八兵衛は家から白米を持つて來てその場所で焚いてゐると、やがて焚き上らうとする頃、池水が波立ち、物凄い音がして來たので驚いて家に逃げかへつた。翌日出かけて見ると飯はなくなつてゐた。それから毎年十二月の大晦日にはその場所

に御供物をした。これは八兵衛の子孫に至るまで長く續いてゐたといふ。

二七二

80 豊島池の大蛇 (渥美郡)

福江町大字古田に寛延の頃六藏といふ鐵砲の名人が住み、領主戸田家の御獵番をしてゐた。或日領主のために獵に出て前山に來た時、睡けを覺えたので草原に午睡してゐると足にふれるものがある。目をひらくと尺にも足らぬ蛇が己が足をのり越えんとしてゐたので、鐵砲で拂ひのけると姿をかくした。と突然前方に大猪が駈けて行くのを見つけ、龜山村石塔山にまで追ひかけ、西山へ駈け下りんとする所を二つ彈丸を込め強薬にて打放した。手筈があつたので、喜こんで近よると猪にあらず丈餘の大蛇が苦しんで居つた。折から急に雨風が起り雷鳴までもものすごく起つたので六藏は命からがら家へ逃げかへつた。そして妻にありし次第を物語ると「止めをさしたか」と問はれ、後の祟が恐ろしいので、家の裏の小窓から金銀の彈丸をこめて止めの鐵砲を打つた。翌日、昨日の場所に來て見ると大蛇は死骸となつてゐたので、六藏は大蛇の頭を切り家に持ち歸つたが、間もなく名も知れぬ病にかかつて死んだ。時に寶曆二年四月十六日法名を夏雲信士といひ、長澤村の長澤寺に葬つた。

(一説) 六藏は家に歸る道を迷ひ山田村泉福寺に到り、和尚のすすめて止めの彈丸を打つたともいふ。

その時六藏の妻は身重だつたが、やがて一女を生み「おくす」と名づけた。美しい子だつたが、長ずるに従ひ「妾は豊島池の主である。成人したら人を呑まん」など口走り、十七八の頃より狂人の如くなり女子供を苦しめたので母は座敷牢に入れておいた。ある年の梅雨時、壁を破つて逃げ出したので、村人に頼み「おくす」をさがしてもらつたが姿が知れなかつた。ふと豊島池の主と言つたことを思出して村人と連立つて池に來ると三本松といふ所に、おくすの草履、櫛、着物などがあつたので、入水したものと手分けしてさがしたが遂に見つからなかつた。時に安永二巳年五月九日、この日を命日として法名を蓮峯如雲信女とつけた。

六藏の妻も娘の死んだ翌年四月五日に死んだ。法名を生養妙本信女といふ。かくて六藏の家の跡も絶えて佛祀りをする人がないので、のこつた多少の株(田畑山林)をついで相續するものがあつたが、不思議にいつも後をついだ家には不具者などが出來て不幸が絶えなかつた。

81 黒淵の龍（八名郡）

大野町の傍を流れる板敷川に昔黒淵といふ魔の淵があり、近づくものおこりをふるひ數日にして死ぬといふ。この主は神龍とて人々はこれを恐れてゐた。或時二三年凶作が続いたから、これは神龍の祟とし、その怒を鎮めんとしたがかへつて人命まで傷けたので、領主鈴木氏は奥山方廣寺の眞覺禪師にたのんだ。禪師河原に三七日の讀經し、氣に大喝すると神龍は失せ散じ、波は静まり、今まで底の知れなかつた淵底が明かに見えるやうになつた。その後祟がなくなつたといふ。鈴木氏は禪師に請うてその菩提寺禪林寺を河原にうつし淵龍寺と改め神龍を鎮守したといふ。

十一、神佛の祟りと怨靈の話

○ 1 篠木宗八（東春日井郡）

篠木村の關田に、昔篠木宗八といふ强悍犖猛な盜賊がゐた。俗に曾呂利とも言つた。其の黨類が多くて、村人達は大いに惱まされた。或る年の夏にこの宗八が疫死したので、大草村福嚴寺の盛禪和尚によつて引導が渡された。愈々棺を擧げようとする、俄かに青天が掻き曇り、すさまじい雷雨に乗じて火車の怪物が襲ひ來た。人々は色を失つたが、和尚は平然として炬を乗り棺上に静坐して一心に呪文を唱へられた。すると怪物は退散して再び青天にかへつて平日と異なることになつたといふ。今でも同地に曾呂利塚といふのがあり、雨の降る晩などには、内津川の堤防を櫻佐裏田の方へ曾呂利が提灯をとぼして行くと里人は言ひ傳へてゐる。

2 餅をつかない村（西春日井郡）

北里村では古くから正月前には餅は絶對につかない。唯大晦日に米の粉をこねてハギシリ餅と

云ふものを作り、正月のお雑煮はこれを食べる。數百年前、此の村に疫病が流行し剩へ飢饉が打續いた。そこで村民一同は相計つて神前に集り、「今後目出度い正月を迎へても村民一同は慎んで餅は搗かないから何卒御加護を」とて、村内にある臼一つ残らず神前に捧げて日夜祈願をこめた。それから疫病は絶え、豊年が打續いた。村民は神前の誓を固く守り、神の御惠を感謝しつゝ、生業にいそしんだのである。所が明治になつてこの誓を破つて餅をついたものがあつた、それ以來この村には頻々と火事騒ぎが起つてきた。此れは確かに神のお怒りであらうと一同大いに恐れ、それより正月前には絶対に餅をつくもの無く正月二日に村中擧つて餅をつく習慣になつた。ちなみに一旦神前に捧げた臼を足で搗くのは勿體ないといふので、昔から此の村には「ダイカラ(足でつく臼)」といふものが一つもない。

3 山田紀内幽霊と契る (西春日井郡)

清洲町に昔山田紀内といふ者があつた。ある晩門外にて十七八の美女に遇ひ、間もなく人目を忍ぶ中となつた。所が或る夜にその女が身の上を明かして言ふには「私は飯尾新七の娘で年十七で病死した。そして明日は當に三周忌に相當する。死して中有に止ること三年と云ふから、今宵

限りと思ふと悲しい。」と云つて夜を徹して互に語り歎いた。女は形見の品を残して姿を消した。その時亡き影を埋めた所は甚目寺のあたりと云つたので、紀内はそれを探めて程なく死んだといふ。

4 提灯とぼし (西春日井郡)

西春日井郡の坪の新川の堤防でお金を澤山落した人があつた。いくら探してもわからず、終にそれがもとで病死した。それから時折雨の降る淋しい夜などには、その人の靈魂がお金に心残りがあると見えて、提灯と化して堤防をさまよふと言ふ。

5 勘五郎火 (丹羽郡)

犬山町大字橋爪の百姓に勘五郎といふ男がゐた。年は十八で、母子二人の佗しい生活をしてゐた。或年の早天に勘五郎の田は疾く水が無くなつたが、他の田にはまだ水がいくら残つてゐた。しかし勘五郎は其の夜、ふらくとして田圃に走つた。彼はとうとう自分の田に水を引いてしまつたのであつた。夜が明けた時には最早や、勘五郎の罪は、明るみに曝け出され、利慾に情を

忘れた近隣の人々は怒つて勘五郎を打ち殺した。人々は勘五郎の死體を水田の中へ埋めて、何食はぬ顔で歸つた。彼の母はこれを見て狂死した。それから夏の夜、橋爪田圃に二個の陰火が出て爾來四百年青木川堤防は年毎に切れた。村人は妖火を恐れて、徳授寺大和尚に乞うて勘五郎母子の幽魂を慰めたといふ。

6 白髭大明神 (丹羽郡)

犬山町の白木屋へ、昔毎夜〳〵白髭の老人が何處からとなく現れて、主人藤兵衛の枕元へ来て「何故大杉を切つた、何故大杉を切つた」と責めたので、藤兵衛は遂に氣が狂つてしまつた。そこでこれは神の祟だと思つて、針鋼神社の境内に白髭大明神として祀つた。白木屋は其の後、次第に衰へて行つて今では犬山町に居ないといふ。

7 女人禁制 (丹羽郡)

池野村尾張富士には、昔婦人は登ることが出来なかつた。或る時一人の尼僧が「自分は頭の剃つてある男だ。」と言つて山に登つたが、途中で草臥れて傍の岩に手をつくると手がどうしても取

れなくなつたので、困り抜いた擧句、御祈禱をして貰つて漸くとれたといふ。

8 羽黒の敗戦 (丹羽郡)

羽黒村八幡林といへば、天正小牧合戦の折、森長可が徳川方と戦つて敗れた所である。長可が八幡林に陣を張ると森の中から一匹の蛇が出て來たので、神主達は、これは八幡神の御正體であつて、勝利疑ひなしと申し上げたが、長可はそれを疑つて彼の蛇を引き割いて捨てた。昔から良將は神威をかりて戦勝を得るに、長可は血氣の愚將であつたから、遂に敗戦の憂目を見たのだと云ひ傳へてゐる。

9 舟入の靈松 (海部郡)

蟹江町舟入地内の堤防に、觸ると病氣になるとか負傷するとかいつて、恐れ敬せられてゐる老松がある。かつて堤防改修に際し之を伐らうとした所、突如樹下の一家倒壊し死傷者さへ生じたので人々大いに怖れ、此の靈松だけは保存することになつた。

10 経塚の祟り (知多郡)

旭村の北粕谷の俗稱寺下といふ所にもと経塚があつた。今は狭い一枚の畑になつてゐる。此の畑を持つた人は家内に誰か病人が出来るとか、損害を被るとか、死人が出るとか何かの悲運がある。

老人は経塚で子供が遊ぶと罰が當るといつて戒めてゐる。

11 神戸の塚石 (知多郡)

内海町大字山海神戸の地内南面山麓の畑の中に塚石といふ大きな石があつて、耕作の際之に觸れると祟りがあるとて恐れられてゐる。

12 黄金の神像 (知多郡)

旭村日長神社に昔大きな楠の木があつた。榮えてゐた代官永井氏は、自家の普請に伐倒して使用した所、毎年家内中で一人づゝ死人が出てとう／＼自分一人になつた。或日修験者が尋ねて來

て「家人の死や家運の衰微は氏神様の祟りだ」と云つたので、永井氏は早速黄金の神像を日長神社に奉納し盛大に謝罪祭を行つた。後家運復興し繁榮して今日の永井一族をなすに至つたといふ。

13 刀の祟り (知多郡)

小鈴谷村大谷の藩士山の城主岸田重治氏の子孫は家寶として刀一振を傳へてゐたが、育兒都合悪く幾人も死んで育たぬので、其の刀の祟りで、らうとて他に奉納したといふ。

14 小櫻姫の媾曳 (知多郡)

富貴村に小櫻明神と稱へて婦人病など下の病氣に靈驗あらたかな塚がある。昔水野藤兵衛といふ地頭が今の圓觀寺のあたりに屋敷を構へてゐて、その内室が小櫻姫といふお方であつたといふ。雨降の夜には小櫻姫の靈が火の玉となつて圓觀寺の主人の靈に媾曳に行くといふ。

○ 15 今川義元の幽霊 (知多郡)

有松町桶狭間の池の堤に大松がある。昔三河棚尾の鰻屋が陰曆五月十九日(義元公の命日)に

此所を通りかゝると被つてゐた菅笠に松の露が降りかゝつた。鰻屋は氣味悪くふと空を見ると、白馬に乗つた今川義元の姿があり／＼と現れ「今夜の事を人に話すと命が無いぞ」と云つて姿は消えてしまつた。鰻屋は腰を抜かして尻もちをついたが後家へ歸つて此の事を話した所急病が起きて死んだといふ。

16 六所神靈不淨を忌まるる事 (東加茂郡)

文政八年七月六所大明神(松平村大字東宮口)の祭典場に在る舞臺が狭いので、東の方に附下しの庇を造作せんとして村人が集つて作事をなし壁土を練つた。其の時當村政右門方の傭人音吉と云ふ者が便桶で水を搬んだ。聽て舞臺も竣工したので、八月朔日から若者數十人が踊り狂言の稽古を初めたが、日夜怪しき打綿の如きものが其の座に来るので人々は大いに恐れて村役場へ申し出た。中には狐狸の所爲に違いないから鐵砲を持出して試したら良からうと言ふ者もあつて、翌二日の夜大勢の者が集つてゐると、火の玉の大きなのが現れて舞臺中を轉がり廻つた。之を見て一同は甚だ驚き作事の時不淨桶で水を搬んだ爲神の咎を受けたのであらうと云ふので、試みに大神の寶劍を持出して試さうと、三日の夜大勢集つて居ると夜の九つ時、舞臺の外六所山の所か

ら大きな足音が響いて人が來ると思ふ間もなく、上段の眞中に身の丈一丈ばかり頭はがつさうで眼眶赤く、兩眼は皿の如く鼻高く舌の長い神が現れた。右手に禰を持ち左手に目方百匁程の點火した大蠟燭を持たれ、御怒の氣色で席中を瞰み渡された。其の座に居た者は氣絶する者あり雨戸を押破つて走り出て倒れるもありて大騒動であつた。夜の明けを待つて一同は村役場に申出で、村方一同は謝罪の爲大垢離をとり、大給村の修驗者大善院を招請して直ちに般若心經を献じ奉つた。四日の夜は各戸とも婦女までも謹んで居たが、それ以來別に怪しい事も無かつた。

17 荒神の祟 (北設樂郡)

豊根村大字坂宇場の小川のほとりに荒神様が祀つてあるが、昔宇日余澤で中年の男が多く死し寡婦が多くなつたので、荒神様の祟だと、それから夫婦幣とて二枚の御幣を納め祀るやうになつてからこのことが止んだといふ。

18 ブク田 (北設樂郡)

稻橋村大字稻橋字平の町通りの西裏にブク田とて、昔からこの田を作る人はよく祟られる田が

ある。昔井戸のあつた所とて、田の一方の隅から冷水が湧き出て深い沼田である。この田の畦を塗ると翌日赤子の足跡が一面についてゐるといふ。

○ 19 生のある三番叟人形 (北設楽郡)

武節村大字小田木では昔村祭には人形芝居が村人の手で行はれ、今でも破損した人形が郷倉の中に保存してある。或年祭が近づいたので人形の練習をせんと、三番叟にも竹をさし着物を附け練習したが、さて竹を抜かうとしても抜けない。これはぶく(喪)の人が手をふれたからと、身を潔めて抜かうとしても抜けない。それからこの三番叟人形には生があるとして、祭の日には今日でもお祀をしてゐる。或年祀ることを忘れたら、大雨で困つたといふ。

20 尹良親王御休所 (北設楽郡)

稻橋村大字大野瀬字柏洞の御殿山には昔尹良親王の御休所といふ所があり、土臺石が残つてゐて、この礎石の兩側の草を採ると祟るといふて、この地の人達は決してここの草を刈らない。

21 倦 怠 佛 (北設楽郡)

振草村大字下粟代から大字神田へ通る、花丸峠下の路傍に倦怠佛とて苔むした墓石がある。寛永の頃非人がここで行倒となり死んだので、村人はここに埋葬し墓石を建てた。後ここを通りかかる旅人で空腹なものはこの墓の前まで来ると急にだるくなつて、足がしびれ、顔は蒼く、身體の自由がきかなくなつて倒れる。そんな時何でも食べられるもの(木葉でもよい)を口に入れて嘔むと元氣がよくなるといふ。村人は非人の祟だらうと恐がつてゐる。

22 エンキの立日 (北設楽郡)

振草村大字古戸に昔エンキといふ人があつて、正月十七日に八幡様の木を切つたが、エンキのよけてゐる方へ木が倒れてエンキは死んだ。それから古戸では正月十七日と盆の十七日はエンキの立日と言つて仕事を休んで遊ぶことになつたといふ。

23 神 木 の 祟 (北設楽郡)

三輪村大字長岡字澤上通稻畑の素盞鳴神社に杉の大木がある。昔飢饉の時境内の木を賣つて村

人は飢をしのいだが、その年疫病が流行して村に死人が出来たので神木の祟と恐れた。その後申年の飢饉に村人のうちにこの杉の大木を賣らんと計るものがあつたが往年のことを話して思ひとどまらせ、村の金持が金を出して無事だつた。その後も神木を買はんとするものも、遂にやめて神社に献金したが、その賣約をした夜神社の世話當番の一人が氣絶したりしたので、この大杉を御神木として村中崇めてゐる。

24 権現の森 (北設樂郡)

本郷町大字本郷、浅井の伊藤某他二軒へ秀忠公から権現様を祀つた祠と杉苗七本と白狐一匹を下された。祠を安置し、周圍に杉を植ゑ、白狐は附近一帯を守る神のお使になつた。いつか年を経て祀りもおろそかになり、白狐も人をだますやうになつたので、他の人が祀つたが又おとろへいろいろ祟があつた。それで七本の杉も権現の森といはれるやうに茂つてゐたが、祟の元だといふので切り倒された。ところが七本の根元は一本になつてゐて、その元に石臼をかかえこんでゐた。その臼は今でも残つてゐる。

25 てんばこ様と飛八様 (北設樂郡)

本郷町大字本郷、中在家にてんばこ様と飛八様といふ神様がある。この御神木を切つたり神様のものを持出したりすると祟があるさうだ。木を切つて怪我した人、その木切れを使つて病氣になつた人、又氣狂のやうになつた人の話がたくさんにある。飛八様といふのは奈根の伊藤丹羽守に仕へた江戸往復の飛脚で、恐ろしい健脚だつたといふ。

26 熊を喰べた祟 (南設樂郡)

作手村大字大和田字五郎八といふ萱場山へ弘化年中のこと、村人数人が萱刈に行き向ひ山の皿穴坊といふ岩上に熊を見つけたので鐵砲を持つて来て打止め、ひそかに持歸り皮をはぎ、肉を喰べて知らぬ顔をしてゐた。やがて十月二十日村社の神迎の祭に神前の扉が開かぬので論議をする。と熊を喰べたのが明らかになつた。連中は青くなつて額田郡瀧野村からみこを頼んで社内でお湯立を行ひ、氏子一般も火替を行つたらその日の午の刻やつと扉が開いたといふ。

27 桃の實らぬ村 (瀨美郡)

老津村に海を渡つて來られた神々がこの地でよく熟れた桃を望まれた時、村人は偽つて差上げなかつたので、それからこの村では桃の花は咲いても實を結ばないといふ。

28 吉祥天祠の怪光 (八名郡)

八名村大字八名井に今水寺を建てた時、境内に熊野三社を祠り、その奥宮を吉祥山頂に建て吉祥天女を祠つたが、この祠から時々怪光が出て遠く瀨美灣に達した。この時は漁が少しもないので、當惑した漁師たちは八名井に來て吉祥天の祠を少し下げてもらひたい、但し毎年鮮魚を奉るとのこと、村人はこの請を容れて、山頂より北より下つた場所に祠を移したが、それからは怪光が現はれなくなつたといふ。

二二、山人の生活、巨人傳説其他

1 山姥物語 (丹羽郡)

羽黒村の鳴海高橋といふ所に、昔福富新藏國平といふ武士がゐた。文明の頃羽黒川を遡つて富士、本宮のあたりに狩をすると、本宮の御社の拜殿に一丈許の大女が髪をふり亂してゐた。新藏はこれこそ噂の山姥と弓に矢をつがへてひやうと放つた。すると忽ち神燈がふつと消え、全山鳴動して雲霧が湧き騒いだ。夜の明けるのを待つて覗ふと、拜殿には黒い血が流れてゐた。そして鞍が淵の方へ跡がついてゐた。それを辿つて行くと、余野の里の小池與八郎の家門の傍で血がとまつてゐた。小池が妻はこの曉から床に臥した。與八郎が闖に入つて氣色を問ふも答がないので、布團を引き退けて見ると、妻の姿はなく血が夥しく流れてゐた。そして窓の障子に血で左の二首が書かれてゐた。

あぢきなき契の末のあらはれてつひにはかへる故郷の空
年月をなれにし里の宿かれて小池の水のすますなりにき

2 大力左市 (葉栗郡)

北方村に昔左市といふ者があつて、大日神社に人に超えた力量を與へ給へと祈念してゐたが何時となく強力になつた。或る年の暮れ左市は川向ふの圓城寺村の伯母の許に行つた。伯母が雑煮餅を調して振舞つた。左市は切つた餅をべろりと五十枚餘喰つて、尙飽き足らぬ様子なので、伯母はびつくりして、左市に、「お前はそんなに大食をして何の益があるか。」と問うた。すると左市は微笑して、「自分はこれといふ能もないが、この裏の竹箴にいさゝか仕置いたものがあるから行つて見て下さい。」と言ひ捨て、歸つたので、あとで伯母が彼の箴の中を見ると尺周りもある大竹二本を合せて根本から末まで葉と共に繩になつてあつたといふ。又或る時左市が船に荷を積んで木曾川を下つた時、折しも朝鮮人の通行で「起の渡」には橋がかけられて往來の船が止められてゐたので左市の船も支へられた。そこで左市は自分の船を陸へ引上げ荷を積んだまま細引で背負つて、悠々と二三町を運んで船橋の下にて、又元のやうに浮べて漕ぎ下つたと言ひ傳へてゐる。

3 神社の竹 (葉栗郡)

淺井町北方に昔一人の恐しい力持ちが住んでゐた。或る時試みに、境内の竹で繩をなつて見よと人に言はれたが忽ち大竹の繩をなつたと言ひ傳へられてゐる。其の後力にまかせて境内の竹を折つたり伐つたりして困るので、木曾川町黒田の某寺の住職に依頼して歌を詠んで貰つたら、竹が生えぬやうになつたといふ。その歌に、

年々に生ひ立つ森の竹なれば、いかでか神の何惜しむらむ

慈悲深き神の心に何物か、惜しませたまふ竹の不思議や

4 二十四人力士 (知多郡)

東浦村大字緒川の俗稱上の山といふ所に古い石碑がある。昔此の地に二十四人力のある力士がゐて、種々悪戯をするので、村人相寄つて彼に酒をすゝめ、泥酔して人事不省になつてゐるのを生理にした所だといふ。

5 お岩ヶ鼻 (知多郡)

日間賀島村の久淵の西部奥岩に百疊敷程のお岩ヶ鼻といふ岩窟がある。昔こゝにお岩といふ女賊が往んでゐたといふ。

6 小太郎の怪力 (額田郡)

豊富村大字榎山に小太郎と呼ぶ怪力無雙の男があつた。或時庄田の太郎作と其の力量を競はんとして、大雨の後激流奔騰せる太平川に丈餘の門戸を提げて飛び入り、流に逆つて押上げた云ふ。其の後宇熊野の奥から縦七尺幅三尺五寸厚さ一尺餘の大石を背負つて來て溝に架け、道行く人の便を計つたと。

7 白ひげ山 (北設楽郡)

下津具村の白ひげ山は、昔この山に白鬚の怪しい人がゐて村人をおびやかしたので、村人は白ひげ入道と呼んだ。頂上に小祠を建てて之を祀るやうになつてから一度も現はれなくなつた。そ

れで白ひげ山と呼ぶやうになつた。

8 段戸山の大坊主 (北設楽郡)

武節村大字小田木に昔茂平といふ男があつたが、或時段戸山の「蛇ヶ平」を通りかかると大坊主に出合つた。そこで腰の山刀を抜いて切りかかつたが何度も投げられたので、再會を約してその日は別れた。約束の日が來ても家の人達に止められて出掛けなかつたさうだ。

9 碁盤石山の怪力者 (北設楽郡)

名倉村と上津具村の境の碁盤石山には昔怪力な人が住んでゐたが、碁が好きで麓の人を連れて來ては負かして喜んでゐた。或時山下に碁の上手が現はれ、この怪力者と碁を戦はして美事破つてしまつたので、怪力者は怒つて碁盤をひつくり返した。それで碁盤石山を見ても條目がないのは碁盤の裏が現はれてゐるからだといふ。

10 エレン様 (北設楽郡)

本郷町大字本郷、三つ瀬で、昔正月二日に百姓たちが年賀に庄屋へ集つた。その時怪しい者が

山人の生活、巨人傳説其他

庄屋の屋敷の辻下へ来たといふので、年酒に元氣のついた人達が見に出た。怪しい者はオロン澤窪へ入つて行つた。皆手に棒を持つたり、正月飾の松の端杭を引抜いて行つた者もあつた。四五町窪を入つた野地で追ひついて一言二言かけ合つた末、何か言ひやうが悪いと、誰かが端材でなぐりつけた。ところが當り所が悪くすぐ死んでしまつた。それがエレン様である。それで死骸はその場へ埋めたが、その後村中に祟があつた。その上正月門松を立てると泣き呼ばるやうな聲がどこからともなく聞えて來るといふので、それから三ツ瀬村四十二戸は正月の松飾を門に立てないことになり、今も香の葉を差して門松の印にしてゐる。始オロン澤にあつたエレン様の墓は杵の音の聞える場所へ移してもらひたいといふ佛様の願ひで平栗へ移して祀つた。そこには立派な石の祠がある。エレン様といふのは人とも獣ともわからぬ毛だらけの恐ろしい大きな人間だつたともいふ。

11 入道坊主 (南設樂郡)

作手村大和田の阿部助左衛門が天保十四年十一月のこと、古戸の友人と獵に行き御嶽山で日が暮れ友人の家まで歸つたが、雨が降るので宿れといふのをきかず自宅へ歸る途中玉坂まで來ると

お寺の和尚が來る様子だったので近づくると大坊主になつた。入道坊主に違ひないと、傍の石に腰を下し所持の鐵砲を足に目かけて放つたら姿が消えたといふ。それから人呼んで「鬼もかなはぬ助左衛門」といつたといふ。今でも玉坂には入道が出るといふ。

入道坊主に逢ふ時は、始先方から三尺程の小坊主が來るのが見え、次第に大きくなつて、二三四間先になると八尺から一丈位の大坊主になる。その時「見越入道よおれが見越したぞ」といふと消えるが、先に入道から「見てゐたぞ」と言はれると自分の方が死ぬといふ。この入道坊主は狸の化けたのといふ。

12 だいらぼち (渥美郡)

老津村のいひ傳へによると、だいらぼちといふ大男が燈心で作つた畚と線香の棒で土を擔ひ一夜のうちに田原山をつくつたが、この時の土のこぼれが波瀬の笠山となり、その足跡が植田の道の傍にある水田だといふ。

13 山姥の足跡 (八名郡)

八名村大字八名井の西より段林といふ山中に足跡に似た凹みのある大石があり、土地の人はこれを山姥の足跡と呼んでゐる。大昔このあたりに大山姥が住んでゐたが、ある日髪を洗はんと片足をこの石上に、片足は豊川を跨いで本官山中の石上においた。その時出来た凹みだといふ。

14 あまのざこ (八名郡)

八名村大字庭野に腕扱山といふ小山がある。この山は昔あまのざこが本官山を跨ぎ、琵琶湖の土を掘つた時、腕についた土を抜き落した土で出来た山だといふ。

15 ダイダラボツチの足跡 (八名郡)

石巻山の石巻神社より五六町上にダイダラボツチの足跡がある。これは大昔ダイダラボツチがこの山と本官山を踏みまたいだ時出来た足跡だといふ。

二三、雨乞の話

1 「がくの洞」の雨乞 (東春日井郡)

品野町大字中品野の「めおとが瀧」の瀧壺を、「がくの洞」と言ふ。この洞の主は龍神で、雨乞の靈験があるといふ。さて雨を乞ふには、乞主と淨源寺住職とが齋戒沐浴した上、幣束を持つて岩窟中の龍神に祈願をこめてから、その幣束を「がくの洞」の淵へ投ずる。淵の水が忽ち渦を起して幣束を見事巻込めば効験があるといふ。今でも早魃の折はこの事が行はれてゐる。

2 眞清田神社の龍神 (一宮市)

市内眞清田神社の龍神に次のやうな傳説がある。昔弘法大師が雨乞をされても雨が降らないので最後に茅草で龍の形を造つて祈念されると、その龍がむくむくと動き出して、一貴僧が如何に御祈りになつても、天下の龍は龍王の命で皆封じられてゐますから駄目です。若し一粒でも雨を降らせたら其の龍の命はありません。」といふので、大師は、「ではお前犠牲になつて降らせよお

前を神に祀つてやらう。」とおつしやつた。龍は、「では私を尾張の眞清田の社へお祀り下さい。そして水の種を少し下さい。」と言ふので、大師が硯の水を大地に御灌ぎになると、忽ち黒雲を呼んで大雨を降らせた。その時黒雲の中から大龍の體がすだ／＼に切れて落ちて來たといふ。其の後大師は一宮にお出になつて龍神としてお祀りになつたといふ。

3 朝 鮮 鐘 (葉栗郡)

宮田町の曼陀羅寺に朝鮮から傳つた珍鐘がある。この鐘には龍が黒雲に乗つて下つて來る圖が刻してあるので村人の間には龍宮の乙姫から献上されたものと信ぜられてゐる。村に旱魃がつゞく折りには先づこの鐘を取出してお經をあげれば必ず降雨があつたと言ひ傳へてゐる。以前は毎年土用の虫干の日には拜觀が許されたが今は國寶に指定された。

4 雨 乞 經 (海部郡)

七寶村大字柱の六地藏に雨乞經を捧げると、如何なる旱天にも降雨を見るといふ。

5 貴船の水玉 (知多郡)

旭村大字南粕谷の貴船神社の御神體の寶玉はもと同村大智院にあつて、雨乞の寶玉とも云つてゐた。

昔この地方に大旱魃があつて何所の雨乞の祈願も其効顯れず困つてゐた。時の大智院の和尚で名僧の聞えの高かつた某法印が、硯に残つてゐる墨汁を水の元として、彼の寶玉に注ぎかけ雨乞の祈願をこめた所、不思議や一天かき曇り大雨沛然と到つたと傳へらる。

其後に於ても旱魃に際し、新しい鹽に水を盛りこの寶玉を浸して祈願するといつも雨が降つたといふ。この祈願をこめる和尚は人格高潔の名僧でなくてはいけないので、或時或法印が祈願した所、忽ち鹽のたがが切れ、雨は一滴も降らなかつたといふ。

6 城 ケ 淵 (知多郡)

河和町大字河和に城ヶ淵といふ所がある。旱魃で雨の欲しい時は大堰を築いて雨乞をすることになつてゐる。此所は昔は大きな深い底知らずの淵であつて龍神が住んでゐた。毎日滿潮時に海

へ出て龍宮様へ遊びに行くのである。故に大堰をつくると海へ出られないから、怒つて雨を降らすといふのである。

○ 7 八ツ頭神事 (知多郡)

東浦村藤江神社の八ツ頭神事を行ふと如何なる早魃にも必ず多少の降雨があるといふ。

八ツ頭神事の舞樂は素盞鳴尊の大蛇退治の古事を舞ふものらしく、尊になるものは古代面を被り、大蛇になるものは獅子頭を被つて胸に太鼓を付け二人にて舞ふ。此の二人の舞つてゐる所へ尊出で大蛇退治の様をなす、間もなく獅子頭をつけた獅子六人が出て舞ふ舞樂である。

○ 8 雨乞の面 (知多郡)

小鈴谷村大字大谷の東北隅に高砂山といふ丘陵がある。昔此所で早魃の際、翁の面をかぶり雨乞をしたのだと傳へられてゐる。

此の翁の面はもと伊勢の海の龍神様のもので、龍神が或日海より出て高砂山に登り頂上迄來てとある松の老木に此の面を懸け、長閑な春の景色を賞してゐる中に、村人が持歸つて仕舞つた。

それで早魃の時此の面を出して神事を行ふと、龍神が取戻さうとして大雨を降らすのだといふ。

この神事は、神主が神前で鈴を持つて舞を舞ひ、後海へ出て幾十艘の船に警固され沖へ出て、適当な所で神主が面をかむつて水面をのぞく、と沛然と大雨が降るに至る。歸りには龍神の怒りに船の顛覆しないやう、屈強な若者に警護されて引上げるのだといふ。

○ 9 龍の鱗 (豊橋市)

東田町の全久院に龍の鱗が寶物となつてゐる。これが雨乞の御神體である。これは豊川の上流である八名郡一鉄田のかイクラ淵に棲んでゐる大蛇の鱗だといふ。早魃で困ると近在の百姓たちはこの寺に雨乞の願をかけるが、なかなかの大旱でないといふ。さて願がかかると住職は潔齋の後大盥に水を一杯張つてこれに鱗を浮べ、血脈に祈りをこめる。この血脈を一鉄田のかイクラ淵へ持つて行つて濯ぐと急に雲が出て夕立が降るといふ。この血脈は沈めたら最後大洪水となるのでただ濯ぐだけださうである。

鱗については次のやうな話が傳へられてゐる。或る時この寺の住職のところへ美女がお血脈を戴きに來て、そのお禮に置いて行つたのがこの雨乞の鱗だといふ。住職が美女の歸る姿を見たら

須彌壇から山門に及ぶ大蛇だつたとのことである。

一説に、この和尚南設樂郡千郷村大洞山に居た時、美女が血脈をうけに來たのを八名郡八名村大字一畝田海倉の龍と見破つたので、和尚の手に龍鱗六片を残し寺の西南の井戸に入り海倉の淵に逃げたといふ。

○ 10 龍宮の雨乞 (岡崎市)

岡町(男川の大手橋上流約一杆)附近で夏時雨を乞はんとする時は、必ず龍宮に祈る。この雨乞の時は衣文そぶらの謂信寺の方丈が寺に傳はる寶物蓮絲の袈裟を懸け、さて淵に臨んで祈念し、最後に蓮絲の袈裟を取つて淵に投げる。此の袈裟が水中に巻き込まれると雨が降る。その袈裟は遠州櫻が淵か信州諏訪湖に浮び出ると傳へられてゐる。

○

岡村の鈴木某が斧を過つて此の淵に落したので、之を拾はんものと水中に潜つて行つたら、龍宮の主は其の來訪を非常に喜び、種々饗應し斧をも返して呉れたとのことである。聽て歸宅したら親戚故舊一同が集つて、鈴木某の三年忌を營んで居た所であつたといふ。

11 馬桶の水 (北設樂郡)

田口町大字清崎きよさきの東に鞍掛山がある。昔越後の金高長者の名馬が三河國の龍頭山まで逃げて來たので、これを追つた長者が龍頭山まで來ると又、東の鞍掛山へ飛び移つた。鞍掛山上に馬桶とて岩に三尺ほどの深さの穴があり、その中に水が絶えない。又傍の岩に馬蹄の跡が三つある。これはその時の足跡だといふ。早天にはこの馬桶の水を汲み出すと必ず雨が降るといふ。

12 三本松 (北設樂郡)

下津具村の大桑に三本松といふ山があつて、昔はその頂上に大松が三本あつたが、今は一本だけのことである。昔早魃でいろいろ百姓たちが手段を盡したが効めがなかつたので、最後にこの山の松に願をかけることになつて「どうか雨を降らしてほしい。願をきき入れてくれたら、これから毎年お祭をする」と祈つた。すると翌日雨が降つた。それから今日まで年一回三本松の祭がつづいてゐる。

13 雨 乞 淵 (北設楽郡)

武節村大字御所貝津字笹平の小川に雨乞淵といふ處がある。この淵に白形の石があつて、小石をこの石の凹みに投入れると雨が降るといふ。

14 寄合ばたの雨乞 (北設楽郡)

振草村大字上粟代字今水の「寄合ばた」では、昔旱天つづきの時村人が集つて、ここの大木を中心に鐘太鼓をならし踊りながら雨乞をしたといふ。

15 鳶の淵の雨乞 (北設楽郡)

下川村大字下田では旱天の時振草川の鳶の淵で雨乞を行つた。其日役男は長養院の住職から血脈をうけ、頭に結びつけ、齋戒沐浴して淵のカマの中央まで泳いで行つて血脈を納める。うまく血脈がまきこまれる時は龍神が受納せられたといつて必ず近くに降雨があるといひ、不首尾の時は他の男が代つてつとめる。今もカマは龍神の居る所だといつて泳ぐ時は敬遠する。

大字川角の雨乞は同じ行事をニエ淵のカマで行ふ。

16 雨 乞 祭 (寶飯郡)

赤坂町の宮道天神社の本社は宮路山上の嶽大明神であるが、昔から雨乞の社として知られてゐる。寶永の頃の旱魃にこの嶽大明神に祈つたが靈驗がないので、時の宮道天神社の神官金澤某、宮道天神社にて百萬遍の大念佛を修め、後嶽大明神に祈願をこめると大雨があつた。それから七月二十日を宮道天神社の祭典日と定め、雨乞祭といふ。

17 雨 乞 石 (寶飯郡)

鹽津村大字拾石字岡の拾石神社の傍に雨乞石とて昔から雨乞の祈願をかける大岩があり、これを大嚴雨大師と祀つてゐる。寛永年間の大旱魃に昔からの言ひ傳への如く酒と餅にてこの岩を洗つたところ、大暴風雨となり堤防を破り田畑が荒たのでその後この岩を洗ふことを禁じた。明治二十七年の大旱に先例の如く行ふと果して大雨があつたといふ。

18 竹島の龍神 (資飯郡)

蒲郡町大字府相の竹島の龍神は、昔俊成卿が海底よりひき上げて祀つたといふが、昔雨を祈るときは海岸に篝火をたき、この龍神を祀つた。今でも早魃の時は雨を祈るものが多い。

19 木履石 (漣美郡)

老津村字若宮の海中にある木履石は、昔諸神海を渡りて老津村へ來られた時履かれたものといひ、今海中に見えがくれている。此石の東方神入江といふ所から西南約六町の島地に蓑灣といふ所がある。又その西南に笠山といふ所がある。里人早魃の時木履石、蓑灣、笠山の三ヶ所に雨乞をする。その時の唄に

雨乞はん笠山蓑灣木履石あらばこそ降れ降ればこそあれ

20 白髯明神の雨乞 (漣美郡)

福江町龜山の豊島池畔にある三本松の白髯明神(又白玉明神)を祀つた小社は、昔早天の時近

郷の百姓たち御供を捧げたり、獅子舞を奉納したりして雨を祈ると必ず靈驗があつたといふ。

21 雨引天神の雨乞 (八名郡)

八名村大字中宇利字下川原の天神社は昔から雨乞の靈驗があり、雨引天神ともいふ。昔當社に翁の面が二面あつたが、應永二年早天がつづいた時この面を奉持して雨生山の頂にて雨乞の祈願をすると大雷雨となり、翁の一面は大水のため押し流され、隣國遠江國宇志村に漂着したので、宇志の里人はその面を神寶として氏神に祀つたといふ。それ故現に一面を存するだけである。

(一説に大雷雨が一面を巻き上げ山を越え遠江國宇志の湖中に落ちたが、村人海中に光るものを見つけ不思議に思ひ取り上げ、氏神として今に祀る)

その後も日旱の時は半原領十一ヶ村のものは蓑笠を着て、一人一人雨引天神の旗を押立て、ここに集り二夜三日の雨乞をするが、歸りには、着てきた蓑笠がいるやうに雨が降るといふ。それで降らねば雨生山頂に登つて祈る。

一四、社と寺の話

1 犬 御 堂 (名古屋市)

中區古渡町一丁目の西側に犬御堂といふのがある。本堂には黑白二犬の木像を安置してある。壽永の頃高野山の無關上人が諸國行脚の砌この地に來られたが、身心いたく疲勞して今にも息が絶えようとした。その時黑白の二犬が現はれて、草葉に水を浸して上人の口に注ぐと、上人は忽ち蘇生されたといふ。

一説に寛文の頃尾張公が手飼の犬を引率して遊獵された折、公が疲勞の餘り木蔭に憩はれるとかの犬が瀕りに公の衣を曳くので、従者は犬が公を害するものと思つて刀を抜いて切つた。すると犬の頭が飛んで樹梢に掛つてゐる蛇を喰殺した。そこで公は犬を殺したことを悔い、之を老翁に問はれると、弘法大師の遺跡であると答へたので、公は喜ばれて寺院を御造營になつたといふ。

又、日本武尊が御東征の御砌、道をお迷ひになつた時に、黑白の二犬が現はれて、御導き申し上げたので、後これを祀つて犬の社と言つた。今の犬御堂はその社の名残りだといふ。

2 楊 貴 妃 (名古屋市)

南區熱田は古くから蓬萊宮といつた。俗説に唐の玄宗皇帝が方士をして楊貴妃の魂を求めしめられし所で、方士は蓬萊に至り太眞殿に上つて貴妃に遇ふことが出來た。其所が即ち熱田の社であると言ふ。後小野道風が書いた春蔽門と曰ふのは方士が來てこの門を敲く所から稱したのだといふ。

熱田神宮境内清水社の邊に、昔は楊貴妃の五輪の石塔があつた。昔唐の玄宗皇帝が日本を取らうとした際、熱田の神が貴妃に化して、玄宗の心を亂して日本を討つ謀をお止めになつたのだといふ。

3 辨 慶 傳 説 (名古屋市)

東區千種町元古井の光正院に辨慶が寓して近くの高牟神社へ祈願をこめ大般若經五十卷を書寫

して奉納したといふ。又松七本、フクラシバの樹若干を寄進した。今光正院に辨慶手掘の井戸といふのがあり神社には辨慶手植の松といふがある。

4 鷹 御 堂 (名古屋市)

南區熱田中瀬町にある西福寺は、昔百合若大臣がこの寺の堂上から鷹を放つて鳥を捕へられたから、それより鷹御堂と號し、後には高見堂と呼ぶやうになつたといふ。

5 龍 燈 (一宮市)

市内眞清田神社には大龍命と姫龍命とが併祀されてゐる。昔から下馬橋(勅額門前の石の反橋であらう)のあたりで夜毎に光焰を放つものがあつた。里人は龍が之を點すのだらうと言つてゐた。

6 大山三千坊 (東春日井郡)

篠岡村大字大山に往昔大山峯正福寺といふ大寺があつたが、或る年、叡山の僧兵に攻められ、

堂塔伽藍悉く焼失した。この時末寺大山三千坊も焼き拂はれたといふ。今曆の上で、三、り、ん、ぼ、うとして新築などを忌むのは、三千坊が焼かれた不吉を忌むところから來てゐると言ひ傳へてゐる。つまり三千坊が、三、り、ん、ぼ、うとなつたので、これが全国的に廣まつたのであらうと言ふ。この折住持並に二貴兒も厄にあつた。後、二兒の祟りがあつたので、その靈を山腹の兒權現として祀つた。古來この社は子供の神として、毎年三月十五日即ち彼の二兒の命日に、遠近から破魔矢を奉納する風習が傳つてゐる。

7 子 福 觀 音 (東春日井郡)

高藏寺町の燈明山高藏寺の馬頭觀世音菩薩は、今から七百餘年前に玉野川の邊りに住んでゐた小比企と言ふ漁夫が、常に子の無いのを憂へて、高倉山上の毘沙門天に祈願をこめてゐたが、或る時、靈夢の告で、玉野川の北岸の芳池で網を曳いてゐると、忽ち五彩の燦然たる觀音像が網にかゝつて出現なされたので、小比企は大變不思議に思つて、家に安置してゐたが、程なく男子を授つたので、非常に喜んで、一字の堂を建立して安置したといふ。世にこれを子福の觀音と稱してゐる。又境内にある子安井戸には井戸のぞきの祭事があつて、毎年六月一日には大へんな賑ひ

である。

8 妻の神 (東春日井郡)

品野町大字半田川の東に小祠がある。妻の神といふ。大昔この地に二人の兄妹があつて、共に頗る美貌であつた。それが共によき配偶者を求めたが得ず。遂にそれを求めて旅に出たが、數年を経ても意に適するものが見あたらなかつたので、已むなく故郷に歸つて來たが、却つて其所にて頗る意に叶ふものを見出した。二人は大いに喜んで相近づいて共に語つたところ、それは意外にも數年前別れて旅立つた兄妹同志であつた。二人は大いに之を恥ぢ、發心して往生を遂げたいふ。今縁の神として參拜するものが多い。

9 冬至弘法緣起 (東春日井郡)

高藏寺町大字大留に冬至弘法といふのがある。昔宗良親王が諸國經營に際して、尾張の國篠木庄大留に御駐りになつた砌、供奉の土尾張員元は病のため隨ふことが出來なかつた。宮は大へん氣の毒に思召して、常に御身を離し給はなかつた大國主命の靈像をお授けになつた。員元は謹ん

で拜受し日夜信仰したので、病も遂に癒えた。宮の薨後員元は、其の生地小林村に歸り、氏を小林と改め、後大留村に移り住んだ。そしてその地に一小祠を營み、宮より拜受した像を奉祀して開運徳神と讃して、毎年冬至の日に祭事を行つた。中ごろ中絶してゐたが、弘法大師の御告げによつて冬至講を作つて、祭祀を復活繼續することになつた。そして弘法大師をも副祀した。今は神道冬至教會所となつてゐる。

10 密藏院緣起 (東春日井郡)

篠木村大字熊野にある天台宗密藏院の開山を慈妙上人といふ。上人は伊勢並に熱田神宮の御神託によつて嘉曆三年にこの地に御來化になつた。その年の十月十八日に篠木十七郷の者が不思議にも同時に異夢を見たが、それは一高僧が多數の修學僧を伴つてお出でになる。それを數萬の猿が手に手に松明を振り翳してやつて來るといふ夢であつた。翌朝村人達はそれとなく語り合つて若しや舍宅火災の前兆ではないかと恐れ惑つたが、近くの圓福寺の福智坊の阿闍梨が「猿は山王の使者であるからきつと天台宗の高僧がこの地へお出でになるのだらう。」と説いたので、皆がはじめて安心した。果してその年の十一月十五日に上人は數十人の修學者と共に白牛に乗じて、近く

の「牛毛」にお着きになつた。そこで白牛がぱつたり止つて、しきりに鳴いたかと思ふと忽ち姿を消してしまつた。そしてあとに毛のみが数本残つてゐた。そこでその地を牛毛といふ。上人は牛の消えたのはこゝに止まつて法を布けとの神慮であると御考へになつて、その夜はその野で坐禪をして明されたが、やがて創建されたのが今の密藏院であるといふ。近くの下市場にも「牛附」といふ地名がある。

11 篠木合宿の起り (東春日井郡)

篠木庄は今の篠木村、高藏寺町坂下町篠岡村の一部を含んだ地域だつた。日本武尊が東夷御征伐の歸途篠木の内津に入られると、急使あつて副將建稻種命の薨去を報じて來た。尊は非常にお歎きになつて、内津に命の靈を祀られたのが縣社内々神社の起原であるが、その折篠木の里人は尊をお慰めして熱田までお送り申したさうである。それから尊が伊勢に薨去になり、やがて熱田神宮に御鎮座になつてからも、引つゞき熱田に馬の塔を奉納して、明治維新前後に及んだ。この祭祀を篠木合宿と稱して大した賑ひであつた。後永祿年間に故あつて龍泉寺に変更された。五月十八日がその祭禮日であつた。

12 御養子迎へ (東春日井郡)

味岡村大字久保一色にある田縣神社の御祭神は玉姫の命といふ。この方は御容姿が殊の外美しかつたので、父君も姫君の御配偶の選定には、一方ならぬ神慮を煩はされて、やがて理想の偉丈夫を迎へられた。それが建稻種の命である。姫は夫君との間に、二男四女を得られた。今尙神事の神輿に擔ぐ人形の飾り附も、畢竟、男らしい人物を御養子に迎へさせられるといふ口碑が轉訛して、豊年祭の故事と結びついたものであらうと言はれてゐる。

13 龍泉寺合宿 (東春日井郡)

志段味村大字吉根の龍泉寺へ、馬の塔を奉納する祭禮を、龍泉寺合宿とも、大森合宿とも言ふ。毎年五月十八日に大森村が主催して、近郷十箇村を誘ひ、大森村の大森寺に集つてそこから武者行列をして、龍泉寺に至る。往昔この地方に大旱魃があつた折に、大森村の村民が必死になつて龍泉寺に雨乞をしたことがある。その御利益で大降雨があり、皆が蘇生の思ひをした。村民は大いに喜んでその御禮として、毎年五月十八日に他の村々をも誘つて、馬の塔を奉納した。その後

は雨乞をしなくても豊年には之れを行つて来た。

○ 14 曾野 稻荷 (東春日井郡)

水野村上水野曾野に曾野稻荷大明神といふのがある。昔、盛淳上人が諸國遍歴の砌、薄暮曾野郷の一農家を訪れて、一夜の宿を乞はれた。主人は快くおとめ申したが、深夜別室で人の叫喚するのを聞いたので、上人は訝しんで主人にそのわけを問はれると、「當郷には古來年を経た白狐が出没して里人を惱まし悶死さすので、農民が次第に離散して随つて田園は荒蕪に歸した。今宵は私の妻がそれに煩はされてゐるのです。」と言つて泣いて語つた。そこで上人は可哀さうに思召され祈禱なされると忽ち快癒した。そこで農夫は上人に請うて、田中の社から曾野郷稻荷山に御分身を勧請することにした。其の後この村には、白狐の禍が絶えたといふ。毎年舊二月初午の日には、お祭があつて賽客が多い。

15 お 鍬 様 (西春日井郡)

清洲町田中町にお鍬様といふ祠がある。信長公は武將ではあつたが一面には大へん花卉を賞で

られた。御愛用の鍬がお鍬様の御神體になつてゐる。一時は川上神社内に遷されたが、田中町の裏面が段々衰微に赴くので現地へ戻したところ日を追うて益々發展に向つた。今では田中町の氏神様とまで崇められてゐる。

16 夕 立 祭 (西春日井郡)

西春日井郡では、昔毎年舊八月六日に夕立祭といふ奇祭を行つた。曾つて丹羽郡芝原の馬方が三人、米野通過中大雷雨に出合つた。電光一闪馬方三人の頭上に落雷した。村人がびつくりして駆けよつてみると、一人だけ蘇生して少しも異状がなかつた。當人は勿論、村人も不思議に思つたがこの生残つた一人は常に當地の生田神社を信仰してゐた者で、神様の験驗が現はれてこの一人の馬方だけ助つたといふ。それから奇妙な夕立祭が行はれる様になつたのであるが、現今ではこの日には夕立祭として一般に遊ぶだけである。

17 オコリバツ様 (西春日井郡)

清洲町田中町裏町に普通オコリバツ様と稱へる小祠がある。「藁ヅト」に大豆を入れて供へお願

ひすると、オコリが全快すると言はれてゐる。

○ 18 庚神の妻問ひ (西春日井郡)

庄内町の總兵衛川の流に沿うて數十坪の塚がある。所謂庚申塚である。昔男神の庚神様が、名古屋市西區兒玉町の女神お杓子様を毎夜妻問ひなされた。丁度夜九つ時に、一つの靈火が總兵衛川の堤を往還なさる。神様の機嫌のよい時と悪い時とあつてそれは靈火の色と速さで判別されるさうである。機嫌のよい夜は總兵衛川で魚がよく獲れるといふ。それで里人達は、靈火の様子を覗つて、急に夜中から魚獵におもむく者もあつたといふ。

19 鴛鴦寺由来 (西春日井郡)

春日村の白木橋にからまる一つの哀話がある。昔津の城主藤堂公がこの橋をお通りになつた際、一番の鴛鴦が睦しく泳いでゐた。それを公は旅の慰みにとて白木の弓でお射止めになつた。其の後公の夢に一人の美しい女が現はれて、夫の射られたのをお恨み申した。翌年も亦公はこの橋を通られて、その時も四五羽の鴛鴦を同じやうに射止められたが、何心なく公はその鴛鴦を手

に取つて御覧になると、昨年射止めた鴛鴦の頭が出て來た。公は「さてはこれは昨年自分の夢に現はれて夫の死を恨んだ妻であつたのか。と流石の藤堂公も哀れなことに思はれて、二羽の鴛鴦の菩提を弔ふべく、白弓山鴛鴦寺をお建てになつたといふ。そして鴛鴦を射とめた白木の弓は、永くそのお寺に納められた。其の後寺は廢れたが白木橋のみが遺つてゐる。

○ 異説には太閤の舊將白木忠左衛門がこの川邊を逍遙してゐると、橋の近くに一番の鴛鴦が睦しく遊んでゐた。忠左衛門はそれを弓で射て雄一羽を得た。翌年に又其處を過ぎて今度は雌を射た。それを手に取つて見ると、翼の下に雄の首が抱かれてあつたので、いたく哀れに思つて、菩提の爲に寺を建て、鴛鴦寺といつたさうである。

○ 20 額面の猿作物を荒す (西春日井郡)

清洲町大字須ヶ口の日吉神社に奉納された猿の繪馬がある。之は狩野元信の筆で猿が御幣をかついて居る所を描いたものである。この猿が、畑の豆の實る頃になると、毎朝出で、食ひ附近の農民を困らせた。よつて猿の眼を布で覆ひ、奉納者である伊藤氏に預けてからは、事なきを得た

といふ。因に其の繪馬は毎年の祭禮に神前にかゝげられるが、寶物殿が建立されると伊藤氏より歸るとの事である。

21 二ツ杵神明社 (西春日井郡)

西枇杷島町二ツ杵神明社の大松へ昔落雷があつた。その時祭神は大へん怒つて、金の椀でちよいと雷公をふせられたので、雷公は困り果てたが、祭神は二度と落雷のなきやうにと諭した上放たれた。其の後はこのあたりへ一度も雷は落ちなくなつたといふ。

22 寶國寺の阿彌陀如來 (西春日井郡)

西枇杷島町の寶國寺に、昔支那の某畫伯が寄食してゐたが、明けても暮れても牛の繪ばかり畫いてゐた。或る日妻が外出先から歸宅すると、主人の畫伯は寝てゐたが、其の姿が巨牛のやうに見えたので、妻は早速夫を揺り起してその話をした。すると夫は何事も一所懸命にそればかり描けばその姿に見えるものだと言つたといふ。後この畫伯は阿彌陀如來を畫いてこの寺にのこしたといふ。

23 雨の嫌いな神様 (西春日井郡)

豊山村大字青山の氏神は、雨を嫌はれるから雨乞を絶対にしてはならぬと言ひ傳へてゐる。昔或夏の事、早天續きに困つた氏子はふと氏神に雨乞をしたところ、大雨忽ち來り遂に洪水大氾濫し農作物を失ふに至つたと云はれ、現在も決して雨乞を行はない。

24 伊奴神社の女神 (西春日井郡)

庄内町の伊奴神社の祭神は、女神で、大變綺麗好きで、あの子供の無遠慮と後先構はぬ行爲が御心に叶はないと見えて、境内で遊ばせたり、樹木でも折らうものなら、手厳しい神罰を蒙るのだつた。又この女神は餘り騒ぐのがお嫌ひで、祭禮に山車馬をすると必ず誰かが重傷するので、馬を出さぬやうになつた。境内の一本杉には昔から天狗が棲んでゐて、夜になると火を照したり又火炎となつて、諸方へ飛んだりすると言傳へてゐる。

25 諏訪神社と落雷 (西春日井郡)

山田村上小田井の諏訪神社は、須佐之男命が祀つてある。昔この内に落雷した折、祭神が怒つ

て金網で雷を捕へた。雷神は再び此の地に落ちない事を固く誓つて赦されて去つた。それから此處には落雷した事がないといふ。

26 おそ、様の本家 (西春日井郡)

萩野村大字成願寺に慈眼山成願寺といふ寺がある。此の邊の莊司山田家の菩提寺にて、山田次郎重忠の尊崇篤く、之を中興し、重忠夫妻の自作の木像を安置したもので、後年水難の爲め妻の像は流失し、現に海部郡甚目寺邊にて拾ひ上げられ、寺目寺境内に安置せられ、「おそ、様。」として信仰せらる。

此の像に歸依する者は美容良縁を得るとて、婦女子の信仰するものが多い。

27 戸叩き聖天 (丹羽郡)

犬山町薬師寺に聖天様といふのがあつた。これは法性坊僧正が叡山から借りて安置したものである。或る夜寺の門をことごとく叩くものがあるので、住持が出て見ても人影もない。住持は夢かと苦笑しつゝ房に入つた。明方看經せようとして跪くと、御厨子の扉があいてゐるので、不思議

に思つて内を覗ふと、何時の間にか聖天尊像は叡山へお歸りになつてゐたといふ。

28 今井の氏神 (丹羽郡)

扶桑村今井の氏神は、往昔傳次郎といふ農業の勤勉者を神に祀つて内匠天神と稱したのに由来するさうである。陰曆六月中旬には、害蟲除けをこの神に祈願し、村の十三塚に害蟲を収めたといふ。昔からこの宮の祭禮當日には、お神樂があつて獅子舞などもやつた。この宮が天神社と稱した頃、折々熱病が流行したので神意を伺ふと、傳次郎は獅子や、太鼓が嫌ひであるとのこと。氏子等は、相談の結果神樂をやめる事になつた。天神時代が過ぎて、明治四十年頃、村社に列する爲に石作神社と稱するやうになつた。神樂をやめてから疫病が流行しなくなつたと云ひ傳へてゐる。

29 薬師寺堂 (丹羽郡)

扶桑村齋藤の薬師堂の本尊は、ヤロカ水で流れて來られたものである。キヤラの木で出來てゐる。昔或る僧が伊吹山の鬼を退治に出かけた。僧が「私の衣のひける部分だけくれ。」と頼むと鬼

は承知した。僧は法力で山一ばいに衣をかぶせてしまったので鬼は死んでしまった。鬼が死ぬと同時に織田信長が生まれた。大きくなつて信長は佛教を嫌つて寺を毀させたが、その際この薬師堂だけ取残した。その時信長の命で寺を焼き拂つた、松長大仙守の後裔が今の江口常十郎氏ださうだ。今でも土地ではお盆にお精霊様を送る時に火をつけずに送るといふ。この薬師寺の前の塚はキリスト教信者を殺して埋めたものといひつたへられてゐる。

30 劔光寺 (葉栗郡)

木曾川町大字黒田字寺東に劔光寺といふのがある。本尊は地藏菩薩である。昔頼朝上洛の時この寺に詣で、この像を拜して「自分が伊豆で義兵を擧げた折り夢みた所の像とよく符合してゐる。自分が今平氏を倒ふし兵馬の權を握ることの出来たのは偏に神佛の加護による」と言つてこの寺に田畑を寄附し又寶劔を奉納したといふ。この時から本尊の菩薩が劔を持つてゐられる。頼朝公が薨じた夜、劔光寺の寶劔が光を發したので村人は大へん驚いて馳せつけるとその氣が恍々として、天を衝いてゐたといふ。それから劔光寺の寺號が起つたといふ。

31 以覺寺の天火 (葉栗郡)

木曾川町門間に往昔以覺寺といふのがあつた。或る年東の方から黒田に向つて歩いてゐた一老人があつたが、黒田近くまで来た時、道端に腰を下して煙草を吸はうと思ふと、丁度燧石を忘れたのに氣附いた。たま／＼向ふから松明を點してこちらへ来る一人の百姓風の男があつた。老人は早速この男に火を借りようと聲をかけると、その男は「この火は門間の以覺寺を焼き拂ふ爲の天火だから貸すことは出来ぬ。」と云つてさつさと通りすぎた。老人は不思議に思つて其場を立ち去つたが、暫く行つてふり返へると以覺寺が盛に炎上してゐた。老人は恐怖に慄きつゝ急いで黒田の里へ馳せつけたといふ。

32 來徳寺の朱 (葉栗郡)

淺井町大字河田の來徳寺に昔朱を藏した。これはもと公卿の家に藏されてゐたもので勿體ないとして遂に木曾川へ投込んだ處、こゝから二里下る笠松附近まで川水が鮮やかな朱色に染まつたと言ひ傳へてゐる。

○
 來徳寺の本堂の一室に蚊遣の間といふ部屋がある。大昔からこの室は蚊の居らないやうに封じてあつて、今尙極暑の頃でも蚊が一匹も居ないさうである。

33 さはりの鐘 (葉栗郡)

宮田町の上宮寺にさはりの鐘といふのがある。昔織田信長が叡山を攻めた時この地の住人前飛保村の青山某が従軍し、分奪品として磬とさはりの鐘とをこの寺に奉納したといふ。この鐘は少しも錆びず又僅に叩くも餘韻が長く短い經を長誦し終るといふ。

34 若栗神社と男子御授産 (葉栗郡)

葉栗村島村の若栗神社に男子出産を祈願すれば必ず叶へられるといふ。若し一家に數人の女子のみで男子が無い時には此の神に祈つて末の女子に「ワクリ」と命名すれば次には必ず男子が生まれるとの信仰がある。尾州家七代の宗春公の御側室榮間院殿もこの神に祈つて御男子を得られた。

35 弘法の井と十字路橋 (葉栗郡)

葉栗村島村に弘法堂がある。其の側に清水が涌出てゐるがこの水を大師に供へて祈願し、其れを目に注げばどんな難治の眼病も忽ち全癒するといふ。この堂の北方約一町の所に十字路橋といふのがあるが、昔からこの橋の木片を削つて煎じて服用すれば如何なる病も快癒するといふ。往昔はそれが爲めに橋が削られるので年々修覆を要したといふ。

36 雷除け護符 (葉栗郡)

木曾川町の加茂明神の社殿に昔落雷があつた。加茂明神からは以前より雷除けの護符を下されるにこの事があつたので神官は大いにいらだつて神前に九拜し、雷公今日の所業は如何にも神威を憚らぬ旨をうらみ奉つた。所が神前に御聲があつて「ではとくと取り糺さう」との御告があつた。やがて神前に小雷公がひれ伏してゐた。そこで明神は向後の爲めにもと、御佩刀を抜いて雷公の腕を切り取りなされた。その腕の爪が久しく御神庫に残つてゐた。この里には其後落雷といふことは絶えてなくなつたといふ。

37 大明神社の御神威 (葉栗郡)

木曾川町の大明神社に次の様な傳説がある。昔小牧村に早魃があつて小作問題を生じた折、氏神大明神が白髪の老翁となつて出現され「地主小作の融和を早く圖ればよし、さもなれば村の土地一面を焦土と化して米は申すに及ばず小物一切不作になすべし」とのお告げがあつた。村人達は大いに驚いて其の白髪の老人を見送ると神前でふつとお消えになつたので、村人達は神威のあらたかなのに恐れをなして、忽ち争論を停止し、無事に事がおさまつたといふ。そこで毎年三月五日は村中休日として神社に参拜することになつてゐると言ひ傳へてゐる。

38 櫻の宮 (葉栗郡)

淺井町大字大野郷西に昔「櫻の宮」といふのがあつた。この宮にはカクミ櫻又は夫婦櫻と呼ぶ老樹があつて南と北へ大きな枝を伸ばしてゐた。この櫻は南北の枝が同時に咲かず一年おきに咲いたといふ。その頃の俚諺に「美濃と尾張の國境、枝は尾張に根は美濃に云々」と唄はれた。この櫻の宮附近から南方淺井町大日比野如來堂附近に至るまで小栗判官の馬場だつたと言ふ。

39 獅子と能樂 (丹羽郡)

今井村のお宮の祭禮には昔獅子を出したが、天氣が悪く又死者を出したので、村人は獅子の頭を埋めて、それからはお宮へ舞臺をこしらへて能樂をすることにした。それからは祭には天氣はよかつたが、獅子の方の人は皆死んでしまつたといふ。

40 恩澤寺の聖德太子像 (海部郡)

七寶村大字下田の恩澤寺に安置する聖德太子の尊像は、もと大阪の天王寺にあつた。織田信長の石山合戦の時、京阪地方騷擾するに當り天王寺住職心慶が兵火に罹るを恐れ、尊像を奉じて關東へ下向した。途中此の下田の地に休憩しその出發に際し不思議にも腰が立たない。翌日出立しようとするも亦立つを得ず、之は此の地に奉安せよとの御旨と拜察し、當地に安置されることになつたといふ。

41 藪香物 (海部郡)

上古日本武尊御東征の際、菟目寺町大字萱津の地にお立寄りあり、大根漬を奉獻した所大いに御

賞味あらせられた。其後、阿波手社の竹林中に甕を置き大根漬を謹製して毎年二月、十一月、十二月の三度、熱田神宮に献納したといふ。

42 からやくし (知多郡)

旭村大字南粕谷字中海戸に薬師畑と呼んでゐる畑がある。こゝに昔一つの堂宇があつて参詣する人もあつたが、中に何等佛像は無く世人はからやくしといつてゐた。もとは薬師如来が安置してあつたが、或時成岩の者に盗まれて空になつたのだといふ。成岩町には粕谷薬師と稱する薬師堂があるさうである。

43 一木三體の大日如来 (知多郡)

旭村大字大草の地藏寺の大日如来と、同村大興寺の大日如来と、横須賀町大字養父の大日如来とは行基菩薩により同じ木で刻まれた尊像であるといふ。大草のは最も本で大きく養父のが末で小さく大興寺のは中央であつて、昔から縁日の賑ひは佛像の大いさの反對であるといふ(大草の大日如来は全長五尺二寸の座像で度々の火災に奉遷に困難であつた所から現に車上に安置してあ

り堂の裏口より引出せるやうになつてゐる。)

44 醫王寺の薬師如来 (知多郡)

師崎町大井の醫王寺の薬師如来は、行基菩薩が本郡豊濱町小佐の薬師如来と、三河鳳來寺の薬師如来と一本で三體御刻みになつたものだといふ。

醫王寺が佛山に在つた頃、或夜盜賊が亂入して薬師如来を始め寺寶を盗み去らうとした。薬師如来は怪僧に化身してお防ぎになり賊は退散したが、如来様は右胸に負傷され現に槍傷が残つてゐるといふ。

現在の醫王寺の境内下は、移轉された當時は海岸であつた。石段下は波打際であつて寺から沖を見渡すことが出来た。大井の浦を通る船は、帆を下げて通らないと船が止つてしまつたといふ。それでその不便を除くために如来様を漆塗にしたと傳へられてゐる。

45 粥占の神事 (知多郡)

豊濱町乙方の熊野神社では、昔鎌倉の落人が來て創めたといふ粥占の神事を行つてゐた。舊正

月四日に四つの時、頭分が一同上下を着けて参集し、落人の子孫だといふ齋藤六左衛門と齋藤左右衛門との兩人が七度半の使者（半とは八度目の使と途中で出會ふやうにする）を受けて氏神に出頭する。頭分一同は鳥居まで出迎へる。彼の兩人は上下を着け弓矢を持ち、的場に行つて矢を射る。各七度射て、その的中する毎に數に細い管を取りおき、正月十四日に其の管を粥の中に入れて炊き、管に入る米粒の多少に依つて分合を定め其の年の五穀の豊凶を判断するのだといふ。

46 白山神社（知多郡）

昔加賀國新田氏の落人が十八戸、流浪の旅を續けて豊濱町の地に來て、半農半漁をして住んでゐた。彼等は自分等の産土神白山神社をお祀りしてゐたが、此の神様が蛇を従へておいでになつたので、現に白山神社の附近には蛇が多いのだといふ。（現在白山神社の氏子は家田を姓とする一統である。）

47 岩屋寺（知多郡）

知多郡内海町の岩屋寺の本尊千手觀音は、唐土五臺山に於て文殊菩薩のお告げにより鑄造され

た玄宗皇帝妃楊貴妃の守り本尊であるといふ。

入皇四十四代元正天皇の御宇、知多郡須佐村（豊濱町）の沖に夜々光るものあり、水主藤六といふ者が綱で引上げて見たら千手觀音の尊像であつたので同村極樂寺に移し奉つた。或夜藤六の枕元にその觀世音がお現れになり「我は唐土楊貴妃の守り本尊なり。衆生濟度のため大海の潮に從ひて此の地に來る。是より北に當つて岩窟の靈場あり清淨の地なれば早く此の所に移すべし」とお告げになつて消えた。藤六は岩屋に送ることを惜しみ延してゐたので、度々前の如く枕元に立つてお告げになつた。藤六は恐れて朝廷様に申上げた所、勅使として中納言實直卿をお遣しになり現在の地に本堂伽藍の建立あり、勅命により行基菩薩導師となつて堂供養が營まれた。後弘法大師も當地に巡錫せられ密場の地と思召されたが山地狭く一谷一峰不足として遂に高野山に變更されたのだといふ。

48 帆下げの八幡（知多郡）

鬼崎村大字榎戸の八幡社が昔同村の海岸、鬼ヶ崎にある頃舟が前を通る時帆を下げて通らないと沈没するといふので人々は之を帆下げ八幡といふやうになつた。

49 雷避の御神札 (知多郡)

大高町氷上姉子神社の太々神樂(舊曆二月二十日)の大麻を受けておくと雷が落ちないといふ。之は昔一人の雷神が落ちてぐすくしてゐる中に氷上神社の祭神に捕へられてしまった。雷は色色お詫びしたが赦されず、遂に持つて居た太鼓を證據に取られ、これからは決して大高地内には落ちないといふことを誓つて漸く赦され天上に歸つたといふ。それから大高地内には落雷が無い。今でも太々神樂の御神札を受けておけば落雷しないといふので遠近から受けに来る者が多い。

50 紛失物の判る縣神社 (知多郡)

常滑町字奥條の縣神社は通稱アゲタイ様といふ。紛失物があると、この神様にお願すれば必ず出るといつて信仰されてゐる。野良仕事に出て着物が失つた時、此の神様にお願ひしたら數日にして元の所に返されてゐたといふ。

此の神社の祠のある側に楠の古株がある。昔この大木に船をつないだといふ。

51 藤原景清の觀音經 (知多郡)

壽永の亂後藤原景清は、知多郡大府町大字吉田の地に逃れ來たといふ。芦澤の邊に潜居し常に觀音大師を念じてゐた。一夜夢中に大師自ら觀音經九十六字を授けられたと感得した。之を景清夢想口授の觀音經といひ、半月常福寺に藏す。

52 堀田の稻荷社 (知多郡)

武豊町の堀田稻荷社の林中に、昔長兵衛狐といふ稻荷様のお使の老狐が棲んでゐた。長尾の人中川忠左衛門氏其の附近にある田の耕作の都度、所持する辨當をその老狐に分ち與へ愛撫する内神靈の加護を蒙つて不思議にも氏の豫言は何でもよく適中するやうになつた。それがため遠近より氏に神占を求め人多く、爾來稻荷社の神徳を慕つて参拜する者が多くなつたといふ。

53 神明社の鬼祭 (豊橋市)

中八町縣社神明社の例祭は二月十四十五の兩日であるが、この祭を鬼祭といひ日出神樂に始り

射的、ならし、鼻高と赤鬼の争、鼻高の薙刀舞、ボンテンザラ、チンバ踊、鼻高の神樂、四天師の神樂、神樂兒の神樂、笹良兒の神樂、榎玉争、神幸の神事があるが、このうち俗信として特殊なものを挙げる。

射的の神事

射的の神事は神人が裏に鬼と書いた的を射るのであるが、最後の矢が放たれると見物の群衆は的を奪ひ合ふ。これを得たものは魔除として門にはり、又害蟲除とて島につるす。

榎玉争

榎玉争は榎の幹を二尺位に切り注連で結んだものを、榎の秀枝で造つた御釣で両方から引き合ふ。これはその年の農作物の豊凶を占ふので、福地(低地)が勝てば、雨が少なく低地の農作物が豊饒で、干地(上地)が勝てば雨が多く、高地の農作物の豊饒を示すといふ。この榎玉を漁場に投ずると農漁があるといふので、以前は渥美郡の漁師等が争つて請ひに来たといふ。

御王

今川義元の寄進になるといふ御王(獅子頭)の口髭は毎年新たに造る。もとは「おひげむかひ」

といつて、舊曆正月十三日の未明朝倉川の飽海口の橋のあたりで通行の馬を待ち、その尻尾を抜いて造つた。尻尾を抜かれた馬には御飾餅を與へたといふ。

談合の宮

お王が談合の宮に着くと神殿の扉を開いてお王を向ひ合せその口を三度噛み合せる。これは談合の宮の祭神とお王とが其年の農作物がよく採れるやう相談(談合)なさるといふ。談合の宮の名もそこから起きたといふ。

54 天神社の神像 (豊橋市)

新銭町天神社天神社縁起に依ると、この社の神像は昔羽田村の邊へ潮にて流れてゐたのを拾ひ石塚に社を建て鎮座してゐたが、天文元年岩崎玄朝が今の場所へ移した。玄朝伊勢神宮へ年詣をする事七度、或時宇治橋にて一老翁に逢ふ。翁、紀長谷雄より傳へた菅相公自作の靈像を與へ、本國に歸り先の神像と合座して崇らば國家安泰祈願成就又火難をまぬがるべしといつて去つた。玄朝はこれを守奉りして歸つた。今在す靈像がこれである。

55 石田神明社の御饌 (豊橋市)

花田町石田の神明社では毎年例祭に小麦で造つた食物を供へるが、もとは小麦の御饌として奉つたといふ。それは昔持統天皇がこの地に行幸の砌、神社の南に銀杏の木があり、その下に座するに席がないので大石臼の上に座を設け、當時飢饉で奉る米がないのでカラコ(小麦の粉)を献上したといふ。それから神社の御饌にはいつも小麦の粉を用ひるやうになつたといふ。

56 吉田神社の神輿 (豊橋市)

關屋町にある吉田神社の神輿は今川義元の寄進したもので毎年の例祭には氏子でない魚町のものが昇ぐ。これは今川義元・氏真が魚町の氏神である安海熊野神社に社領を寄進して居り、又その境内で行はれた魚市場から二歩をとることを義元より許されて居たので、これ等の恩恵をうけた魚町の者達が義元の爲に、この神輿を昇ぐことを名譽にしたに始まつたであらうといはれる。神輿は魚町以外のものでは決して上らぬといふ。

57 鞍掛神社 (豊橋市)

岩崎町にある鞍掛神社は初め鞍馬大明神と呼んでゐたが、建久元年頼朝上洛の時、この地を過ぎ當社に参詣して自ら鞍を奉納したので、それから鞍掛神社といふやうになつた。

58 道知邊稻荷 (豊橋市)

東田町出雲分院の西隣にある道知邊稻荷神社は、もと旭町三番丁に祀られてあつた。昔吉田藩(豊橋藩)の同心某が江戸へ赴く途中箱根山中で道に迷つた時、道知邊稻荷を念じたところ、ポーツと人影が現はれたので、その後について行くと街道に出ることが出来たといふ。

59 蓮如上人の鬚 (岡崎市)

美合町本宗寺境内に枝振の良い老松があつて、其の下に高さ一米程の古石が立つてゐる。此の石の上半部に鬚の如きものが點々と附着してゐて、土地の人は蓮如上人の鬚と云つてゐる。上人が修業の途路此處に休息なされ、其の時剃りなされたものであると。

60 富永の田植観音 (碧海郡)

矢作町大字富永の觀世音像は僧行基の作と傳へられ、俗に田植觀世音と云ふ。或年惡病流行を極め田植をすることも出來ず、村民一同大いに困惑してゐた。ところが或朝一面の水田に青々と早苗が植つて、田植は皆終つてゐた。村民が此の不思議に驚いて觀世音に参拜したら觀世音は體全體泥にまみれて居られたので、さては此の觀世音の御助力に依るものと一同深く感激した。

61 林松寺不動明王 (幡豆郡)

室場村大字室村林松寺の白檀不動明王は靈驗いやちこで、盜賊が入れば直ちに足すくみ身體が動かなくなると云ふので、昔から當寺には一度も盜賊が這入らないと云はれてゐる。明治初年に一盜賊が此の寺を窺つたが遂に果さず、其の後他家に押入つたが間もなく露はれて生理の刑に處せられたといふ。

62 光り佛 (幡豆郡)

豊坂村大字須美の如意寺に安置する光り佛は、往古茶白山の光る堂に安置されてゐたものであ

る。茶白山廢城後は堂宇の廢れて此の尊像も雨露にさらされてゐたが、常に金色の光明を放ち暗夜も遠方まで照らした。幡豆郡の漁夫等は之が爲に漁獲が減少して困り果て、堂の扉を閉ぢたり佛像の背部を斧で割りなどしたが何の効もなく、益々光り輝いた。世人は之を光り佛と呼んだ。其の後漁夫等の願で山の北麓の平原村の林中に安置されたが、後又須美神社の境内に遷し奉つたといふ。

63 西尾城内に雷の落ちない事 (幡豆郡)

西尾町の舊城内に鎮座します御劍八幡宮へ、昔雷が落ちたことがあつた。雷は八幡様に取押へられてしまつた。そしてすんでのことに天へ歸れなくされるところを、太鼓を取上げられたゞけで命を救けて貰つたのである。その時「此の度だけは救けてとらせるが、以後決して西尾城内に落ちるではない」と懇々と戒められたので、今でも西尾城内(やがて西尾市街部)へは落雷しないのであると云はれてゐる。今から十年程前西尾町大字鶴崎天神社境内の松の木に落雷したことがあつたが、その時老人達は「世が薄情になつたので西尾町内に落ちたのだ。然し御劍八幡宮境内には決して落雷することは無い」と言つてゐた。

64 田植観音 (橋豆郡)

豊坂村大字六栗の観音寺の本尊を俗に田植観音と申す。昔此の里に深く観音を信仰する老婆があつた。或る年人手が少ないので田植が人並よりも遅れた。老婆が之を心配して観音に祈願を籠めた。或る日此の老婆が唯一人で田植をして居ると、一人の老婆が来て手傳つてくれた。夕方になつて田植が終るとその老婆は「暇申す」と言つて、傍の松の枝に飛び上つたまゝ姿が消え去つた。その夜の夢枕で前の老婆は観世音菩薩であることを知つた老婆は、心から隨喜の涙に咽んだと云ふ。

65 薬師の抱地藏 (額田郡)

福岡町土呂新町の薬師寺の地藏に種々のお伺を立て、後に此の地藏を抱いてみて若し輕ければ善く、重ければ悪いと云ふ。

66 片目の不動 (額田郡)

藤川村大字市場の明星院には片目の不動が安置されてゐる。昔徳川家康が今川方の將鶴殿長持

を攻めた時、岡崎勢は戦利あらず隊伍を亂して退却し初めた。長持は之を見て「それ、全滅させよ」と激しく押寄せた。此の時遙か岡崎軍の方に當つて白衣の怪人が現はれ、何處とも知らず何百何千の矢が一度に鶴殿方に向つて射出された。敵はこの爲慘々に打敗れ、總崩となつて退却した。岡崎勢は之に力を得て再び追撃を初めた。逃げ去る敵中に一勇將があり、一人踏み留まつて一心に矢を放つてゐたが、その一矢が遂に白衣の怪人の片目に命中した。それと共に怪人の姿は消えたが岡崎方に思はぬ大勝を得た。家康は大いに喜び、必ず日頃信仰し尙今度の出陣に際しても戦捷を祈願した明星院の不動明王の御加護に依るものと信じ、早速参拜したが果せるかな不動明王の片目が無かつたと。

67 菅原天満宮 (西加茂郡)

猿投村大字越戸の菅原天満宮には昔から雷が一度も落ちたことが無いといふので、舉母藩主も毎年の祭典に特使を差遣はされた程である。祭神は底風呂を厭はれ、若し氏子中で底風呂を据ゑつける者があれば神罰を受けるといふので一戸として此の底風呂を据ゑ付けて居る家はない。

68 雪を降らす田峯観音 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯の田峯観音の祭にはたとへ一片でも雪が降ないと氣嫌が悪いといふ。徳川四代將軍の頃、お林とて幕府直轄の段戸山から盜伐をした村人があつた。この事が代官の耳に入り檢分に来ることになつたので、村人は前非を悔ひ、村人擧つて観音堂に参籠して「誓願成就したら、村三軒になるまでも祭には芝居を奉納する」と祈願した。當日になり、代官は段戸山の萱の撓といふ所まで行くと、六月の土用といふのに全山雪に埋れてゐたので「こんな寒い所へ盜伐に来る筈がない」と引返したので、村人は罪人を出さずにすんだ。それから毎年正月十八、十九日の祭には奉納芝居をやつた。

69 淺草寺観音 (北設楽郡)

田口町大字小松の杉平地内には昔十一面観音が祀つてあつたが、通りかかりの六部が背負つて來た観音像と取かへて行つた。六部はその尊像を江戸吉原田圃のほとりに安置したところ、靈驗あらたかで名高くなつた。今の淺草寺の本尊がそれで、その尊像の背には「三州杉平」と刻んで

あるといふ。

70 石 神 (北設楽郡)

下津具村の「實の子」から約五町だら／＼坂を登りきつた處を堀割と呼び、縣道が小山を堀割つて通つてゐる。その傍に石神様と呼ぶ小祠がある。昔伊奈街道をたどつて來た浪人の親子が、この實の子まで來て飢と疲れに倒れたが親切な大桑の村人に救はれ、ここに小屋を建ててもらつたが、十日程してその甲斐もなく浪人は死んでしまつた。娘はそれから父の菩提を弔ふため巡禮となつて廻國に立つたが、數年してから再びこの地に尋ね父の墓に詣でたが又廻國に立つた。それから人々は浪人の墓のことなど忘れてゐると、數年後疫病が流行した時、大桑の組長の夢枕に立つた浪人は生前の禮をのべて、「年一度の供養をしてくれるなら、疫病をしづめやう」といふ。そこで村人とはかつて今にのこる一字を建てた。すると疫病は止んでしまつた。それから大桑の人たちは年一度の供養をかかしたことがない。

71 砦山神社 (北設楽郡)

豊根村大字坂字場の砦山神社は、昔尹良親王が賊兵に追はれ、この砦山に陣し敵兵を防がれた

所である。今でもこの山は洗足で上らねばならず、又女は上ることが出来ない。境内近く釜有場といふ所があるが、これは尹良親王の軍の飯を焚いた大釜のあつた所といふ。

又昔、字日余澤に疫病が流行したとき、村人は鳥を供へて、「疫病をはらつて下されば以後鳥を飼ひません」と誓つたが、後村人の一人鶏を飼つたので、鶏は死し、自分は病み、家は破産したので、今でもこの字では鶏を飼はない。

72 徳左 観音 (北設楽郡)

武節村大字富永にお燈明とお茶を献じてお祈りすると、子供の夜泣を止めて下さるといふ徳左観音がある。このお使は大きな青大将であるといふ。

73 雨を止ます神社 (北設楽郡)

武節村大字黒田の氏神明社は、村人長雨で困る時、社前で三日間毎夕火を焚き祈願すると雨を止めて下さると。

74 大村 様 (北設楽郡)

御殿村大字月の御殿山頂上にある大村神社の祭神は手塚太郎光盛の孫千代姫であるといふ。村人は大村様又大村千代の御前といふ。木曾義仲が破れ、光盛は園村の尾々に土着したと傳へられてゐる。千代姫は眼を患ひ、尾々村を出て分家である御殿村尾籠の金指家を訪れたが、途中道に迷ひ、村人の悪戯から違つた道を教へられ遂に御殿山の途中で行き倒れて死んだといふ。そこで村人は頂上に祠を建てて祀つた。又一説には千代姫眼病平癒を祈るため御殿山へ登る途中で倒れたともいふ。舊暦九月十五日の祭には眼病患者の参拜するものが多い。

75 神社を毀く (北設楽郡)

御殿村大字月から振草村神田に通ずる道、月川の對岸に足瀬といふ所がある。一名鳳の脇とも呼ばれる此處には昔壯大な神社が建つてゐて、附近十數ヶ村の郷社であつたさうである。或時氏子の争論となり、とうとう御神體や社殿を毀してそれ／＼村へ持ちかへつてしまつた。又寺院もあつたがそれも田口町へ移つてしまつたといふ。

76 子供の好きな観音様 (北設楽郡)

御殿村引田のあみだ堂の観音様は子供が好きで、昔、子供がこの観音様を持出し前の田で縄し
ばりにして引づり廻してゐるのを、村人がひどく叱つたさうである。すると其人は病氣にかかつ
たので、これからは子供の自由にさせますからと観音様に詫びたらすぐ癒つたさうだ。數十年前
の大風にお堂が倒れたので新しく建てかへ子供の入ることを禁じたら、大風が荒れたり、作物が
とれなかつたりしたので、子供の入ることを許した。だから今の観音様に鼻が缺けたり手足がち
ぎれたりしてゐるが、誰もとがめるものはない。

77 じゃどく様 (北設楽郡)

三輪村大字奈根、中河内の「おかた」(屋敷名)の傍にじゃどく様と稱へる小祠がある。以前は
不浄中の女が傍を通ると祟があるといつたものださうだ。此のじゃどく様といふのは、伊藤丹波
守の側室がおかた屋敷に住んでゐて、丹波様との仲もむつまじかつたが、附近に棲んでゐた白蛇
が側室を慕ひ、或日うたたねをしてゐるうちに、白蛇にみいられてどうすることも出来ず、遂に

狂ひ死んでしまつたさうである。この側室を祀つたのがじゃどく様であるといふ。

78 飛ぶ御神體 (北設楽郡)

本郷町大字本郷、三ツ瀬の氏神様は村の中程にある。昔この御神體が山一つ越えた奈根村河内
の長峯社へお飛びになつた。それで、それまでお祭もし田樂もあつたが、其の時限り田樂面は
「みやんした」の畠中へ埋め、今も村人は其處を面塚といつて盆と正月には二つ木や香の花を供
へる。又田樂のササラや鈴を埋めた所は「ガランサマ」といつて小さい石祠があり近所の人達が
祀つてゐる。其後は三ツ瀬の氏神様は河内の長峯社にあつて、毎年霜月十六日長野(神主の家名)
の田樂祭には三ツ瀬から庄屋なり組頭なりが、村人を連れて参加したといふ。それが又明治初年
花祭の争から、三ツ瀬の元氣者七人が、長峯社から御神體十一體と經文六百卷入の箱を持出して
来て、村へは「氏神様がお飛びておいでた」とふれを出したので、皆驚き恐れて今の西の森にお祭
りすることになつた。それから議論になつたが、結局御神體はかへさず又お飛びになつたことに
したといふ。

79 大金様 (北設楽郡)

岡村大字足込字橋場の道端に大金様といふ碑があり、傍に祠を建ててお祀りしてある。それは昔旅人が罌丸の病で歩行困難となり、ここに倒れて死んだ。村人の手によつてここに埋葬せられ、その後世話した人の夢枕に立つたとかで祠を建てて祀り、疝氣などで悩む人が願をかけるとよく癒るといふ。

80 高松馬頭觀世音 (南設楽郡)

作手村大字高松養松寺境内にある馬頭觀世音は、昔紀州熊野にて行基菩薩の刻んだ觀音像の端片を海中に投げたのが渥美郡小松原に流れつき小松原觀音を作られたが、その殘餘にて作つたものと傳へられる。むし齒、いぼ等をなほすといふ。

81 若宮社 (南設楽郡)

作手村大字大和田へ大阪落城の頃徳川方より從軍者を二人出せとお達があつたので、庄屋は總

寄合にかけ相談の結果貧乏な家の掛人を金で買つて出すことにしたが、この二人出發の時、戦死したらお宮に祠を造つて祀つてくれと言ひ残して行つたが、そのまゝ歸らなかつたので、若宮社として祀つた。

その翌年又三人出かけたが、今度は皆丈夫で歸つて來た。

82 白鳥神社 (南設楽郡)

鳳來寺村一色と鹽瀬に白鳥神社がある。日本武尊は蝦夷征伐の歸途伊勢にてなくなられ、白鳩に化して今迄御通過遊ばされた地に舞つて行つた。その鳩がとまつた所々へ白鳥神社を建てて尊をお祀りした。

83 白鳥様 (南設楽郡)

作手村清岳宇市場の古宮の邊に昔鍛冶があつたが、日本武尊様が岡崎の矢矧川の邊で矢を矧がれ、これより作手に登られこの鍛冶で鐵を作られ大和田の川を越えて東國へ行かれた。この御方を白鳥様といふので、作手の平や大和田の川筋には白鳥様をお祀した社が多いといふ。

84 報恩寺 (寶飯郡)

小坂井町大字小坂井字平口報恩寺の本尊千手観音像は、大同二年弘法大師巡錫の時この地に到り、老翁土佛の観音を信ずるを見て、自ら幼時の御作一千體佛と知り、更に靈木にて一佛を刻み、堂宇を建て開眼供養なされ、關東に下られた。歸途御立寄になると老翁物故されてゐたので、高野山より報恩法師の徒弟を請じ、年號と師名をとり、大同山報恩寺といふ。

85 菟足神社の鐘 (寶飯郡)

小坂井町大字小坂井字宮脇の菟足神社は應安三年の銘のある鐘があるが、この鐘は昔、神社の前一帯が入海で、夜毎水にうつる社頭の燈が美しかつたので龍宮城の乙姫が一對の寶鐘の献納を思ひたれた。そして雄の鐘は神社の南の地から見出されて掘出されたが、雌の鐘は掘出されることを嫌つて深く地中に没した。それで雄の鐘をならすと、地中から雌の鐘がこれに和して鳴りひびくといふ。

86 菟足神社の大般若經 (寶飯郡)

小坂井町大字小坂井字宮脇の菟足神社にある大般若經は、安元元年辨慶東國へ下らんと渡津の里まで来た時、出水してこの地に七日逗留、その間に書寫したものといふ。

87 篠東神社 (寶飯郡)

小坂井町大字篠東字西宮の篠東神社は初め大國主命がお祀りしてあつたが、長徳元年に疫病がはやり村人が數多死んだので、牛頭天王を勸請せんと、神輿を奉じ神社の西神坂の傍の老松の根元でひと休してゐると、何處からともなく白鷺の大群が来て松にとまり、松の縁もかくるほどであつた。それからこの松を鷲榮の松といひ、神坂を鷲坂といふやうになつた。かくて牛頭天王をも祀つてから疫病はあとをたつた。今は二柱の神が祭神として祀られてゐる。

88 田植觀音 (寶飯郡)

前芝村大字日色野神泉寺のものと本尊は田植觀音であつたが、乘馬の武士がこの前を通ると馬

が進まなくなるので、観音像を寺の奥に移し、阿彌陀如來を祀るやうになつてから、そのことが絶えたといふ。

89 不動院の鐘 (寶飯郡)

大塚村大字相樂不動院の鐘は、村に死人があると深夜唸るといふ。又漁師は海上で大風に遭つた時はここの不動を念ずると助かるといふ。

90 榮善寺の大日佛 (寶飯郡)

長澤村字御城山榮善寺に安置する大日佛は弘法大師御作と傳へられてゐる。昔長澤村霧山の麓の藤原某といふもの、その子呷市が盲であることを大師この地に巡錫の際歎き訴へたので、大師は一體の大日佛を刻んで授けられた。親子はその大日佛に祈ると兩眼が開いたので、謝恩のため一字を建て西興寺と稱したが、その後享祿三年に山崩あり堂宇残らず流失して當村字岡前に止つた。そこから毎夜光明が顯はれ榮善寺の方を指すので、遂に大日佛をさがし出し榮善寺に安置するやうになつたといふ。

91 稻村神社と神石 (寶飯郡)

西浦村字稻村にある稻村神社は新田義貞藤島に戦死後、その家來浪人となりこの村に來たが、この地が鎌倉の稻村ヶ崎の地形と似て居るとして稻村神社を建てたと傳へられる。神前の海中に二子石又神石と呼ばれる石があり、漁夫誤つてこの岩に竿さすと不吉なことがあるといはれる。又二子石より十間程北に車石とて二つの石があるが、この石も尊ばれてゐる。そして

こゝは稻村御前の下よ。もちと帆下げてたか走れ

と漁師に唄はれるやうに、この神前を通る帆船は帆を下げて通る。又當村の漁夫は出漁の時船中より御酒を捧げて遙拜し大漁を祈る。

92 神様の引越 (寶飯郡)

八幡村大字平尾字駒場の金毘羅の右に空地がある。これは昔稻荷が鎮座されてゐたが、あることで二神が不和になられたので、村人は大變であると稻荷を星野神社の境内の今の場所に移した。

93 縁結び大黒 (實飯郡)

蒲郡町大字五井長泉寺の大黒天は、紙よりを兩の小指でその格子に通して結ぶと良縁を得、想ふ人に慕はれると。

94 疣神様 (實飯郡)

蒲郡町大字五井字東郷に醫王神又の名を疣神様とて、この岩の水を疣につけるとすぐ癒るといふ神様がある。その起は昔藩主松平主水頭の姫が疣に悩み、藥の効がないので、易にしたがひこの神に詣で岩上の水を塗つたらすぐ癒つたのに始まるといふ。

95 雙線神社 (實飯郡)

一宮村大字東上字權現にある雙線神社は安産の神として、小さい蓑に糸を卷いたものや、底のない桶を献する。

96 金剛瀧薬師 (實飯郡)

一宮村大字西原字岡ノ山の金剛寺の金剛瀧薬師は行基菩薩が御巡國の際、この西原の地に足をとどめ自ら醫王尊像を刻まれ薬師堂を建立なされたものといひ、人呼んで子授薬師又子育薬師とす。

文祿年中吉田城主池田侯の臣梶浦勘兵衛年老いて子がないのでこの薬師に祈ると直ちに相續人を得たといふ。

97 犬頭神社 (實飯郡)

八幡村大字千兩の犬頭神社には今昔物語の次の説話がそのまゝ傳はつてゐる。

參河國始犬頭語

今は昔、參河國××郡に一人の郡司有けり、妻を二人持て共に蠶養をせさせて糸多く儲ける。而るに本の妻の蠶養何なる事の有けるにか、蠶皆死て養得事無りければ、夫も冷がりて不寄付一成にけり。然れば從者共も主不行成にければ、皆不行成にければ、家も貧く成て人も無く成ぬ。

社と寺の語

然れば妻只一人居たるに、従者僅二人許なむ有りける、妻心細く悲き事無限、其家に養ける蠶は皆死にければ、養蠶絶て不_レ養けるに、蠶一つ桑の葉に付て咋_レけるを見付て此を取て養けるに、此蠶只大きに成れば、桑の葉を攫_レ入れ見れば只咋失ふ、此を見に哀に思えければ搔撫つゝ養ふに、此を養立ても何かはせむと思へども、年來養付たる事の此三四年は絶て不_レ養けるに、此く不_レ思に養立たるが哀に思ければ、撫養ふ程に其家に白き犬を飼けるが、前に尾を打振て居りけるに、其前にて此蠶を物の蓋に入て、桑咋を見居程に、此犬立走て寄來て此蠶を食ふ、奇異妬_レ思ゆれども、此蠶を一食たらむに依て犬を可_レ打殺_レに非ず、然て犬蠶を食て吞入て向ひ居たれば、蠶一つをだに不_レ養得_レて、宿世也けりと思ふに、哀に悲くて犬に向て泣居たる程に、此犬鼻をひたるに、鼻の二つの穴より白き糸二筋一寸許にて指したり、此を見て恠くて其糸を取て引ば、二筋乍ら絡絡と長く出來れば、篋に卷付く、其篋に多卷取つければ、亦異篋に卷に亦×××ぬれば、亦異篋を取出して卷取る、如_レ此して二三百の篋に卷取に盡もせねば、竹の棹渡して絡懸、尙其にも盡せねば桶共に卷く、四五千兩許卷取て後、糸の畢被_レ絡出ぬれば、犬倒て死ぬ、其時に妻此は佛神の犬に成て助け給ふ也けりと思て、屋の後に有島の桑の木を生たる本に犬をば埋ぬ、然て此糸をば細め可_レ遺方無して繰_レふ程に、夫の郡司物へ行とて、其門の前を渡ければ、家の極て×氣にて

人氣色もなければ、××に哀と思て、此に有し人何にして有らむと糸惜く思ければ、馬より下て家に入たるに人もなし、只妻一人多の糸を絡居たり、此を見るに、我家に蠶を養富て絡懸る糸は黒し、節有て弊_レし、此糸は雪の如く白して、光有て微妙き事無限、此世に類ひなし、郡司此を見て大きに驚き、此は何なる事ぞと問へば、妻事の有様を不_レ隱語る、郡司此を聞て思はく「佛神の助け給ける人を、吾愚に思ける事を悔×、やがて留りて今の妻の許へも不_レ行して棲けり、其犬埋し桑の木に蠶隙無_レ満を造て有、然れば亦其を取て糸に引に微妙き事無限、郡司此糸の出來ける事を、國の司××と云ふ人に語て出したりければ、國の司公に此由し申し上て、其より後犬頭と云糸を彼は國より奉る也けり、其郡司が孫なむ傳へて、今糸奉る竈戸にては有なる、此糸をば藏人所に被_レ納て、天皇の御服には被織也けり、天皇の御服の斷に出來たりとなむ人語り傳へたる、亦今の妻の本の妻の蠶をば構て殺たると語る人も有、慥に不知ず、此を思ふに前世の報に依こそは、夫妻の間も返合ひ、糸も出來けれど、語り傳へたるとや。今昔物語、本朝の部、卷第十六第十一）又碧海郡にも犬頭社があり、やや型のちがつた傳説がのこつてゐる。(五、石の部、桑子のおこり石参照)

98 岩屋堂 (温美郡)

二川町大字大岩の岩屋堂の開基は行基菩薩といふ。天平二年菩薩この地に到り靈感あり。香木を求めて十一面御丈一尺一寸の千手観音を刻み、一小堂宇を岩洞に作り尊像を安置し本堂としたと傳ふ。

99 岩屋観音 (温美郡)

二川町にある岩屋観音には次のやうな靈驗あらたかな話が傳へられてゐる。
かつて備前の國主池田綱政が先の宿へ泊つた時、夢に岩屋観音が現はれ「今宵必ず海嘯あらん早々この處を立退くべし」とお告があつたので、直ちに汐見坂まで立退いた利那大津浪が襲つて來たので、それから候は深く岩屋観音に歸依し參觀交代の途次必ず禮拜されたといふ。

100 岩屋観音の濡佛 (温美郡)

二川町にあ 岩屋観音の濡佛については次の様な話が傳へられてゐる。

吉田大橋(現豊橋)の何時ぞやの普請の時、江戸下谷の棟梁善右衛門茂平の兩人がこの工事を請負つたが思ふやうに果取らないので七日この岩屋堂の観音に祈願をかけた。或夜この大川に一筋の繩の流れる夢を見てふと橋の反り加減を思ひ浮べた。そこで繩を川に張り渡し、水勢で繩が弓のやうに曲るを見て、或は繩を引き、或は緩めて其の反り加減を試み遂に成功して立派な大橋が出来上つた。棟梁はこの観音の徳に報ぜんとして江戸にて「岩屋講」をつくり、一丈二尺の濡佛を鑄造、これを岩屋山上に安置したといふ。

或時備前侯の槍持が三間柄の槍をかついで巖上に登り「かねてこの御像は丈六と傳へられてゐるがこの槍ではかつて見よう」と云つて槍を濡佛に比べやうとした時、八十尺の巖上から眞逆さまに墜落して死んだので、それから御文をはかるものはないといふ。

又一説には満願の夕異僧現れ、對岸に綱を張り其の孤のたゆみを上に向け、其の角度をもつて勾配とせよと。命の如くにするに美事完成し、その報恩のために観音の銅像を造つたといふ。

101 伊寶石神社 (温美郡)

二川町大字大岩にある伊寶石神社は、その社殿の後の巨岩の上に奥宮があり、その傍の窟の水

溜はどんなひでりにも乾くことなく、これを疣水といふ。里人疣を除くに効ありとこの水を用ふ。

102 東 観 音 寺 (渥美郡)

二川町大字小松原の東観音寺は天平四年四月十八日行基菩薩熊野へ詣で七日祈願し靈告を得てこの地に來り、五年正月十八日海岸にて熊野權現白馬に乗じて來現、白馬化して一株の靈木を得、自ら馬頭觀世音を刻み十八日を一字として東観音寺と名づけた。後其の餘木を堂前に建て風雨に朽ちないことを誓つた。今堂前の御衣木がこれである。

103 牛と紫雲英の嫌ひな氏神 (渥美郡)

老津村の氏神は紫雲英が嫌ひなので、この村では決して紫雲英がそだたぬといふ。又この氏神は牛を喰べること、飼ふことを好まないのもとは決して村中牛を飼はなかつた。子の刻に氏神へ参ると牛の型をして社殿にうづくまつて居られるといふ。

104 長興寺観音 (渥美郡)

田原町大字大久保の長興寺に、惣高さ三尺七寸五分、珍らしい手法を以て横彫にせられた觀世音菩薩の木像がある。其の彫刻の手法から見て鎌倉時代の作であるが、其の傳統によると渥美郡に行基作の觀音が七體あり渥美七觀音と稱する。七觀音は行基が一木を以て刻んだもので、長興寺のが一番本で、東觀音寺のが一番うらで作られたのである。この長興寺觀音はもと寺の後山にあたる觀音山と稱する山の頂上にあつたのであるが、表海も裏海も見えるから、時々この觀音様が沖を走る船をお止めになつて困るので、いつのころか頂の御堂を山腹に遷した。後又御堂の腐朽と共にこれを長興寺の本堂に移した。處が時々本堂で荒れ廻るので、境内に觀音堂を造つて安置するやうになつて觀音様も靜かになられたといふ。

105 城寶寺辨才天 (渥美郡)

田原町城寶寺辨才天は弘法大師がこの巖窟内に於て一千日護摩の大業を勤められ、その滿行の時護摩の灰を用ひ二十一日の間に辨才天像と十五の童子を練り固め造り給ふたもので、後永祿七年徳川家康此の洞中に難をさけられ、これ辨才天の加護するところと七十石を給はり、寺號を辨天山城寶寺と下し給はれた。